

534
107

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

始



90
72



林 天然 著

總
の
偉
人

多田屋書店出版部出版

大正
14. 9. 11
内交

凝

光

每文題

弁言

畏友林壽祐君は、篤學の士なり、博く古今の史傳に通じ、遍く房總の史籍を涉獵す。曩に房總叢書、房總小觀、房總名所文學、佐倉誌等を著して、世人を益せしこと多し。今亦「房總之偉人」を著し、青年をして感奮興起せしめんとす、其志や偉なりと謂ふべし。由來房總半島の地は、氣候風土人文に適し、古來我國政治の中心地に接近して、偉人傑士鬱然として輩出せり。随つて名蹟史料の保有頗る多しと雖も、然かも尙未だ闡明研究せられざるもの少からず。最近に至りて、上總國分寺大塔趾の發掘、興津町守谷の洞窟住居遺跡の發見、手賀沼底丸木舟の引揚、大網町上總式横穴の研究の如き、其數例に過ぎず。林君の此著は啻に青少年を激勵するのみならず、房總研究の好

指針たるべく、予輩史蹟の研究を企つる者も、亦此著に頼る所、頗る多かるべきを信ず、茲に所懐を述べて江湖に薦む。

大正十四年一月

房總史談會幹事 高野松次郎

凡例

一本書は編者が多年來蒐集したる房總人物志料より、各部門に亘り、其人格の偉、事業の大、藝術の長、言行の美なる者を選択して、掲載せるものことす。

一房總の名族たる、平氏をはじめ、千葉、足利、里見、結城、白井、正木等の諸氏族中、人物の擧ぐべきもの少からざれども、是等は別に房總名族誌と題し、後日編纂せんと欲す。故に武將の如き、本書一も載する所なし。

一人物の撰擇に就きては、或は其當を得たりと爲しがたき者もあらん、然れども一々之を衆評に問はんか、甲是乙非、殆ど歸着する所なきを以て、編者は此に自家の所見を以て、狭き房總三州に於て、相應の人物と信ずるものを撰びたり。

一本書は、人物を月日するものに非ず。又文辭の潤飾を避け、たゞ經歷の一斑を眞面目に傳ふるにあり。詳細を知らんと欲するものは、各文末に引用

凡例

一

指針たるべく、予輩史蹟の研究を企つる者も、亦此著に頼る所、頗る多かるべきを信ず、茲に所懐を述べて江湖に薦む。

二

大正十四年一月

房總史談會幹事 高野松次郎

凡例

一本書は編者が多年來蒐集したる房總人物志料より、各部門に亘り、其人格の偉、事業の大、藝術の長、言行の美なる者を撰擇して、掲載せるものとす。

一房總の名族たる、平氏をはじめ、千葉、足利、里見、結城、白井、正木等の諸氏族中、人物の擧ぐべきもの少からざれども、是等は別に房總名族誌と題し、後日編纂せんことを欲す。故に武將の如き、本書一も載する所なし。一人物の撰擇に就きては、或は其當を得たりと爲しがたき者もあらん、然れども一々之を衆評に問はんか、甲是乙非、殆ど歸着する所なきを以て、編者は此に自家の所見を以て、狭き房總三州に於て、相應の人物と信ずるものを撰びたり。

一本書は、人物を月日するものに非ず。又文辭の潤飾を避け、たゞ經歷の一斑を眞面目に傳ふるにあり。詳細を知らんと欲するものは、各文末に引用

凡例

一

凡例

二

書を附記せるを以て、就て涉獵せられよ。

一本書載する所の傳記中、記述に疎密の嫌ひを生ずるは、これ編者が故意を以て區別せるに非らず、經歷の詳しく傳はらざるものは、記するに詮なきを以て、自ら記事の少なきは、眞に止むを得ざる所とす。

一明治維新以來人物頗に輩出し、政治に實業に、學術に技藝に、軍事に美術に、嶄然頭角を顯はし、各専門の泰斗と仰がる、ものあれども、本書の性質として、専ら故人のみを擧ぐることにせり。

大正十一年春三月

編者識



筑前福岡市東公園ノ日蓮上人銅像

書を附記せるを以て、就て涉獵せられよ。

一本書載する所の傳記中、記述に疎密の嫌ひを生ずるは、これ編者が故意を以て區別せるに非らず、經歷の詳しく傳はらざるものは、記するに詮なきを以て、自ら記事の少なきは、真に止むを得ざる所とす。

一明治維新以來人物頗に輩出し、政治に實業に、學術に技藝に、軍事に美術に、嶄然頭角を顯はし、各専門の泰斗と仰がるゝものあれども、本書の性質として、専ら故人のみを擧ぐることにせり。

大正十一年春三月

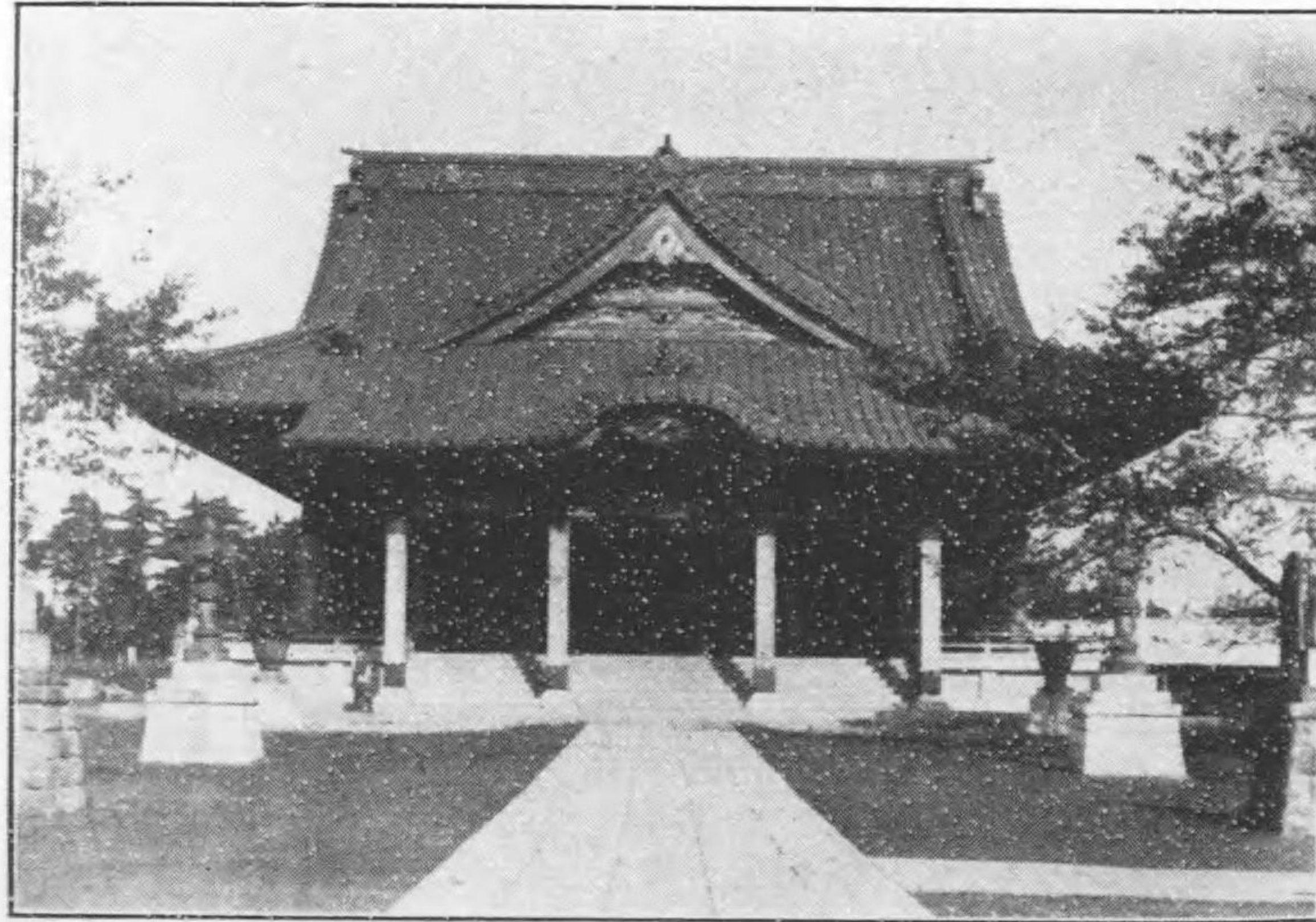
編 者 識



像銅人上蓮日ノ園公東市岡福國前筑



木内宗五郎靈像



宗吾靈堂



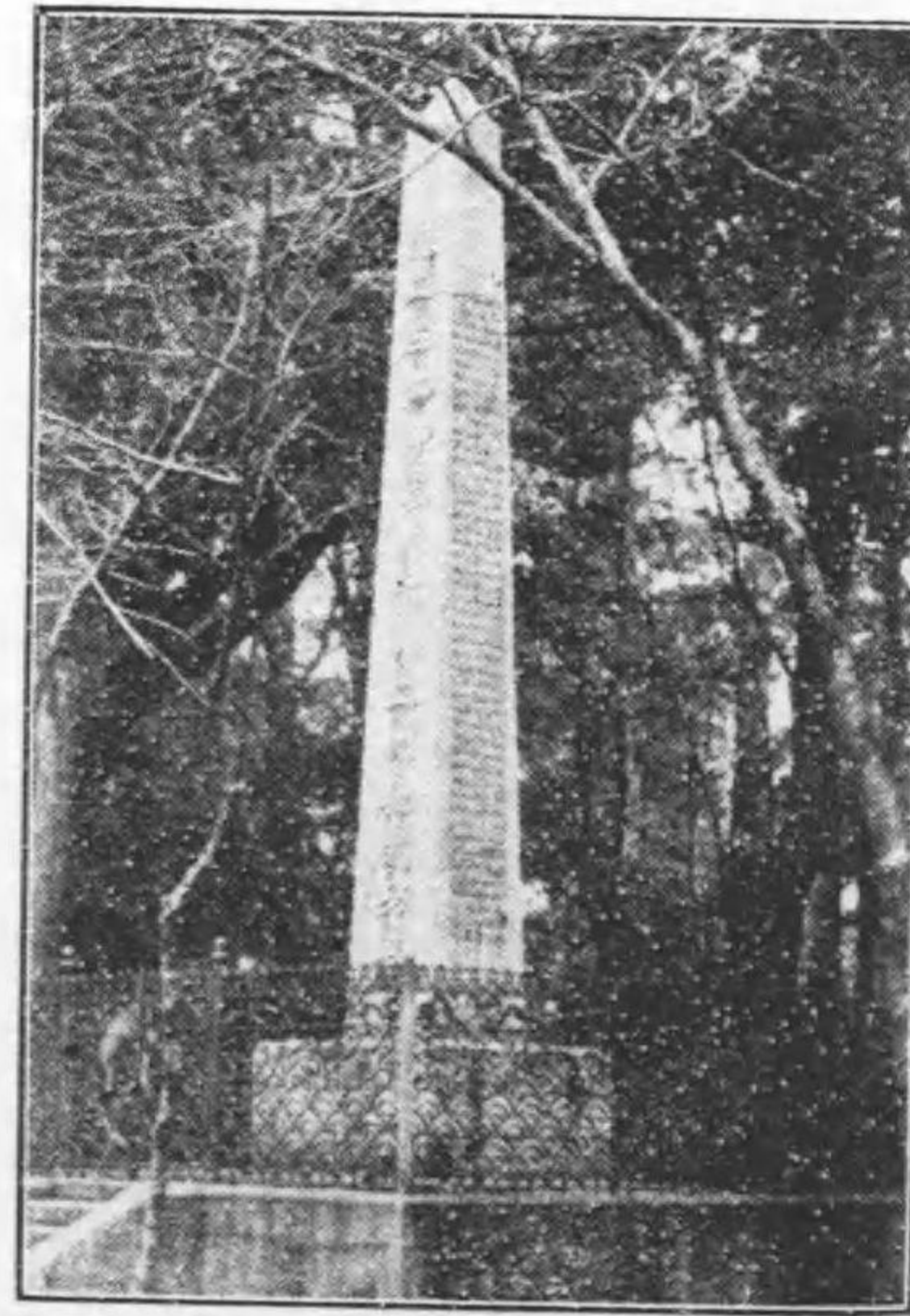
伊能忠敬



新井白石



佐原町諏訪公園に立ル
伊能忠敬銅像



東京芝公園圓山に立ル
伊能忠敬測量地遺功表



佐倉藩醫佐藤泰然



堀田備中守正睦



男爵佐藤進



伯爵林董

房總の偉人目次

國學者

| | | | |
|------|---|------|---|
| 伊能魚彦 | 一 | 立野良道 | 六 |
| 山口杉庵 | 二 | 伊能穎則 | 七 |
| 椿仲輔 | 四 | 木村正辭 | 八 |

歌人

| | | | |
|------|---|-------|---|
| 東素邊 | 三 | 海上胤平 | 六 |
| 永澤躬國 | 三 | 伊藤左千夫 | 七 |
| 澤近嶺 | 三 | 平木白星 | 七 |
| 神山魚貫 | 五 | 長塚節 | 八 |

儒學者

| | | | |
|-------|---|-------|---|
| 宇佐美澗水 | 三 | 原念齋 | 五 |
| 澁井太室 | 三 | 久保木竹窓 | 五 |
| 稻葉默齋 | 四 | 東條一堂 | 六 |

目次



子爵加納久宜



文藝博士西村茂樹



裁縫家渡邊辰五郎



文士依田學海

房總の偉人目次

國學者

伊能魚彦……………一
山口杉庵……………二
椿仲輔……………四

立野良道……………六
伊能穎則……………七
木村正辭……………八

歌人

東素暹……………三
永澤躬國……………三
澤近嶺……………三
神山魚貫……………五

海上胤平……………六
伊藤左千夫……………七
平木白星……………八
長塚節……………一〇

儒學者

宇佐美瀧水……………三
澁井太室……………三
稻葉默齋……………四

原念齋……………五
久保木竹窓……………五
東條一堂……………六

目次

一



宜久納加爵子



樹茂村西士博學文



郎五辰邊渡家縫裁



海學田依士文

| | |
|---------|---|
| 海保漁村 | 六 |
| 芳野金陵 | 元 |
| 龜田鶯谷 | 三 |
| 田中從吾軒 | 三 |
| ○ 小永井小舟 | 三 |
| 依田學海 | 三 |
| 新井白石 | 五 |

詩人

| | |
|-----|---|
| 鱸松塘 | 元 |
|-----|---|

俳人

| | |
|-------|---|
| 白井鳥醉 | 四 |
| 常世田長翠 | 四 |
| 青野太笱 | 四 |
| 小河原雨塘 | 四 |

畫家

| | |
|------|---|
| 菱川師宣 | 四 |
| 椿椿山 | 四 |
| 鈴木鶴湖 | 四 |
| 河鍋曉齋 | 四 |
| 服部波山 | 四 |
| 猪瀨東寧 | 五 |
| 奧原晴湖 | 五 |
| 高橋由一 | 五 |

| | |
|------|---|
| 淺井忠 | 五 |
| 根本樵谷 | 五 |
| 高森碎巖 | 五 |

書家

| | |
|------|---|
| 大川椿海 | 五 |
| 柳田正齋 | 五 |
| 植竹雲邦 | 五 |
| 香川松石 | 五 |

著述家

| | |
|------|---|
| 清宮棠陰 | 五 |
| 邨岡良弼 | 五 |

僧侶

| | |
|-------|---|
| ○ 僧蓮 | 六 |
| 僧昭 | 六 |
| 僧朗 | 六 |
| 僧向 | 六 |
| 僧頂 | 七 |
| 僧日像 | 七 |
| 僧日德 | 七 |
| ○ 僧西譽 | 七 |
| 僧親 | 七 |
| 僧泰 | 七 |
| 僧譽 | 七 |
| 僧巖 | 七 |
| 僧經 | 八 |
| 僧日乘 | 八 |

僧 碩 器 六五 僧 鉄 牛 六七

醫 師

古河三喜 六九 佐藤尙中 九一
加藤霞石 八九 佐藤進 九三
佐藤泰然 九〇

學 術 家

伊能忠敬 六六

教 育 家

大原幽學 九 渡邊辰五郎 一〇三
西村茂樹 一〇一 手島精一 一〇五

諸 侯

土井利勝 一〇七 久世廣之 一〇
堀田正盛 一〇八 堀田正俊 一〇

堀田正睦 一一 堀田正倫 一六
林 忠 崇 一五 加納久宜 一七

武 術 家

大坪慶秀 一九 夏見族之助 三三
飯篠長威齋 一九 太田新之允 三三
御子神典膳 二〇 戸塚彦介 三三

軍 人

大築尙志 二三 齋藤力三郎 二五
松 本 順 二三 櫻井規矩之左右 二六

義 人

木内宗五郎 二七 忍足佐内 二四
市 兵 衛 二三

志 士

平野重久 二五 鳥山確齋 二六

政治家

林 董……………三九 吉原三郎……………一四一

實業家

津田 仙……………一四三 小倉惣治郎……………一四五
西村勝藏……………一四四 岡本善七……………一四六
濤川惣助……………一四七 木村利右衛門……………一四八

俳優

初代市川團十郎……………一四九 初代松本幸四郎……………一五〇

力士

小柳常吉……………一五一 初代高砂浦五郎……………一五二
境川浪右衛門……………一五三

房總の偉人

東總 林壽祐編

國學者

伊能魚彦

伊能魚彦。通稱茂左衛門、青藍又茅生庵と號し、一に稻生氏に作る。香取郡佐原町の人。其先千葉の一族大須賀氏に出で、世々香取郡伊能村を領す、因て氏とす。天正中佐原村に移る。魚彦享保八年三月を以て生れ、六歳の時父を失ひ、長ずるに及び、和歌を好み、當時國學の泰斗、加茂真淵の門に入り、刻苦勉勵すること數年、學益々進む。明和二年家を子景序に譲り、江戸濱町に住し、茅生庵と號し、朝夕真淵に親炙せり。真淵の歿後、國學に志すもの、多く魚彦の塾に來り、一時二百餘人に達せり。諸侯の子弟また贄を執るもの少からず。中津藩主奥平大膳大夫待遇最も厚く、東叡山法親王亦數々引見して其講義を聽かる。魚彦夙に國學を復古せしめんことを企て、詠歌は一に萬葉集を以て基と爲せり。當時假字用格の混亂せる事を慨き、古來の國書を檢閲して、古言梯を著はし、後

進をして學び易からしむ。天明二年三月江戸に歿す、年六十三。門人等郷里觀福寺の先塋に葬り、其墓碑を茅生壟碑と稱す。魚彦國學に通じ、和歌を善くするの外、畫を寒葉齋建孟喬に習ひ、好んで梅花及鯉魚登門の圖を寫し。江戸に在る時は、殊に香取魚彦或は楫取魚彦と記せり。蓋し郷國を思ふの切なるに因るならん。(楫取翁傳)

著述

古言梯。萬葉集千歌。檜の孺手。百人一首略傳、筆のさきこと。雨夜の燈火。冠辭懸緒。續冠辭考。縣門遺稿。楫取魚彦家集。魚彦雜集。

明和元年甲申霜月十六日楫取の魚彦がりつひて、その所の歌さてよめる

かどりがた千重の潮瀬を塞上て、浪穂にたてる神の御門も

中臣の香取はふりがいはふなる、ほこ杉の上に雪降にけり

さよふけて兒島のかこの聲すなり、海上瀉に月出らしも

夕さればしたけ吹らし香取船、おぼしにかくれこぎ歸る見ゆ

あがためし

千 彦

魚 彦

俊 明

山口 杉 庵

山口杉庵。名は志道、利右衛門と稱し、舊長狹郡寺門村の人、明和二年を以て生る。家世々農を營みしも、杉庵幼より學を好み、少時近傍安國寺の僧に就て漢

籍を修む。然れども山間僻地の常として他に師友なく、獨學の便益少きを悟り、二十五六歳の頃、江戸に出て、下總國人荷田訓之に師事し、和漢の學を研鑽せり。當時荷田春滿、同蒼生子、同訓之と代々相傳はれる、稻荷古傳といへる秘書を傳へらる。杉庵は學系上復古學を主張し、特に古事記、神代卷を研究し、神道に通ぜり。天保中稻荷古傳の五十音圖を基として、水穂傳七卷を著はせり。古來京都は歌人多く、當時香川景樹、加茂季鷹等關西に名あり、歌道研究に便なるを以て、京都に遊び、歌人と往復するの旁、公卿摺紳の間に書を講じたるに其名忽ち雲上に聞え、畏くも光格天皇侍讀の光榮を擔へり。是より先、杉庵山部赤人の詠みし「田子の浦ゆ」の歌を以て、駿河に非らずして、房州の西海岸なることを論明せしかは、叡感の餘り、天保五年の春田子の浦人なる雅號を賜はりけり。杉庵の講筵に立入せし公卿數多ありし内、有名なる歌人千種有功もありき。天保十二年七月京師に歿す、年七十八。嘉永二年十月聖恩枯骨に及び、齋瑤靈神の神號を宣下せらる。杉庵人と爲り温厚篤實にして、君子の風あり。稟性孝心深く、常に孝養怠らず。嘗て紀州高野山に登り、父母の墓碑を立て、其碑蔭に左の歌を刻せり。

高野山杉の朝露たらちねの、親に手向の苔の下水

杉庵詠歌多き中、天保十一年七月堂上公卿と共に、高野山の奥、新玉川に遊び

て詠みし長歌の如きは、人口に膾炙せられ、今猶同所の碑陰に残れり。

著述

水穂傳。火水與傳。祝詞正解。萬葉集言撰。古今集言撰。小倉百首詳解。安房國勝景圖繪。安房日記。旅寢の夢。

立 春

山 口 杉 庵

春の日の光さしそふ梅か枝は、雪のうちより鶯ぞ鳴

吉野山にて

今朝みれば夜半の嵐にはたつみ、垣根によする花の白波

御階の紅梅悪れ給ふをかしこみてよみて奉

梅の花あかねさす日の色に出て、かしこき御世の恵をぞしる

高野の奥新玉川の歌

蓮のみね露の玉川みなかみは、世にありがたき苔のほらかな

辞 世

今日はくれ明日はあくると思ひしに、遠きあしたの露ときえゆく

椿 仲 輔

椿仲輔。初め源吾、後四郎左衛門と稱し、常磐舎と號す。又南塘、藕塘、寂庵の別號あり。香取郡猿山村の人、享和三年を以て生る。幼にして學を好み、年十六歳

の時、埴生郡飯岡村の歌人神山魚貫に就て和歌を學べり。二十歳の時、江戸に出で、小山田與清に従ひ、國學を受け、一たん郷に歸り、感ずる所あり、妻を出し家産を賣り、再び江戸に出づ、時に天保四年、然れども輾轉不遇志を得ず、天保八年また郷關に歸る、時に年三十五。爾來また娶らず、刻苦勉勵すること數年、國朝古今の制度沿革に通じ、北畠親房の神皇正統記に倣ひ、和文を以て、古來の國史を著述せんと欲す、偶佐倉藩の聘する所と爲り、幾もなく、佐倉藩を辭し、京師に上り、國學者穗井田忠友等と交を結び、新に學舎を設け、諸生を教ゆ、名聲急ち揚り、門人一時二百に餘るの勢ありしが、弘化三年二月京都柳馬場に客死せり、年四十四。一説に仲輔國史を考覈し、勤王を論じたるを以て、毒殺せられしといふ。仲輔人と爲り、博覽強記、資性穎敏にして、英氣に富み、最も和歌に長ぜり。(伊能顯則撰椿仲輔小傳、下總國舊事考。香取四家集。帝國人名辭典)

著述

萬葉集發揮二卷。古今集解。二鏡道韻。小木曾日記。野遊記。仲輔家集一卷。常磐舍文集。常磐舍雜記。

梅

あはれとも誰か來て見む鶯の、木つたひちらす我が宿の梅

椿 仲 輔

野 外 霞

國 學 者

すみれ摘む野邊にて見れば我が宿は、霞のおくになりけるかな

ほに出で、野邊の尾花の見えしより、あらはれて吹く秋の風かな

立野良道

立野良道。市原郡引田村^{今海}上村の人、寛政四年十月を以て生る。幼にして學を好み、享和三年三月年僅かに十二にして里正を命ぜらる。文化七年二月より大橋磐谷に就き、儒學を修む。同十二年正月より國學者清水濱臣の門に入り、専ら和學を研究し、文政三年正月地頭酒井氏の代官と爲り、天保元年平田篤胤に就き、益和學を研究し、同九年四月幕府の巡見使大久保勘三郎に従ひ、九州及二島に赴き、同年九月郷里に歸る。弘化四年三月より、小山田與清に従ひ、再び國學を修む^(仲輔伊能穎則等と同門たり)。明治二年十一月神祇官史生に任じ、次で日本書記及帝王の紀記等の校正を命ぜらる。同三年十二月神祇官出仕に陞り。同四年八月官職を退き、専ら文筆に親しみ、同九年七月歿す、年八十五。嘗て輯録せる誌料八十餘卷を神祇官に獻納せり。(上總町村誌。房總叢書。市原郡誌。)

著述

安房誌料引用書目。上總誌料引用書目。上總誌總論。上總誌外傳。歷代通覽略。合戰年表。配流年表。役義家言。

うきめかるうきか中にも心ありて、あまや波間の月を見るらん

海邊月

良道

伊能穎則

伊能穎則。通稱三左衛門、蒿村、又梅宇と號し、別に外記と稱せり。香取郡佐原村の人、文化三年を以て生まる。幼より和歌を好み、近郷埴生郡飯岡村神山魚貫に師事し、詠歌の道を學び、弘化元年江都に出て、小山田與清に従ひ、國學を研究す、時に年三十九、同四年三月其師與清長逝せり。翌嘉永元年本所龜澤町に移住し、國學を以て鳴れり。同六年六月北總地方を漫遊し、翌年一月まで佐原に在り、元日の歌に

故さどにかへりし春の朝ぼらけ、いつよりここにうれしかりけり

安政三年の春より、毎月六回香取に到り、神官の爲め、講筵を開けり。同五年家名を嫡子に譲る、時に五十三。元治元年四月香取尙古館の講師となり、明治元年十二月神祇官筆生に補せられ、東京に住す。同二年八月大學大助教に任じ、御前に於て令義解を講ず。十月宣教權中博士に任じ、三年十二月更に宣教使と爲

り、五年五月大講義に補せられ、香取に在つて皇學を教授す。九年二月香取村梅宇に移住し、翌十年七月歿す、年七十二。穎則人と爲り、温厚優雅にして更に俗氣なし、時人名けて天孫降臨時人といふ、博覽強記にして著書頗る多く、歿するの前、藏書數千卷を香取神宮の文庫に納め、以て永遠の保存を計れり、蓋し北總地方和歌に志すもの多きは、神山魚貫、椿仲輔、伊能穎則の薰化に因るこいふべし。文學博士小中村清矩の如きも亦門下より出づ（梅宇翁年譜。書家列傳）

著述

（北總諸家著述目錄）

神道新論一卷、香取鹿島二宮祭神說、神一不二論一卷、總社傳記考證一卷、牛頭天王考、三種神器說略一卷、大嘗祭儀通覽一卷、宣命解、本教要略一卷、屯田縣公麻刺、田租稅沿革考、日本史類名稱訓二卷、國史略辨謬二卷、文貞公事蹟、楳取魚彦小傳、椿仲輔小傳、香取四家集二卷、百人一首新譯二卷、活語初集一卷、祝詞草一卷、歌語童諭、夏衣集、懷古百首、鶯梅錄一卷、陸奥日記、銚子名義考一卷、梅宇先生長歌小集一卷、歌文集、梅宇文艸一卷。

明治二年大學大助教に徴されける時

穎

則

香取野のしもとがもとの落栗も、世に拾はるゝ時はありけり

辭世

足引の病のどこに世を思ふ、心ぞ神と千世もあり經ん

木村正辭

木村正辭。字は埴麿、櫛齋、集古堂、三十二艸庵、圓珠經屋等の數號あり。下總國成田の人、文政三年を以て生る。初め清宮壯之助と稱し、京都妙法院の臣木村某の家を嗣ぎて、木村氏を冒せり。幼にして學を好む、母松井氏和歌に堪能なるにより、幼時家において母の教を受く、長ずるに及び、國學を伊能穎則に、和歌を寺門靜軒に受け、又幕臣岡本孝則に就て、漢籍を研究す、文久三年十月幕命により駒込文庫出仕を命ぜられ、明治二年大學助教に任じ、少博士を授けられ、史料編纂係となり、後神祇官に轉じ、宣教權中博士を拜し、四年七月文部省大助教となり五年九月米人スコット、田中義廉等と師範制度を調査し、後來高等師範學校の基源を開けり。同九年以來司法書記官、文部省御用係、大政官權少書記官、文部省權大書記官、東京帝國大學教授、文部省編輯局副長等に歴任し、二十三年六月東京學士會員に擧げられ、從五位勳六等に叙せらる。二十四年八月より、更に文部省書記官、大臣官房圖書課長、文科大學教授兼高等師範學校教授に任せしが、二十六年官職を辭し、爾來専ら著述に従事し、傍私立女子大學、國學院、早稻田大學、國語傳習所等に國文學を講じ、國學界に貢獻する所最も多し、三十四年四月文學博士を授けられ、大正二年四月歿す、享年八十七。正辭和學に精通し、黒川眞賴、小中村清矩、榊原芳野、横山由清と共に

明治國學界の五先輩と稱せられ、特に萬葉集と字音學には、殆ど一身を捧げ、萬葉集に關する著書のみにて既に十八種に達し、世に萬葉博士と稱せらる。藏書頗る多く、資産また十數萬圓を有せしといふ。(國民新聞。書家列傳。花紅葉)

著述

(北總諸家著述目錄)

萬葉集書目一卷、萬葉集書目提要二卷、萬葉集文字辨證二卷、萬葉集訓義辨證二卷、萬葉集字音辨證二卷、萬葉集三辨證補遺一卷、萬葉集鼻乙一卷、萬葉集攷文七卷、萬葉集略解補正、萬葉集證注、萬葉集讀例一卷、萬葉集美夫君志三十卷、萬葉集古注遺文一卷、萬葉集古注、日本紀年紀攷一卷、刻本萬葉集復舊一卷、萬葉集雜攷三卷、萬葉集用字格補遺一卷、萬葉集折木四攷一卷、皇朝造字攷一卷、借字纂一卷、千祿字書攷一卷、玉篇攷一卷、新字四十四卷攷一卷、音韻雜攷一卷、音韻概論一卷、字訓轉格一卷、說文韻譜袖一卷、金光明最勝王經音義攷證一卷、靈異記訓釋類字一卷、同分音一卷、をしね名義考一卷、用字假字問答一卷、用字假字辨一卷、未定假字辨一卷、本草和名刊誤一卷、日本書紀異本攷一卷、附錄一卷、採輯諸國風土記補遺一卷、日本略史二卷、日本史要二卷、國史案二卷、年紀異同攷一卷、日本號の攷一卷、史學一班一卷、憲法志料一卷、遊仙窟攷證一卷、文館詞林盛事一卷、造木攷補攷一卷、玉蜻攷補正一卷、免寸河攷一卷、黃泉國攷一卷、無恙攷一卷、於乎山木問答一卷、播磨の濱づと一卷、柳齋雜攷六卷、柳齋別錄一卷、賜暇遊覽一卷、柳齋歌集二卷、柳齋別集一卷。

神嘗祭

木村正評

五十鈴の宮の大前に。今年の秋の懸税。御酒御帛をたてまつり。祝ふあしたの朝日かげ。靡く御旗

もかゞやきて。賑ふ御代こそめてたけれ。

海ゆかば

同人

海ゆかば。水つく屍。山ゆかば。草むすかばね。大君の。へにこそ死なめど。言立て、。仕へまつりし。いにしへの。増荒猛夫は。はしきやし。こゝた貴し。ますらは。かくぞあるべき。今の世の。憎荒猛夫も。事あらば。命惜ます。敷島の。やまご心を。劔太刀。いよ、磨きて。後の世に。語りつぐべく。名をし立つべし。

元旦

同人

新らしきとしのはじめと思ふより、先あらたまるわが心かな

早春

我門にむれきてあそぶをとめ子が、羽子つく音も春めきにけり

寄松祝

とことばにあせすうつらさ緑なる、松のいろ社御代の色なれ

愛國

花をどひ月を見る夜もわすれぬは、御國を思ふ心なりけり

一重山

八重霞ふきどくはるの朝こちに、のこるは山の一重なりけり

歌人傳

東素暹

東素暹諱は胤行、其先千葉常胤の六男胤頼に出づ、胤頼初め海上郡東莊に居り東六郎と稱す、其子重胤武者所平太郎と稱し、和歌を善くす。重胤の子胤行、乃ち入道して素暹と號す、若くして源實朝に仕へ、和歌を以て實朝に寵愛せられ從五位下中務丞たり。寶治元年同族千葉胤氏と共に、上總權介秀胤を討て功あり、承久の役戦功に依り、美濃國郡上を賜はり、子孫總濃兩國に分立し、世々和歌を以て著はる。有名なる歌人東常縁の如き、美濃の東氏に出づ。素暹の歌載せて續後撰集にあり。(東鑑。續後撰集。下總國舊事考)

水ぐきの岡の港の浪の上に

數かきすて、かへるかりかね

新拾遺

神代より烟絶えせぬ富士のねは

戀や積りて山となるらむ

新拾遺

偽のここの葉しげき玉章に

引きかへしても恨みつるかな

新後拾遺

越えばと思ひし嶺に來て見れば

猶行く末も山路也けり

新續古今

つれなさを恨みよとてや常磐山

下はふ葛に風の吹くらむ

同上

山の端のみへぬはかりぞわだつ海の

波にも月はかたふきにけり

英雄百人一首

永澤躬國

永澤躬國。通稱半十郎、後太一、渚亭と號す、香取郡佐原村の人、和歌を好み、橘千蔭の門に入り、豊後の人清原雄風等と交を結べり。寛政四年四月其師千蔭學友村田春海と共に香取鹿島へ遊べる時、利根川の傍なる躬國が家に滞在し、躬國雄風二人に案内され、香取附近を遊覽せしこと、香取日記に見ゆ。文化四年躬國先づ歿す、年五十三、同五年千蔭歿す、年七十五、同七年雄風歿す、年六十四同八年春海歿す、年六十六。遺す所躬國家集あり。(香取四家集。香取郡誌。香取日記)

澤近嶺

澤近嶺。初め定次郎、後與兵衛と稱し、月舎又は梧桐庵と號す。相馬郡取手の人、和漢の學に通じ、和歌俳諧を好み、二十歳の時、村田春海の門に入り、清水濱臣

高田與清の二秀才と共に相切嗟し、殊に與清は六歳年下なるも、交情頗る親密なりしが如し。近嶺詞藻に富めるも、志を東都に得ず、空しく郷里利根川河畔に歸臥し、僅に生計を營めり。元來清貧に安んずるの性なるを以て、餘裕あれば、輒ち書を購入ひ、夙夜研鑽著述に向つて、大に成す所あらんとせしが、天保八年二月火災に遇ひ、多年苦心して集めたる藏書二千餘卷、二十年來書き綴れる雜記三十卷許、空しく鳥有に歸せり、豈遺憾の極ならずや。翌九年八月歿す、年五十。著はす所、梧桐庵歌集二卷、雜記二卷世に遺れり。(下總舊事考、香取四家集)

山 家 花

近 嶺

餘所目には雲に臥すかと思はせて、花に起きふす春の山里

湖 上 月

さざなみの底さへ澄みてふくる夜は、月の上ゆく志賀の浦舟

野 亭 聞 虫

宮人に聞かせてしかな秋深き、野守が宿にすたく虫の音

月

世のうさも忘れてむかふ月にまた、果ては思ひの有ぞわりなき

殘 雁

おくれきてさまよふ雁の聲すなり、積る蘆間の雪の暮方

神 山 魚 貫

神山魚貫。通稱三郎左衛門、松廼屋又は無境庵と號し、舊埴生郡飯岡村の人、天明八年正月を以て生る。若くして和歌を好み、僻陋師なく、専ら古人の歌書によつて獨學せり。而して詞藻豊富、當時王侯の嘆賞する所たり。門下頗る多く、椿仲輔、伊能穎則、鈴木雅之、林保綱、釋靈雲、三橋鶴彦等其高弟たり。明治十五年五月歿す、年九十六。著はす所麻葉集三卷、苔清水前後續編共十一卷あり。子雅貫父に嗣て和歌をよくせり。

立 春

魚 貫

いで、見よけさは外山の白雪も、春きにけりと霞そめたり

逆 懷

世の中にしづむと思ふ事もなし、もとより浮てあらぬ身なれば

寄 露 逆 懷

すみにごる心もしらじしらすして、羨しくも消ゆる露かな

山 家

苔つたふ岩間の清水せきためて、一人すむにはたれる庵かな

無 境 庵 にか け れ じ て よ め る

しら檜の古葉ちる音におごるけば、已か宿なりうたゝねの夢

海上胤平

海上胤平。初め六郎と稱し、後椎園と號す。其先千葉氏に出づ。胤平文政十二年を以て、海上郡三川村に生る。初め劍道に志し、江戸に出て千葉周作の門に入り、其奥儀を極め、武者修業の爲め諸國を巡歴し、紀州に入り和歌山藩の國學者加納諸平の博學に感じ、直に其弟子たらんと欲せしも、初志を果さず、腑甲斐なしと思ひ、更に中國より九州四國を巡り、再び和歌山に歸り、同藩の劍道指南と爲り、旁加納諸平に就き、歌道を學び、嶄然一頭地を抽き、早くも其高足と爲れり。明治の初め江戸に歸り、官途につきしが、同十六年斷然冠を掛け、専ら歌道を振興せんことを企て、數十年の間、懇々諸生を教えたり、門人頗る多し。和歌山藩出身の奇傑陸奥宗光御歌所に推舉せしも、應せず、曰く我歌道に於て、所長高崎正風の下風に立つものに非らずと、其抱負窺ふべし。晩年家塾を女龍子に譲り、悠悠風月を樂めり。胤平最も古歌の格調に長じ、好んで古今の作歌を評し痛快を極む。大正五年三月東京神田の寓居に歿す、年八十八。郷里三川村に神葬せり。

著述

椎園萬葉十冊。萬葉古言解三冊。詠史百首評論一冊。新撰長歌集評論。長歌改良論辨駁一冊。歌學

會歌範評論一冊。東京大家十四家集評論二冊。大八洲學會歌邪正論一冊。椎園詠草三冊。椎園歌集一冊。

千葉の野 明治二十八年の秋千葉家同族會を芝の紅葉館にて催しけるを、其むしろにつらなりて

胤平

葛のうら葉のうらふれて、昔をしのぶ秋ぞかなしき

父翁の六十一の賀に

ことなくて長らへいませ海上の、おや田常世田親はごこよに

千葉の古城に登りてよめる歌

吾家の遠つ御祖と吾しぬふ、みやの命かきろひの岩垣、たゝみもとほりの堀をふかめて、眞葛葉の千葉の大城に、年久に住けむものを、垣はくえ堀はうまりぬ、鴨頭草のうつりかはらふ、世のなかは、常なきものか、ほき路より登りて見れば、眞廣なる、館の跡は、こちくの里の童か、まくさかる荒野となれり、猪のはなの、矢倉のあとは、さし出し、そことはきけど、礎も残らざりけり。益荒男が仇をきためし、矛杉の、木むらか中に、もみち葉はちしほそみたり、ふとも邊に、争ひたてる、旗薄、風にみだれて、松の音は、をたけびなせり、そこらくに、昔おほえて、此夕、うらふれをれば、足曳の、山のとかげに眞神友よぶ。

伊藤左千夫

伊藤左千夫。山武郡成東町殿臺の人、伊藤良作の四男にして、元治元年八月を以て生る。明治十年十四歳の時佐瀬春圃の塾に入り、漢籍を學び、十八歳の時東京に出て、明治法律學校に入りしも、眼疾の爲め歸郷し、二十二歳の時、再び

東京に出で、京濱間の牛乳店に使役せらるゝ、ここ五ケ年。二十六歳の時、本所茅場町に牛乳搾取業を始め、刻苦經營すること多年、明治二十六年の頃より、歌學を研究し、春園と號せり。同三十一年正岡子規と文學を評論し、深く子規の人格と學識に感じ、三十三年一月以來子規に親炙し、其薰陶を受け、爾來北總の歌人長塚節、南總の文士蕨眞等と往復し、盛に歌道を論ぜり。三十五年九月子規歿するや、子規歌風の發揚に努め、翌二十六年六月雜誌馬醉木を發行せり。三十九年一月初て小説を作り、野菊の墓と題せり。次で秋霧、分家東京日々新聞胡頹子等多くの小説を作せり。大正二年三月市外龜戸に移り、同年七月俄に歿す、年五十。同九年九月より左千夫全集六卷刊行せられ、第一卷は歌集にして、長短歌千九百七十二首を收む。

さみだれの晴れて始めて月見れば

伊藤 左千夫

はつかの月ははつかなる哉

村時雨すぎかてにする山路より

落葉ふみつゝ人の來る見ゆ

平木白星

平木白星。名は照雄、明治九年三月を以て。市原郡姉ヶ崎村に生まる。日本中

學卒業後、東京英語學校より高等中學校に入りしも、家事上止むを得ず、中途にして退學せり。爾來遞信省監理課に通勤し、大正二年六月より駒込郵便局長に任じ、通信事業を営みながら、深く文筆に親しみ、詩人又は劇作家として、其名夙に文藝社會に知らる。特に新体詩界の泰斗と仰がれ、文藝時報の記者にして又久しく萬朝報新体詩欄の選者たり。作歌頗る多く、著書また少からず。日本國歌、釋迦、お小夜新七、耶蘇の戀等の詩篇あり。また象引、慶應から明治等の脚本あり。桃太郎のお伽芝居あり。其他七ツ星等の詩選あり。いづれの著作にも雄大豪宕の趣あり、前途大に作する所ありしならんも、大正四年十二月長逝せり、年四十。

天 長 節

平 木 白 星

天地のむだ窮み無く、寶祚は隆えむと、遠つ御祖の御詔旨、詩歌よりげに偉なる、その御訓をまのあたり、三千とせ邁き春と秋、黃菊白菊名はあれど、人として我に勳功なく、たゞこそ誇れあなかしこ、明治の御代に生れしを。

ルーズヴェルト

同 人

今日の平和を安しとし、百年の禍に眼な蓋ひぞ、劍を帯ぶれど劍抜かず、富を散じて富得よと、神采奕々高く宣る、嗚呼興國のまつりごと、この時よこの人を得て、天に驕るや曉星の旗、大倫古龍去りしもの、倫古龍より勇ましし。

印 旛 沼

同 人

歌 人

一九

眞菰の蔭に小よし啼き、暮れ惜しみる印西の、空に夕映のこれるに、東は靄の糢糊として、晝と宵との二つをば、容るゝにあまる大沼や、義侠の鉦に甚兵衛が、國法のきづな断ちしてふ、渡頭のあたり風白く、一すぢ遠き波かしら。

長 塚 節

長塚節、結城郡岡田村國生の人、長塚源次郎の長子にして、明治十二年四月を以て生る。幼にして記憶力強く、三歳の時、早くも百人一首を誦誦し、いろは歌を確實に讀みしといふ。五歳にして小學校に入り、十五歳の時小學全科を卒業し、縣立水戸中學校に入學せしが、中途疾病の爲め退校し、十八歳の頃より和歌を作り。特に根岸派の泰斗正岡子規の流を汲み、伊藤左千夫、香取秀實、藤眞等と互に相切磋し、最も子規に私淑して、理想的愛子と稱せらる。明治三十五年九月子規長逝し、翌三十六年六月根岸短歌會の雅友と共に、雑誌馬酔木を發行し、大に世に行はる。三十八年八月京都より丹後に遊び、三十九年九月奥州より北越佐渡、信州を巡り、四十年十月陸中より羽後象瀉地方に遊び、四十一年四月京都より奈良吉野に到り、四十二年十月陸中平泉より陸奥十和田湖に遊び、四十三年岐阜及京都に遊び、大正元年長崎及福岡に赴き、同二年福岡より山陰道に巡り、同三年八月日向國青島に遊び、到る所吟詠あり。同四年二

月宿痾遂に癒えず。福岡病院に歿す、年三十七。節の和歌に於ける殆んど天才と稱すべく、疾病の爲め中途退學するの後、歌道に耽けること二十年。短歌に長歌に擅に思藻を發表し、其數幾百千なるを知らず、眞に根岸派歌壇の錚々たる者なりしが、不幸早世せるを以て世に哀悼せらる。大正六年六月アララギ同人長塚節歌集を發行す。此他小説に土、炭焼の娘、雜集に山鳥の渡の著あり。

△千葉の野を過ぐ

長 塚 節

千葉の野を越えてしくれば蜀黍の、高穂の上に海あらはれぬ
梧桐の葉を打揺りて降る雨に、そよらはひ渡る青蛙一つ

△廿三日雨、房州に航す

相模嶺はこの日はみえず安房の戸や、鋸山に雲飛びわたる
赤井嶽とぞせる雲の深谷に、相呼ぶらしき山鳥の聲
時鳥竹やぶ多き里すぎて、麥の畑の月に鳴くなり
秋の野に豆曳くあとにひきのこる、莠がなかのこほろぎの聲
秋の田のわせ刈るあとの稻莖に、わびしく残るおもだかの花
おくて田の稻刈るころゆ夕ざれば、筑波の山のむらさきに見ゆ

△道灌山遠望

武藏野の秋田は潤ろし椋鳥の、筑波根さして空に消につゝ

雜

黄昏の霧たちこむる秋の田の、くらきが方へ鴨鳴きわたる
ぬば玉の闇の夜空に尾をひきて、遠つ海原星飛びわたる
をかしといふ猿の芝居を見に行けば、顔に手をあて猿が泣きけり

儒學者

宇佐美瀧水

宇佐美瀧水。名は惠、字は子廸、小字惠助、通稱金八、別に優於館の號あり、略して宇惠と稱す。上總國夷隅郡長者町の人、習翁宇佐美金七郎の子、寶曆十二年を以て生る。家富み婢僕多し、十七歳の時江戸に出で、荻生徂徠に師事し、其塾に在ること僅か三年享保十三年正月師徂徠歿し、未だ全く其師旨を得ず、依て其塾に留り、同窓大空春臺、服部南部、高野蘭亭、山縣周南、篠崎東海等徂徠にして瀧水の先輩なりと相切磋すること數年後塾反板倉美中を伴ふて、上總に歸り、磨切を資くること五ヶ年、學大に進み、再び江戸に出で、芝三島街に住し、帷を下して徒に授く、晩年出雲松江藩主松平侯に仕へ、其藩政に參與し、勞勤せりといふ。安永五年八月江戸に歿す、年六十七瀧水人と爲り。莊重嚴毅、深く徂徠を信じ、力を盡して其遺著を校刻す。四家雋、古文矩、文變考、絶句解、同拾遺、南留別志の如き、皆瀧水の手によりて校刻せらる。其師に篤きこと高足弟子といへども及ばざる所なり。初め片山兼山を養ひて子と爲す、然るに兼山養父瀧水に異り、徂徠の復古説を喜ばず。故に離別して新に一家を成せり。依て姪德修字は子業をして後を嗣がしむ。

(先哲叢談、上總町村誌、人名辭典、書家列傳)

著述

辨道考。辨名考。論語徵考六冊。輔儲篇四冊。酒色論一冊。訓點千字文一冊。護園錄稿三冊。

澁井太室

澁井太室。名は孝徳、字は子章、通稱平右衛門、太室と號す。世々武州埼玉郡に住し、管領上杉氏に屬せり、父澁井重之出て大學頭林信篤に仕ふ、太室享保五年九月を以て生る。十四歳の時江戸に出で、井上蘭臺の門に入り、晝夜勤勉して倦まず、業大に進めり。後林整字に師事して都講となる。二十四歳の時、佐倉藩主堀田正亮に仕へ、侍讀と爲り、祿七十石を受く、是に於て學愈博く、名益舉り、水戸の名越克敏、肥後の秋山玉山、長門の瀧鶴臺、尾張の細井平洲、安房の木村貞貫等當時の名儒と交り、皆其志行に敬服せり、太室常に經史を精覈し、本邦史傳を好讀し、國史百二十五卷、建官考一卷を撰めり、天明七年九月堀田侯大坂城代と爲るや、太室侯に従つて大坂に赴き、老職に擢られ、祿二百石に加増せられ、政事に參預せしめらる。翌八年六月任地に歿す、年六十九。太室人と爲り。溫恭にして謹嚴、物と忤ふことなく、儉素にして邊幅を飾らず、經史子集を論述するも敢て人に示さず、堀田侯其著述を刊行せんことを勸むる

も謙遜して應ぜず。諸侯延見せんと欲するも辭して往かず、獨り米澤藩主上杉重定のみ屢々往て謁見せり。人褒貶するも、毫も意にかけず、宛然君子の風あり。子至徳少室と號し、弟伴七亦學に篤く、著書若干卷あり。(先哲叢談、續近世叢語、近世大儒列傳、人名辭典、下總舊事考、印旛郡誌、書家列傳)

著述

國史百二十五卷。建官考一卷。扶桑名勝二十三卷。讀書會意三卷。韓非子正誤一卷。雜圖三

稻葉默齋

稻葉默齋。諱は正信、幼名又三郎、本姓は越智氏なり。父正義迂齋と號し、江戸の人、佐藤直方に師事し、學成るの後直方の推薦により、肥前唐津藩に仕へ、藩主土井利里侯に従ひ、下總古河藩に移り、山崎派の學說を再興す。列侯弟子の禮を執るもの多し。寶曆十年十一月江戸に歿す、年七十七。著書若干あり。默齋享保十七年十一月を以て江戸に生る。幼にして家學を受け、長ずるに及び野田剛齋に師事し、大に得る所あり。人として果斷に富む。時の執政田沼侯の專横を憤り、大に正義を論じ、風教を矯正せんと計りしも成らず、天明元年父迂齋の門人鈴木庄内を便り、上總に來り、次で山邊郡清名幸谷村今山武郡增穂村に至り、里正鵜澤氏の家に寓す、時に年五十。同五年三木之莊に移り、孤松庵

と號し、道學の規範を布き、子弟を教ゆること多年、寛政十一年十月歿す、年六十八。成東元倡寺に葬る。門下奥村栖遲庵、手塚坦齋等名あり。大日本人名辭書、山武郡郷土誌

著述

童蒙訓。婦訓之心得。農家今川狀。五句引。一六談柄。癸丑講義。序類講義。損益錄。代魂錄。詞章紀聞。孤松全稿四十卷。清谷全話百五十卷。

原念齋

原念齋。名は善、字は公道、通稱三右衛門、下總古河藩儒原恭胤の子なり。少より學を好み、夙夜勉勵す、後江戸に出て著述を業とす、著はす所、史氏備考一百卷あり。又先哲叢談若干卷を著はし、大に世を益せり。幕府の儒官林述齋其名を聞き、念齋を召して、史事に與らしめしと云ふ。文政三年三月歿す。年四十七。(墓銘。先哲叢談凡例。下總國舊事考)

久保木竹窓

久保木竹窓。名は清淵、字は仲默、又蟠龍と稱す。香取郡津宮村の人、幼にして穎悟、十一歳の時、根本寺の假住松永北溟につき、漢籍を修む。研鑽怠らざり

ければ、敢て良師に就かざるも、漢唐諸家の學に通ぜり。後帷を下して教授す遠近風を聞き、來り學ぶもの數百人。領主小笠原安房守に知られ、采邑若干同村の監督を命ぜらる。又水戸の郡宰小宮山昌秀、郷校を行方郡延方に開き、竹窓を延ひて、講師たらしむ。水戸侯又國老中山信敏をして、竹窓を引見して治を問はしむ。文政十二年八月歿す、年六十八。竹窓人と爲り、重厚にして孝心深く、德行を以て稱せらる。其容貌たる廣穎方頤、眼秋水の如く、音吐亦清亮にして、一見君子の風を備えしといふ。常陸の詩人大窪天民、三河の畫家渡邊華山等、竹窓を一見し、其風采を嘆賞し、華山の如き之を小藤樹に擬せしといふ。竹窓儒學の外畫を善くし、最も墨竹に巧なり、津宮蟠龍の畫名あり。又能書の聞えあり。特に草書及擘窠大字を善くせり。而して伊能忠敬とは、莫逆の友にして、忠敬測量地圖の細字記入及上呈文書の清書等多く竹窓の手に成りしといふ。(下總國舊事考、香取郡誌、伊能忠敬傳記、事實文編、帝國人名辭典、書家列傳)

著述

補訂鄭註孝經。孝經獨見二冊。孝經孔傳翼註。香取私記。西遊日記。

東條一堂

東條一堂。名は弘、字は子毅、通稱文藏。一堂又は瑤池間人と號す。安永七年

十一月を以て、上總國埴生郡八幡原村(今長生郡五郷村の内)に産る。父長兵衛自得と號し、江戸に出て醫を業とす。一堂亦父に従いて江戸に出づ、時に年甫めて九歳。長ずるに及び、學を好み、醫たるを欲せず。十二歳の時父母に請ひ、京師に上り、大儒皆川淇園の學僕と爲り、炊事の勞を執りながら、苦學すること十年。二十二歳の時江戸に歸り、朝川善庵、羽倉簡堂、尾藤二洲等と往來し。更に龜田鵬齋に師事し、經學の蘊奧を叩き、秦漢以前の古學を尙び、宋學派を蔑視せり。一時弘前藩の督學となりしも意に適はず、帷を神田お玉ヶ池に下し。諸生を教ゆ。盛岡、庄内、沼津、敦賀、長島諸藩贊を執り、教を乞ふもの多し。當時林大學頭をはじめ、古賀洞庵、佐藤一齋、安積良齋等盛に宋學を唱へ、類に他學派を排斥す。一堂獨り古學を唱へ、別に一家を成し、宋學派に拮抗せり。閣老阿部伊勢守正弘(備後福山藩主)特に一堂を迎へて賓師と爲し、禮遇厚く、出入必ず輿を以てす、人呼んで輿儒と稱せり。當時名聲都下に甚籍し、門下より江幡梧樓(那珂郡高)清川八郎、安積五郎、桃井儀八、鳥山新三郎等の名士を出せり。安政四年七月江戸に歿す、年八十。一堂人と爲り、温厚方正にして、禮讓を謹みしも、所謂官學派に反抗せるを以て、世に容れられず。甚しきは狂儒を以て遇せらる。著書頗る多し。大日本人名辭書、千葉教育雜誌

著述

學範、易經解、書經解。詩經解。春秋左氏傳辨。國語解。天人辨。有無辨。道德辨。虛靜辨。性命辨。古文孝經辨偽。孝經孔傳辨偽。孝經兩造簡字。今文孝經鄭氏解補證。王注老子補義。郭注莊子標注。列子箋注。荀子箋注。論語字義。字義文理。助字新譯。四書知言。繫辭問答。讀書法。待問錄。詩文集。一堂筆記。

瑤池吟五疊詩

東條一堂

風送清吟更清。一人吟發十人賡。吟々次第樓皆和。臥聽鳳鸞雲外聲。

題八幡原舊廬松

同人

去國齡僅九。今歸七十三。手栽寸幹。老大與雲參。

海保漁村

海保漁村。名は元備、字は純卿、又郷老、別名紀之、通稱章之助、別に春農、傳經廬の號あり。上總國武射郡北清水邑の醫師海保恭齋の子にして、寛政十年十一月を以て生る。初め父恭齋より句讀を受く、十四歳の時、江戸に出て、喧囂に驚き、思へらくこれ讀書の地にあらずと、一日郷里に歸り、二十四歳の時再び江戸に出て、太田錦城の門に入り、研鑽すること數年、錦城歿するや、荒井堯民と謀りて、其墓碑を立て、更に京都に往き、日野大納言の知遇を受け、大納言待つに賓客の禮を以てせり。後江戸に歸り、佐倉藩の儒官と爲る。又水

戸、秋田、濱松等の諸藩より召されしも應ぜず、幕府醫齋の教授に任ぜらる。慶應二年九月歿す、年六十九。文學博士島田篁村、儒者信夫恕軒、法學者箕作麟祥、同鳩山和夫、子爵澁澤榮一等漁村の門下なり。(漁村墓銘。人名辭典。書家列傳)

著述

周易古占法二冊。周易正義勘校記補正一冊。易漢注考六冊。尙書正義勘校記補一冊。書漢注考六冊。左傳正義校勘記補正一冊。左傳補正四冊。左傳集註。公羊傳考證。論語漢注考十冊。孟子趙氏義廿冊。孟子輯聞廿冊。孟子鄭注補證七。孟子年表一。學庸注疏考正二。學庸鄭氏義二。孝經古今文疏證四。國語考。國語補證二。十七史經說。經籍源流考三。文林海錯一。讀東涯漫筆一。讀末筆記四。西口錄。傳經廬文集。退老筆記。聞見異辭。妖教紀原。文章軌範口授。文章軌範補註。漁村文話一。漁村文話續一。

芳野金陵

芳野金陵。諱は世育、字は叔果、通稱愿三、後立藏、別に匏宇の號あり。葛飾郡松崎村の醫師芳野南山の子にして、享和二年十二月を以て生る。文化十二年父南山江戸に出て、醫業を開く、金陵父に従ひ江戸に移り、家學を受く。後郷里松崎村に歸り、文政六年再び江戸に出て、龜田鵬齋の養嗣子綾瀨名は長梓の門に入り、晝夜研鑽、學大に進み、幾もなく其教鐸を司れり。同九年帷を淺草福井

町に垂れて教授す、時に年二十五。翌十年十月日本橋區數寄屋町に移り、弘化四年八月駿州田中藩主本多侯に聘せられ、同藩の儒官と爲り、班士格たり。嘉永三年九月藩侯に従ひ、駿豆二州を巡り、東歸日記一卷を作る。同六年米艦浦賀に來り、國書を呈し、互市を請ふ。金陵之を憂ひ、支那新報、和蘭口單等の書を得、海外の事情を知り、同志と共に海防を議し、兵制を論じ、書を閣老久世侯に上り、所見を述ぶ。當時大老伊井直弼國權を擅にし、志士を憎むこと甚し、金陵同志と共に、窃に計畫する所あり、事漏れしも僅に事なきを得たり。藩主本多侯年老ひて嗣なし、金陵百方斡旋して世子を定む。萬延元年一月祿百石を賜はり、計司に任じ、財政を更革せしむ。是に於て藩政に參與し、學校を興し、養老の典を行ひ、力田を賞賜する等畫策する所多し。文久二年越前福井藩主松平侯政事總裁に任ぜらるゝや、屢建言する所あり。萬延元年十二月昌平黌の儒員に列し、書生寮を監督し、稟米二百石を賜はる。明治元年十二月大學教授となり、同二年中博士に任じ、三年大學廢止せらるるを以て職を罷め、府下大塚に移住し、私塾を設け、諸生を教ゆ。同十一年八月歿す年七十七、金陵人と爲り謹嚴にして、よく徳義を守り、慈愛に富み、清貧に安ぜり。而して其の一世は、公私の軌掌繁き爲め、學者として、比較的著述する所尠かりき。三

男世行 字は實甫、櫻陰と號し、大學助教に任じ、明治五年歿す、年二十九。 四男世經 字は公權、蓮亭と號し、東京府會議長、衆議院議員たりし事あり。 各名あり。

大日本人名辭書、帝國人名辭典、近世人傑傳、書家列傳、明治大年表。

龜田 鶯 谷

龜田鶯谷。名は長保、字は申之、初め毅、通稱保次郎、又學孔堂、稽古堂、本教々舍等の別あり、下總國岡田郡東落田村の人、文化四年五月を以て生る。關宿藩儒、龜田綾瀨（名は長梓、鵬齋の義子）の養嗣子と爲り、關宿藩に仕ふ。儒學に通じ、詩文に長じ、又書を善くして、一機軸を出せり。養祖父鵬齋の遺著を續ぎて、侯鯖一齋を補輯せり。維新の變亂に際し、獄に在ること一年、亂後赦されて東京に移住し、江東漫吟を著はせり。明治十四年八月歿す、年七十五。人と爲り雄邁、酒を好み、議論精明、毫も偏私なし。常に唐の韓昌黎を崇敬せり。（帝國人名辭典、書家列傳）

著述

侯鯖一齋五卷。論語集註異說二十卷。五魂說一卷。古事記序解一卷。學孔堂漫稿二卷。學孔堂遺文六卷。五音圖說一卷。

田中從吾軒

田中從吾軒。名は參、通稱彌五郎、從吾軒と號し、佐倉藩士平野知秋の實弟にして、小永井小舟の仲兄なり、夙に經書を研究し、造詣頗る深く、又詩文を能くし、斯道の泰斗たるも、名利に淡く、早くも高踏隱退せるを以て、世其人あるを知らざるもの多し。明治三十一年歿す。年七十八。

題殿子陵加足帝腹圖

田中從吾軒

以匹夫之足而加萬乘之腹、人臣之所不能犯、而子陵能犯之、以萬乘之腹而受匹夫之足、人主之所不能忍、而光武能忍之。以不能忍而能忍之、天下之物有不足容者、以不能犯而能犯之、天下之節有不足立者。此足與此腹相得矣、而有東漢中興之盛、有此足矣而無此腹矣、而有漢季黨錮之慘、此足與此腹俱無矣、而漢氏不祀、悲夫。

小永井小舟

小永井小舟。名は岳、字は君山、通稱八郎。佐倉藩士平野知秋の弟なり。平野氏世々佐倉の藩老たり。少時江戸に出て野田笛浦、古賀謹堂、羽倉簡堂等に就き儒學を修め、安政五年旗下小永井藤左衛門の嗣となる。萬延元年修信使木村攝津守に隨ひ、米國に航し、歸朝の後、徒目附、大坂調役等を命ぜられ、維新の後一橋及尾張侯に聘せらる。後淺草新濠に私塾を開き、濠西塾と稱す

明治二十一年十二月歿す、年五十八。小舟儒者にして書をよくし、殊に行草に長ず。(帝國人名辭典。明治大年表。書家列傳)

著述

漢史一斑。清史畧。無絃琴。獨鶴清淚。濠西小築。代畫小説。天放集。

送三鱸彦之游三函館一序

小永井小舟

塵海之熱不侵、腥市之氣不染、靜坐脩默以養吾天、得己多矣、彦之冒茲盛夏而爲茲行、何也、夫叢曹劇部、鬧熱相摩、方赤日火烈、人殆欲喝死、僅得休沐一舟於海、屐於山林、而后少得蘇息焉、彦之之行固不在此、顧彦之讀書攷文、疑義衡慮、據案砥筆、心手相掣、唇吟舌強、方寸憂熱、於是乎、乘長風於碧海、嚼冰雪於寒谷、取于彼、求于此、必將有發神聖之奧、洩造化之秘者、則彦之茲行、所得益多矣、吾知其千仞蒼崖留皎潔不緇之文也。

依田學海

依田學海。名は朝宗、字は百川。佐倉藩の人、依田貞剛の次男にして、天保四年十一月を以て、江戸の佐倉藩邸に生まる。六歳にして父を失ふ。初め藩校に學び、後書を牧野天嶺に習ひ、儒學及文章を天山藤森弘庵に學び、川田剛と共に藤森門下の二秀才と稱せらる。安政五年堀田侯の小姓と爲り、次で

藩學都講に補せられ、藩校に教鞭を執ること數年、萬延元年一月聖廟掛となり、後代官として千葉に赴き、慶應二年再び江戸に上り、諸役を勤勤し、維新の後佐倉の大參事となり、更に參議院幹事に任じ、相濟社々長に擧げらる明治九年より太政官修史館へ出仕し、後文部省少書記官に任じ、十八年官職を辭し、爾來悠々自適、山水を友とし、詩文と親しみ、傍著述に従事し、又縱横の才筆を振り、以て東都の文壇を輝かせり。四十二年十二月歿す。年七十七。學海人と爲り、敢爲不屈の氣象に富み、能く飲み、能く談せり。資性多藝多能にして、學和漢に通じ、就中漢籍の造詣最も深く、文章に長じ、筆を執れば千言立所に成る。其他詩歌及書畫を善くし、好んで稗史小説を讀み、又演劇を愛し、少より老に至るの間、大小各種の演劇殆ど觀盡すといふ。而して自ら芳野捨遺名歌譽、俠美人等の脚本を作れり。(萬朝報、國民新聞、書家列傳)

著述

談叢。譚海。沾園。英武豪求。吉野捨遺名歌譽。小御門。十津川。俠美人。三條實美公。

失題

山橋虎豹海蛟龍。

萬里王師百練鋒。

第一新年快心事。

旭旗旅順最高峰。

依田學海

辭世

我未生時何有我。

我將死處我將無。

偶然寫去偶然滅。

水月鏡花一幅圖。

同人

新井白石

新井白石。名は君美、字は在中。通稱勘解由、別に天爵堂或は勿齋と號し、上總國久留里藩士新井正濟の一子なり。新井氏其先新田氏に出で、世々上野國荒井邑に居住し、初め荒井氏と稱し、天正中常陸に移れり。父正濟與次右衛門と稱し。三十一歳の時。江戸に來り、久留里藩主土屋利直に仕へ、寵あり。常に藩政に與かれり。白石明曆三年二月十日を以て、江戸に生まれ、幼にして頗る穎悟なり。藩侯及侯の母堂之を愛し、日々召して傍に置くこと、恰も侯子の如し。三歳字を寫し、四歳太平記の講讀を聞き、六歳盛岡藩主南部信濃守に知られ、土屋侯に請ひ、子として養はんことす、侯應ぜず。七歳父母に従ひ、戲劇を見、一々之を記憶して人に語る。八歳の頃より學に志し、秋冬の間。書三千字、夜一千字を寫し。長夜に至れば、水を瀉ぎて惰氣を驅り、螢雪以上に勉勵せり。十三歳の頃、常に藩侯の側に侍し、送答文を代書せり。十七歳の時、中江藤樹の著はせる翁問答を讀み、經學に志し、江馬益庵に就て學べり。時に家極めて貧しく、書籍を購ふこと能はず、概ね借來りて謄寫せりといふ。延寶二年藩主土屋利直に従ひ、上總に在り、事に坐して幽居せらる。同三年利直侯卒し、頼直嗣ぐ。父正濟久留里藩に仕へ、藩政に參與す

ること四十餘年、常に忠勤を勵みしが、頼直凡庸にして酒色に耽り、到底度し難きを慨き、去つて淺草報恩寺に隱棲せり。同四年久留里の藩臣中、廢立を企つる者あり、正濟に謀る。正濟其不正を説いて聽かず、同六年事露はれ、正濟事に與るこ看做され、追放せらる。正濟時に年七十八、白石は未だ二十二歳の壯者なりき。此事件の爲め、父子共に零落し、殆ど衣食に窮せり。然れども勇氣益強く、傲語して曰く丈夫生れて封侯たらずんば、死して當に閻羅王たるべしと、寢食を忘れて苦學せり。江戸の豪商河村瑞賢藏書に富み、白石の非凡なるを知り、三千兩の土地を附し、孫女を妻はせんことを請ふ。白石笑つて應ぜず。同七年舊藩主頼直素行修らず、藩政また亂るゝの故を以て、領地沒收せられ、其子主税嗣ぐに及び、白石父子の罪を許し、再び仕途を開けり。天和二年三月古河藩主堀田正俊に聘せらる、時に年二十六。此歳父正濟歿す、年八十二。貞享元年八月大老正俊殿中に刺され、正仲嗣ぐ。同三年木下順庵の門に入り、益經書を研む。元祿五年の秋古河藩を辭し、帷を城東に下して生徒に教授す。同六年舊師順庵の推舉により、甲斐國主徳川家宣に仕へ、初めて俸四十人口を受く。家宣學を好み、白石を遇すること日に渥し。白石公務の傍、筆を執り、藩翰譜二十卷を撰せり。寶永元年十二月家宣將軍

綱吉の世子と爲り、白石從て幕府に入り、若年寄支配を命ぜらる。同六年正月家宣將軍に任ず。白石上書して、皇族削髮の制を廢せしむ。爾來將軍の寵愛厚く、事大小となく之に諮ふ。同八年十月從五位下に叙し、筑後守に任じ食祿一千石を食めり。正徳二年十月將軍家宣薨じ、家繼嗣ぎ、白石の建策を用ゐしを以て、林大學頭及び俗吏の忌む所となり、享保元年四月八代將軍吉宗立つに及び、白石を斥く。白石も亦當世に意なく、門を閉ぢ、客を避け、著述に従事す。幕府頻に白石を憎み、屢居所を改易せらる。同十年五月歿す、年六十九。

白石人と爲り、風韻魁悟、精力絶倫、博覽強記、學和漢に通じ、兼て西洋地理を研め、我邦西歐研究の權輿たり。白石一代の碩學たりといへども、經世を以て自ら任じ、學を以て門戸を張らず、故に門人至つて少し。之に反し、力を著述に注ぎしを以て、著書頗る多く、凡そ三百餘部に達し、いづれも有用の篇なり。然れども時の不淑に逢ひ、態澤蕃山古河藩儒と同じく、其晩年を善くせざるは、誠に遺憾なり。明治四十年十一月朝廷其功を追賞し、正四位を贈らる。

先哲叢談。近世叢話。事實文編。君臣略傳。近世大儒列傳。少年立志篇。

著述

藩翰譜廿卷 古史通三卷 讀史餘論五卷 東雅七卷 本朝軍器考十四卷 孫武兵法擇三卷 冠服考一卷 經邦典例。朝鮮禮聘事二卷 應接事議。改貨議。改貨後議。鬼神論一卷 史疑。江左遺聞。采覽異言二卷 西洋紀聞三卷 西學難問。西學第峯。西洋圖說。西洋人物集。外國通信事畧。阿蘭陀記。阿蘭陀風土記。阿蘭陀考。蝦夷志二卷 琉球事畧二卷 折焚柴記三卷 白石詩集。白石遺文。白石餘稿三卷

(傳記) 白石江戸に生れ、江戸に生育せるを以て、世江戸の人と爲せり。然れども父正濟上總久留里藩に仕ふるに四十餘年、白石また二十二歳に至るの間、久留里藩に在り、屢上總に滯留せしを以て、上總の人と爲すも敢て防げ無し。今茲大正十一年五月廿五日編者相州江ノ島に遊ぶの途次、偶尋常小學用國史を繙くに、新井白石は上總の人なりとあり、迺ち文部省編纂官の證明を得たり。編者喜びの餘り、思はず手を拍ち、歸來直に本篇に編入すること、爲したり。敢て其理由を記す。

詩人傳

鱸松塘

鱸松塘。本姓鈴木氏、其先安西恭高に出で、安房郡谷向村に住す、父道順醫を業とす。松塘、名は元邦、字は彦之、別に東洋釣史或は十髯叟堂と號し、文政六年十二月を以て生る。人と爲り軀幹魁偉、志操高潔、夙に志を詩學に立て、天保十年詩傑梁川星巖の玉池吟社に入れり、時に年十七。先輩岡本黄石、大沼枕山、小野湖山等と相切磨し、遂に梁翁に推許せらる。又貫名海屋、賴三樹等と交り、得る所少からず。安政三年京都に上り、次で吉野に南朝の舊蹟を吊ひ、感慨吟咏せり。明治元年東京淺草に惟を下して教授す。贊をとるもの數百人、名聲大に著はる。同八年奥州松島より北海道に遊び、超海集の著あり。同十五年甲信地方の諸勝を探り、翌十六年再び吉野に遊び、行々雲州松江に抵り、十七年北陸道を遊歴し、足跡殆ど天下に遍く、到る所吟咏せり。大槻磐溪嘗て松塘の詩を評して曰く、斬新清靈風姿瀟洒、稚松の池塘に直立して、濯々青を抽くが如し。黄石、枕山、磐溪の諸氏先後凋謝し、松塘獨り霸を明治詩界に成せしか、明治三十一年十二月那古の別莊に歿す、

年七十六。

著述

超海集一冊。北游存稿四冊。快説續々記。芳雲游草。房山樓集四冊。松塘小稿一冊。松塘文集。七曲吟社詩八冊。

松塘ノ詩 松塘賦する所、皆風格高逸、一唱三嘆の妙あり、芳山懷古の如き、最も人口に膾炙す。

芳山懷古

松塘

青山滿目恨難銷。陵樹花飛春寂寥。猶有殘僧守蘭若。御容挂壁説南朝。

超海集序

鱸産之

北海之地山峻野曠、壤土可穀、朝廷置開拓使、化夷向華、風氣一新、不毛之域、漸入耕種。今茲八月余適挾孤硯以超北海、而自問其所能、則紙田筆鋤不過關區區詩境、豈謂小補子開拓哉、然他日官有采風之舉、吾什或將爲之首也。乙亥陽月盤古生日松塘釣史鱸元邦識。

俳人傳

白井鳥醉

白井鳥醉。名は信興、幼名喜六、後喜右衛門と稱し、別に牧羊と號す。上總國埴生郡地引村の人、元祿十三年を以て生まる。資性文學を好めども、家政の爲め、意の如くならず、享保十三年家を弟某に譲り、江戸に出て、松露庵一世佐久間柳居に就て、俳諧を學ぶ、時に年二十九。遂に松露庵二世の宗匠と爲る。後郷里に歸り、正善寺の境内に草廬を設け、露柱庵と稱せり。又南浦松原庵、大磯鳴立庵等に寓居し、其他諸國に庵室を創むること五ヶ所、句碑を建つること其數を知らず。明和六年四月江戸に歿す、年七十。著はす所、稻笈あり 門下中、春秋庵一世白雄、鳴立庵四世百明、東海房鳥明、嘸旭庵龜足、(俳家時人傳。俳家歿故年表。帝國人名辭典。上總町村誌。書家列傳。長生郡熊澤鳥醉。室賀元雨各名あり。就中白雄最も著はる。)

鳥醉

初空やよろこぶ雲の置どころ

醉ふことは天下はれたり花の山

大膽な遊びどころや揚雲雀

夕飯の煙へ入る乙鳥かな

行々子口をやすめに飛で行く

筑波から流れ出たり天の河
大原女の首のつよさよ初嵐

嘗て故郷の舊庵を訪ひ
涼しさや昔へ戻る夢の橋

常世田長翠

長翠。俳號を小篁庵椿海といひ、下總國匝瑳郡木戸村の人なり。春秋庵一世
白雄(鳥辭高弟)の門に入り、高足と稱せられ、後春秋庵二世の宗匠たり。性歴遊を
好み、嘗て中仙道本莊驛に寓し、晩年羽後國酒田袖が浦に草庵を結び、床庵
と號し、文化十年八月彼地に歿せり。作句頗る多し。門下に仁井田確嶺、寶夏靜等あり

(大家人名錄。俳諧年表。俳諧人物便覽。
帝國人名辭典。俳諧掌玉。太陽。)

長 翠

人の柳うらやましくも成にけり
雪の川世には曲らぬ物もなし
蚊の心蜘蛛さすまでに募りける
青鷺の火を定めたる時雨かな

青野太筇

太筇。名は椿丘、通稱慶次郎、別に猫頭庵、半年庵、青猿翁、迎風道人等の

諸號あり、香取郡東庄小南の人、俳諧をよくし、諸國を巡歴し、文政十一年
八月越後長岡に歿す。(俳諧年表。俳諧人物便覽。大日本人名辭書。)

著 述

しんなみ二冊。いぬいね年一冊。ひびく物語。俳諧發句題叢數冊。

俳 句

太 筇

山の雨つばめのたのむ家ありや
歸雁美濃や近江やあれやあれ
暮鳴や筑波につどく草の門
二荒の雪見て寝るか春の雁
水鳥やすめばすまる箱根山
山遠し蝶にはじめてあふ處
かはかりの董にさめぬ江戸心

小河原雨塘

雨塘。通稱七兵衛、千葉郡曾我野村の人、春秋庵加舎白雄の門に入り、白雄
門下八大家の一に數へらる。當時常世田長翠、今泉恒丸、建部巢光等皆同門
にあり、互に相切劇す。天保三年十一月歿す、年七十五。(俳諧名譽談。萬家人名錄。書家
列傳。大日本人名辭書。)

見すました山は櫻の上野哉
 出る月のいさよひたらず筑波山
 脊中から雪の旭のあたりけり
藪一つを國境なる古市といふ所にて
 下總の木の実を拾ふ上總哉

畫家傳

菱川師宣

菱川師宣。通稱喜兵衛、友竹と號す。安房平郡本郷村保田の人、菱川吉左衛門の子なり。家世々縫箔を業とす、師宣も亦初め家業なる縫箔に従事せしが、一朝感ずる所あり、天性畫に巧みなるより畫道を以て世に立たんと欲し、江戸に出で、敢て師に就かず、縫箔の上繪より習ひはじめ、浮世繪師岩佐又兵衛の筆意を模し、兼て土佐派の畫を學び、遂に一家を成せり。英一蝶の如き師宣の風を聞て頻に羨望せりといふ。師宣の畫は特に錦繪に作られ、落款に日本繪師菱川師宣或は大和繪師師宣と記せり。これ大和繪即ち江戸繪の開祖なり。時として房陽菱川友竹とも書せり。正徳四年八月歿す年七十七。子師房師水共に學法を交亦大和繪師として各名あり。師宣敢て師によらず、大和繪一名江戸繪を開創し、一代の巧手と稱せらる。當時宮川長春ありといへば、菱川やうの吾妻佛如何に世の賞讃を得たるかを想ふべし。現今師宣の繪として著はるもの、花見、演劇、花街、四季遊山、船遊、春宵祇戲等の圖あり。又板木本として、月次の遊一冊元禄四年出版和國百女三冊元禄八年出版畫本大和墨三冊。大和の大寄一

冊。畫本勇士ちか草貞享二年出版再版訓蒙圖彙。香具大全天和四年出版倭名所繪本三冊。戀のみな
 か一冊。江戸鹿子貞享四年其他江戸圖鑑網目。歲時記。買物調方三。年出版等。合集覽。近世大全等に師宣の挿畫あり。あり。今郷里別願寺掛る所の
 巨鐘は。師宣が父母の冥福を祈らん爲め寄進せるものなり。記に元祿七甲戌歲五月吉日寄進
 友竹と刻せり。

近世人傑傳に評して曰く、師宣の畫は、その浮世繪を興せしより、板下繪を盛行せしめしにより、
 更に名あり。殊に婦人を描くに於て、絶技と稱せらる。畫乘要略にいふ所の善寫邦俗美人、艶態柔
 情一見能動人心矣といふもの、決して溢美にあらず。然も其畫道に大功あるは、畫家空疎、支那
 の山水を畫き、古仙人を描き、古代の風俗を描き、徒に高雅を以て相崇尙し、現代の風俗人物を描
 寫するを遺れし時に於て、假令俗好に投せん意よりしても、よくこの瑕瑾を補ひ、浮世繪の一派
 を開きし一事は、本邦畫史に特筆せらるべきものなり。且つ前に言へし如く、その畫風古土佐に
 出でしを以つて、筆意柔婉にして委蛇、毫も骯髒の態なく、其色彩亦穩貼して、決して和諧を失
 はず、殊に浮世繪中最も品位に富めり。これより後稱して浮世繪といふもの、技巧に精にして品
 致太だ劣り、妓倡優を描いて、當世に媚ぶるより、他を知らず。中には北齋の如く、多能に、廣
 重の如く、山水を好んで描きしものあれども、その他は多く俗惡の趣を以て、猥瑣の筆を驅りし
 ものなり。師宣はこの儕倫の間に立ちて、標置自ら尋常ならざるを見る也。
(扶桑畫人傳。畫乘要略。近世逸人畫史。鑒定便覽。嬉遊笑覽。安房國誌。安房志。近世人傑傳。大日本人名辭書。帝國人名
 辭典。)

椿 椿 山

椿椿山。姓は平氏、名は弼、字は篤甫、通稱忠太郎、琢華堂又は休庵の別號
 あり。匝瑳郡椿海村の人、享和元年を以て生る。幼にして畫をよくし、神童の譽
 あり。夙に江戸に出で、谷文晁及び渡邊華山に就て、畫法を學び、後清人張秋谷
 の風を慕ひ、研究すること多年、人物花鳥獸蟲山水に至るまで、能くせざる
 所なく、就中最も花鳥に長じ、妙眞の巧、其師華山に劣らずといふ。安政元
 年七月歿す、年五十四一書五十六椿山人と爲り、體質羸瘦なれども、生氣頗る盛な
 り。彩管を執るの傍、親友大橋訥庵と共に、片山流の刀術を學び、又平山行
 藏につき、軍法を修め、其蘊奧を極めしと云ふ。大日本人名辭書
 日本畫骨董大辭典

鈴木 鵝 湖

鈴木鵝湖。名は雄、字は雄飛、通稱漸造、下總國手賀沼附近の人(人名辭書には常
 陸の産なりとあり)手賀沼一に天鵞湖と稱す、故に鵞湖と號す。晚年略して我古山人
 と改む。初め谷文晁の門に入り、畫法を學び、山水人物花鳥を能くせり。後
 畫風一變して、自ら一家を成せり。明治三年四月歿す、年五十五(扶桑畫人傳、帝國
 人名辭典、明治大正名畫家傳、明治大年表)

河 鍋 曉 齋

河鍋曉齋。名は陳之、洞郁と稱し、初め猩々狂齋、後曉齋と號し、別に猩々庵、猩々狂者、酒亂齋、雷醉、畫鬼畑狂者、周磨、如空入道等の數號あり。天保二年四月を以て、下總國古河に生る。家もと穀商を業とす。曉齋初め周五郎と稱し、古河藩士河鍋正信の養嗣子と爲れり。幼にして畫を好み、七歳の時、江戸に出で、一勇齋國芳の門に入り、浮世畫を學びしが、幾もなく同門を去り、一時前川洞和に學び、十一歳の時より、幕府の畫工狩野洞白の學僕と爲り、晝夜勉強せり。嘉永七年筑前國主黒田侯に聘せられ、又幕命により日光廟及楓山靈廟の古畫を修飾す。慶應元年上州より信州に遊び、妙義山をはじめ、筑摩川、善光寺、戸隠山、姥捨山等の諸勝を寫生せり。明治三年十月外人を諷刺せる狂畫を書き、獄に投ぜらる、ここ四ヶ月、是より狂齋を改め、曉齋と號す。同十年勸業博覽會に枯木寒鴉の粗畫を出品し、金百圓を得、畫名を世界に轟かせり。是に於て鴉萬國飛の畫印を用ゐる得意たり。後房總常野の各地を漫遊し、又門人ゼノコンデル氏と共に、鎌倉及日光山に遊び、到る所の勝景を寫生せり。二十年門人瓜生政、曉齋畫談四卷を發行し、古今名家の筆意と曉齋の經歷とを示せり。二十二年四月歿す、年五十九。曉齋人と爲り疎懶にして、意に滿ざる時は、筆を執らず、之に反し、一たび筆をとれば、僅か數時間にして大畫

を成すを得。常に酒を好み、放縱度なしといへども、畫事に至つては、頗る意を用ゐ、博く古畫を蒐集し、諸流の筆力を研究せり。而て敬神の念厚く、日課として觀世音及天滿天神の像を書き又諸方の神社佛閣に奉納せる畫額多し。慶應中信州戸隠山に遊びし時、大社拜殿十間四方の天井板に、大龍を描き、一山の人々を驚せり。又明治七年三月畫きし湯島天神の繪馬は、野見宿彌と當麻蹶速角力の圖にして、堅四尺、横六尺あり。同十三年に畫きし下總成田山の奉額は、大森彦七鬼女と闘ふの圖にして、堅六尺、横九尺に達す。又曉齋の畫きし神田明神の衝立は、堅六尺横九尺にして、獅子奮闘の圖なり。此他佳作と稱すべきもの頗る多し。(曉齋畫談、明治大正名畫家傳、畫家列傳)

著書

曉齋略畫一冊。曉齋畫談四冊。曉齋百鬼畫談一冊。

服部波山

服部波山。字は自牧、通稱謙藏、下總國豐田郡下石尾村の人、幼にして畫を好み、若冠江戸に出で、初め和田蹊齋の門に入り、學を修め、大沼枕山、小室樵山等と交はれり。資性畫を好み、遂に南宗派の名家と爲れり。人として淳樸にして、邊幅を飾らず、奇行多し。常に山水を愛し、嘗て信越紀相に遊び到る所の景勝を寫生せり。明治二十七年十月歿す、年七十三。(帝國人名辭典、明治大

正名畫家傳。

猪瀬東寧

猪瀬東寧。名は恕字は如心、初め專齋、後東寧と號し、別に超毛騰霧樓の號あり。下總の人、秋葉某の子、長じて猪瀬氏を嗣げり。安政三年京師に出て、南宗の大家日根野對山の門に入り、畫法を學び、後東京に來り、自ら元明遺法を研究して、一家を成せり。明治四十三年歿す、年七十三。(明治大正名畫家傳)

奥原晴湖

奥原晴湖。別に東海と號し、下總古河藩の人、年少ふして江戸に出て、清人魏胎に就き、南宗の畫風を學び、後鄭板橋に私淑し、漢籍に通じ、最も文人畫に長じ、安田老山と並び稱せらる。晴湖の畫たるや、古今名家の精英を咀嚼し、自ら規型の外は超越し、決して尋常一流の畫工の企て及ぶ所に非ず、夙に木戸孝九等の知遇を得、明治の初年既た東海五大家の一に數へらる。嘗て明治天皇の御前に於て、揮毫の光榮を得たり。晴湖人と爲り、識見高く、天機活潑、風貌男子の如く、好んで武術を修め、奇言異行世を驚せしこと少からず。明治二十四五年の頃、紅塵を避けて、武州熊谷在川上村に移住し、更に北埼玉郡成田村に閑居し、悠悠自適、風月を友とし、老年を送り、大正二

年七月同地に歿す、年七十七。門人晴翠(陸前の人)を養女とす。

晴湖

秋月明光滿碧空。窓前吳樂一杯中。三更未寐今夜興。寂々蟲聲雜冷風。

うつつしかた繪にかく竹の一節を世には高くも人に知られん

高橋由一

高橋由一。諱は怡之、幼名猪之助、藍川と號し、舊佐倉藩士にして、文政十一年を以て生まる。幼にして繪畫を好み、江戸に出て、初め日本畫を學べり。文久二年九月蕃所取調所の附屬畫學局に入り、川上冬崖信州の人、初め南畫を學び、後蘭畫により洋畫を研究すの指導を受け、洋畫を修む。又英國公使館所屬武官ワルグマン氏に就て、畫法を練習し、或は遠く上海に遊び、洋畫家と交はり、只管斯道の蘊奥を極め、遂に一家を成せり。慶應二年諸生と共に、洋畫を描き、佛國巴里の博覽會に出品せり。明治三年八月民政部に出仕し、同四年大學南校に畫科を設くるや、之が教授を命ぜらる。同五年大學を辞し、翌六年東京日本橋區濱町に、天繪學舎なる學校を創立し、洋畫の子弟を教授せり。當時南畫及び洋畫流行し、四條圓山派の如き、顧みるものなし。彼の川端玉章、荒木寛畝の如きも、一時

天繪學舎に入り、洋畫を學びしと云ふ。明治十四五年の頃より日本畫漸く勃興し、洋畫や衰へたりといへども、佐倉出身淺井忠、佐倉出身小山正太郎等の奮勵により、日本畫と並進するの機運に向へり。由一は、實に洋畫に於ける元勳にして、明治二十七年七月を以て歿す、年六十七。(大日本人名辭書。日本書畫骨董大辭典。明治大年表。)

淺井忠

淺井忠。初め忠之丞、佐倉藩士伊織常明の次男にして、安政三年六月を以て生れ、淺井氏を嗣げり。幼にして父を失ひ、早くも家事にたづさはりたり。維新の後東京に出て、英學を修め、明治八年西洋畫家國澤新九郎英國より歸り彩技堂を開設するや、其門に入り、洋畫を學び、翌九年工學寮にて、伊太利より畫師を聘するや、更に工學寮内なる美術學校に轉じ、伊太利人に就き、熱心洋畫を研究し、卒業の後、同窓小山正太郎と共に、共同研究所を設け、諸生を募り、洋畫を鼓吹せり。然るに明治十四五年の頃洋畫を排斥するもの多く爲に共進會に出品するを得ざりき。淺井小山等大に憤慨し、明治美術會なるものを創立し、大に世人を驚かしめたり。明治二十七八年の日清戰役に際し洋畫の手腕を示さんとて、小山氏と共に、第二軍に従ひ、各地の戰況を寫生

し、漸次洋畫の隆盛を見るに至れり。後東京美術學校の教授に任ぜられ、三十二年文部省より佛國に留學を命ぜられ、彼地に居ること三年、歸朝の後京都高等工業學校の教授に轉じ、大に其妙腕を發揮せんこせしが、四十年十二月長逝せられたり、年五十三。忠人と爲り、溫厚にして氣品高く、趣味多し。嘗て内國博覽會及聖路易萬國博覽會の審査官たり。(讀賣新聞。畫家列傳)

根本樵谷

根本樵谷。名は郁二郎、別に枕雪、夢雪庵、錦雲堂等の號あり。市原郡白鳥村の人。茶人清風の子にして、安政四年十二月を以て生る。幼少の時より繪畫を好み、郷里にありて研究する所あり、明治十八年東京に出て、初め和洋折衷の肖像畫を修め、同二十二年雲谷流第十二世杉谷雪樵の門に入り、研鑽するここ數年、其技大に上達し、雪樵歿後、直に雲谷流第十三世を繼ぎ、よく其師を辱しめず、美術協會、東京文墨協會等の古參として重きを措かる。樵谷の最も得意とする所は、墨馬、遊鯉等にして、各博覽會、展覽會に出品して、賞與を受くること、前後數十回。而して常に清貧に安んじ、嘗て巨資を投じて恩師の碑を向島百花園に建て、又恩師の爲め、湯島麟祥院に於て大供養を

執行し、或は自畫を賣りて軍資金を献上する等、平凡なる墨奴の爲す所に非らず、大正二年一月歿す、年五十五。常に遊歴を好み足跡天下に普し。嗣子柳作、雪篷と號し、亦畫を以て業こす。

高森碎巖

高森碎巖。名は有造、自知齋。菊梁、朶香等の別號あり。上總國廳南町の人弘化四年五月を以て生る。初め服部蘭臺(九州の人)に就き、漢學を學び、經史百家の書に通曉す。明治の初年下谷根岸に獨力私塾を設け、漢學を教ゆ。三十歳の頃南宗畫家山本琴谷(渡邊華山の弟也)の門に入り、南畫を學び、最も山水花鳥に長ぜり。而して漢畫の畫論に至つては、明治より大正に亙り、其右に出づるものなし。大正五年齡七十歳に達せしを以て、斷然畫界より退隱し、悠々餘生を樂しまんごせしが、翌六年十月病歿せり、年七十一。碎巖十一歳(或は十七)の時江戸に出で、具に辛酸を嘗め、夙に華山の正系を繼ぎ、既に大成せるも、世其人あるを知らず、晩年漸く畫名を著はし、野口小蘋と共に、南宗畫界に於ける泰山北斗と稱せらるゝに至る。碎巖繪畫の外、書をよくし、又詩文に長ず。

(繪畫清談。碎巖紙本畫集。明治大正名畫家傳。東京朝日新聞)

書家傳

大川椿海

大川椿海。名は衡、字は子銓。香之進と稱し、別に香海、椎臺、醉仙、思歸堂、三月亭等の雅號あり。匝瑳郡八日市場村の人。幼にして書を能くす、少老大久保佐渡守に知られ、學費を給せられ、書を細井廣澤に、畫を山本養徳に學べり。後一筆畫を創め、連綿畫と名づけ、一時大に行はる。享保中韓使來聘す、時に椿海能書を以て、林大學頭に招かれ、之が書記に任じ、韓使に應接せり安永三年十月歿す、年六十一。(下總國舊事考。東京朝日新聞。畫家列傳)

柳田正齋

柳田正齋。名は貞亮、字は節夫、香取郡佐原村の人。江戸に出て、初め昌平黌に入り、儒學を修む。天性書に巧みなるより、趙子昂の風に習ひ、後王羲之を學び、遂に一家を成せり。東京龜澤町に私塾を設け、名聲高し。明治二十一年九月歿す、年九十二。著はす所、歲華小牘、今様假字消息等あり。香取神苑内清宮秀堅の撰文碑は、正齋の書なり。(帝國人名辭典。明治大年表。書家列傳。現今英名百首)

現今英名百首の中
命毛のあらむ限りはかきつめて、筆の林にふかく遊ばん

柳田正齋

植竹雲邦

植竹雲邦。名は宜好、通稱武之助。千葉郡都賀村園生の人、書法に通じ、書を善くせり。嘗て東京下谷區に、東京書法學校を創立し、生徒を教ゆ、我邦書法學校の設立は、實に雲邦を以て始めとす。明治三十五年歿す、年三十一。

著書

手本筆意點。習字活法。特許手本三銘帖。特許手本七十二勢表。草書一定表。

香川松石

香川松石。名は皞。通稱熊藏。千葉市登戸の人。夙に書を日下部鳴鶴に學び造詣頗る深く、明治十四年五月千葉師範學校教員となりし以來、同四十一年三月に至るまで、二十有七年の間、本縣の師範教育に従事し、其間女子師範及千葉中學の教員を兼任し、其薰陶を受けし者、實に千有餘人。而して公務の餘暇、小學及中學の習字教科書を草し、又文部省の囑託を受け、國定教科書の書方手本を揮毫し、名聲天下に著しく、筆蹟全國に及べり。明治四十四年

九月歿す。

著書

尋常國語習字帖 金港堂發行 五冊。尋常習字帖 千葉教育會發行 實驗國語習字帖 東京教育書院發行 修正小學習字帖 金港堂發行 五冊
同高等用上高等國語習字帖 金港堂發行 八冊 同女子用 同上 三體千字文一冊。尋常小學書キ方手本 文部省發行 十二冊

著述家傳

清宮棠陰

清宮棠陰。名は秀堅、字は穎栗、別に縑浦漁者の號あり。香取郡佐原村の人。世々利右衛門と稱し、父滄洲漢籍に通じ詩及畫を善くせり。棠陰文化六年十月を以て生れ。四歳母に別れ、九歳父を喪ひ、獨り祖母により鞠育せらる。幼にして學を好み、大に爲す所あらんと欲すれども、家道衰頽せる上、祖母家に在り、笈を負ふて遠く遊ぶ能はず、僅に久保木竹窓、宮本茶村等の先輩に就き、疑義を質すに過ぎず。而して拮据經營家運を回復し、二十七歳の時推されて里正と爲り、苗字帶刀を許さる。天保十三年邑主浦田氏の家政を修整し、給人格となる。常に伊藤德輝と共に計畫し、大に治績を擧ぐ。明治六年印旛縣に召され、地理編輯の任に當り、香取海上匝瑳三郡小誌を著し、晩年權中講義に補し、私財を投じて道路を修むること十餘村に及び、爲に銀杯を賜はる。明治十年平生愛する所の圖書畫幅の類を親戚故舊に頒ち、翌十二年十月歿す、年七十一。棠陰人と爲り、寛厚謹嚴、經濟に長じ、造詣深く、北總の僻地に在りながら、藤森天山、大橋訥庵、鹽谷宕陰、黒川春村等天下の

學士と交り、暇あれば即ち著述に従事し、著作する所頗る多く、就中下總國舊事考十五卷の如き、畢生の心血を注ぎて成れるもの、攷據精覈、房總の學界に貢獻する所頗る多し。又藤原師賢卿の事蹟を探究し、首として之を表彰し、遂に別格官幣社を創建するの機運を作れり。棠陰亦詩をよくし、北總詩誌の著あり、實に地方稀に見る篤學者なり。(下總舊事考、墓碣銘、香取郡誌、大日本人名辭書、明治大年表)

著述

下總國舊事考十五卷。下總國全圖一舖。下總式内神社考一枚。下總志稿底本。下總社寺古文書纂若干帖。下總金石鐘識隨得集若干帖。香取新志一卷。新編香取志三卷。北總詩誌一卷。古學小傳三卷。三家文鈔一卷。雲烟略傳二卷。地方新書度量權部一卷。同田制部一卷。經邦或考若干卷。喪儀備考一卷。三條餘論三卷。國體正論一卷。正氣帖五帖。新撰年表一卷。掌中新撰年表一卷。八史測義若干卷。外史劄記一卷。棠陰遺稿若干卷。總廻合集一卷。以上二十五種

邨岡良弼

邨岡良弼。幼名五郎、櫟齋と號し、又赤檮舎、如蘭社等の稱あり。下總國香取郡の人、澁谷義孝の二男、弘化二年二月を以て生る。長ずるに及び、邨岡氏を襲へり。安政五年江戸に出で、水本樹堂の門に入り、明治二年大學に學び明法科を修め、古來の諸制度を研究す。又箕作麟祥の塾に寄宿し、佛蘭西法

律を講習す。明治四年明法寮少法官に任じ、改定律令の編纂に與る。同六年修志局長に轉じ、同八年司法大録となり、現行刑法の編纂に與り、同十三年太政官法制局に勤務し、尋て參事院議官補に任じ、兼て圖書寮に出仕し、同十九年内閣記録局長に專任し、其間刑法志、大政紀要、法規分類大全等を編せり。又明治八年より殆ど二十年に亘る長年月を費し、大日本地理志科七十卷を著はせり。二十九年より水戸徳川家の委囑を受け、彰考館編修を爲り、大日本史の國郡志を編述せり。良弼學和漢を兼ね、詩歌及文章に達し、又雅樂に通ぜり、居常他の嗜好なく、朝夕文筆を友とし、著書頗る多し。就中續日本後紀纂話二十卷の如き、學界に貢獻する所多く、大正二年七月帝國學士院に於て、恩賜金一千圓授與せらる。同六年歿す、年七十四。(大日本人名辭書。日本名家略傳。東京朝日新聞)

著述

大日本地理志科七十卷。續日本後紀纂話二十卷。文德實錄纂話。明治法制略。刑法沿革圖說。詔勅考。樂器考證。安房國神社志料。上總國神社志料。文貞公年表。澁谷譜略。千葉日記。房總遊乘一冊。北總詩史二冊。小金紀行。東省小稿。拜陵日録。高嶺の由紀。介壽録。櫟齋文存。櫟齋詩存。赤檮舍歌集。赤檮舍文集。櫟齋偶筆。如蘭社話。以上二十五種

僧侶傳

僧日蓮

僧日蓮。安房國長狹郡小湊の人、貫名次郎重忠の三男なり。父重忠遠州山名郡貫名の豪族にして、鎌倉幕府に仕へしが、建仁三年五月平氏の殘黨に與みせりと看做され、安房國に流さる、時に年三十。依て市河郷小湊に住し、漁釣の傍附近の子弟を教へ、常に漁民を徳化せり。日蓮人皇第八十六代後堀河天皇の貞應元年二月十六日を以て誕生し、幼名を善日磨といへり。幼にして穎悟、十二歳の時、清澄山に登り、道善密師に就き教を請ひ、藥王磨と改め。内外の經典を研鑽し、十八歳(或十六歳)の時、學徳既に一山を壓せり。道善大に喜び、父母の快諾を得て、剃髮の式を擧げ、是生坊蓮長と號せり。時に延應元年十月七日。爾來專心佛理を研め、一切經七千三百九十九卷を閲讀せり。一夜涅槃經を讀み、大に疑を起し、鎌倉に至り、高緇碩徳を訪ひて、解決を求むること一年、遂に要領を得ずして清澄に還り、戒體即身成佛義を著はし、寛仁元年比叡山に登り、次で京都及南都の七大寺に遊び、或は高野山に登り、天台、眞言、臨濟の諸宗を比較研究し、京畿に留學すること凡十二

年、深く法華經の妙理を悟り、妙法を弘通するを以て畢生の目的と決心し。建長五年清澄山に歸り、同年四月二十八日の曉天、旭日に對ひ、高聲、南無妙法蓮華經を連唱し、自ら新宗の開宣を爲しぬ。此日一山の道俗を招き、法華經の眞理功德を説き、他宗の非理を誹謗して憚る所なし、衆大に驚き、法僧を以て目笑せり、時に年三十二。自ら法名を日蓮と改む。思へらく法を弘むる鎌倉に若くはなしと、同年八月名越の松葉ヶ谷に草庵を結び、日々説法し、又小町の往還に立ちて念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と絶叫して法戰を挑みけるに、當時の名僧高衲また如何ともする能はざりき。方ま、下總平賀の人成辨來りて日蓮に投ず、これ日蓮最初の法弟日昭なり。翌建長六年十月下總野手の人印東有國一子を携へ、師弟の約を結ぶ、第二の法弟日朗これあり。同年兩總に遊び、葛飾郡若宮にて、領主富木播摩守胤繼(常)の歸衣を得、康元元年四條賴基、池上宗仲、荏原義宗等來つて檀越となり、信徒日に多きを加ふ。文應元年七月立正安國論を著はし、前執權北條時頼に獻し、佛法の正邪を論じ、捨邪歸正を諫めぬ、聽れず、敵宗之を機こし、同年八月二十七日の夜草庵を襲撃し、之を燒拂へり。富木常忍日蓮を護り、下總中山に歸り、法華堂を設け、法筵を開くこと一百日、教化を受くるもの頗る多し。弘長元年

五月讒により、伊豆の伊東に竄せらる、時に年四十。同三年二月赦に値ひ、鎌倉に歸り、文永元年八月安房に歸省し、老母を慰安し、弟子日向を得たり。同十一月十一日小松原にて東條景信に襲撃せられ、上總に逃れ、常野を巡りて庶民を教化し、同四年下總に布教し、同五年蒙古の使來るや、書を執權北條時宗に呈し、安國論の的確なるを論じ、更に諸宗の智識と對決せしめ、其邪正を辨別せんことを請ふ、是に於て異宗の讒謗攻撃益加はれり。同八年九月更に狀を具して極諫せり。此時異宗一致して日蓮を憎み、頻に讒訴せしかば、幕府日蓮を執へ、鎌倉龍ノ口に斬らんとし、奇異に感じて果さず、更に佐渡に遠流せらる。同島に在るの間、妙法の教化を受け、歸依するもの多し。同十一年二月赦免せられ、鎌倉に歸り、比企能本の請により、長興山妙本寺を開創す、同年四月北條氏の家臣平頼綱に對し、佛法の正邪を論ず、執權時宗感ずる所あり、宗門弘道の定牒を與るも、未だ妙法に歸依せざるを以て、日蓮嘆息し、三度諫めて聽かれずんば、則ち已まんと、是より遁世の志を懷き、同年五月甲州身延山に隱退せり、時に年五十三。近年日蓮の豫言着々實現し、蒙古の軍屢來つて、九州近島を侵かし、天下騒然たり。日蓮幽邃の地に閑居し、法徒の爲め妙法を講ずるの傍、著述に従事す。顯立正意立正觀、

撰時抄、報恩鈔、觀門一策、眞言見聞、宗教一策、八幡鈔等皆身延閑居中に成れり。弘安四年五月蒙古の大軍十萬、鰲鱉三千艘を以て九州に來寇し、颯風の爲め全滅し、生きて還るもの僅か三人、幕府日蓮の先見に服せり。同年十一月久遠寺を開堂す、諸國の信徒來集して、日蓮を崇むこと活佛の如し。同五年七月中風に罹り、思ふ所ありしを以て、武州池上に赴き、右衛門大夫宗仲の邸にて攝養し、本門寺開堂の式を挙げ、安國論を講ぜり。十月八日病革らんとするを以て、日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の六人を上足を定め、法燈を傳承せしめ、又經一磨(日像)に京都弘通を囑し、同月十三日眠るが如くに入滅せり、享年六十一、法臘四十四。法弟檀那等遺骨を擁して身延山に葬れり。而して滅後七十一年、靈元天皇勅して大菩薩號を追贈せらる。

日蓮一たび新宗を開くや、有爲の法弟等奮然蹶起、巡錫布教に努めしを以て、忽ち天下に流布し轉宗歸依するもの頗る多く第七十六代後醍醐天皇法華宗號の綸旨を賜ひ、靈元天皇の康永二年六月勅して大菩薩の追號を賜ふ、實に日蓮入滅せしより七十一年の後也。第一百一代後花園天皇の頃最も隆盛を極めたり。而して一致勝劣の二大派に分れ、更に日蓮宗、不受不施派、不受不施講門派興門派一に富士派、本成寺派今法華宗、妙滿寺派今顯本八品派、法華宗今本門、本隆寺派今本妙の八派に分れ、時に盛衰ありといへども、現今本山の數のみ六十餘、信徒五百萬を下らず、亦盛なりといふべし。日蓮はたゞに宗教界の偉人なるのみならず、實に日本史上に於ける一箇の英雄なり。英雄中にも剛

毅、友愛、信義、至孝、慈仁、愛國、忠君、謹勉等あらゆる美性を具へたる英雄なり。近年宗教家をはじめ、學者軍人等類に日蓮主義を唱ふ。これ日蓮宗の眞髓法華經の教義にあらず、日蓮の人格を崇拜する一派なること、彼の二宮尊徳の報徳教に於けるが如し、偉なる哉。

著述

戒體即身成佛義仁治三年、祈禱經建長五年、註法華經建長七年、一代大意正嘉二年、一念三千義同、守護國家論正元元年、佛上權門無得道義同、法界因果文應元年、唱題鈔同、立正安國論同、上行口傳弘長二年、宗教一策文永元年、法華題目永三年、秀句十勝文永七年、直言天台勝劣同、開目鈔文永九年、佛法血脉文永十年、觀心本尊鈔同、如說修行同、題佛未來同、灌頂口傳文永十一年、法華取要同、顯立正意立正觀同、撰時鈔建治元年、觀門一策建治二年、直言見聞同、宗教一策建治三年、諸佛總勘文弘安二年、八幡鈔弘安三年、藥王得意同

日蓮遺文

高祖遺文錄鎌倉獅子王、日蓮上人遺文全集、日蓮御遺文加藤文雅校訂、高祖遺文錄匡謬小林董著、祖書綱要釋日蓮編同、三十五年

日蓮に関する圖書

○傳記 日蓮略傳釋承惠著、日蓮大士眞實錄僧日證著、日蓮化道記釋日朝、元祖蓮公薩陞略傳釋承謀著、本化高祖紀年錄深見德著、日蓮大菩薩記加井井忠著、蓮祖舊跡志堀江是顯、日蓮大士眞實傳小川泰堂著、大聖日蓮深密傳釋昭著、日蓮宗祖眞實略傳山名太喜著、日蓮上人傳教界偉人叢書、日蓮傳記集日宗全書、日蓮大和田建樹、日蓮村上浪六著、英勇僧日蓮池鹿庵著、日蓮上人傳龍夫著、日蓮上人自叙傳國友誠編、日蓮明治三十一年、日蓮村上浪六著、正二年、日蓮聖人傳龍文菊地茂、法華經の行者日蓮日蓮上人、實說日蓮一代記村田勝太郎著、日蓮上人の孝道磯野本精著、大聖日蓮高須梅溪著、大聖日蓮正傳日蓮宗史書編纂會、法華行者日蓮上人松川二郎著、法華魂青木白風著、大正六年一月、大正六年四月、大正六年七月發行

正六年 日蓮聖人と其殉教者 高須梅溪著 八月 大正六年九月

○圖繪—日蓮上人注書讀釋 日澄著 日蓮上人御一代記圖繪 宇喜多小十郎 日蓮聖人開宗記念大會圖會 明治五年東陽 日蓮宗各本山圖會 石倉重繼編 日蓮上人 熊田葦城著 日蓮上人一代圖會 中村松亭撰 北齋畫堂發行 日蓮上人御聖蹟普及會 日蓮聖人正傳畫帖 日蓮聖人御傳畫普及會 大正六年六月發行

○論說—挫日蓮 寛政四年の序 破日蓮編 石井韓 日蓮論 高橋 日蓮論 木下尚江著 赤裸にしたる日蓮 足立粟園著 明治三十九年 論批論 小倉道敏編 日蓮聖人の教義 田中智學著 本化攝折論 田中智學述 高山樗牛と日蓮上人 姉崎博士山川智應 心理學上より觀たる日蓮 高島平三郎著 日本の國體と日蓮聖人 清水梁山著 名古屋 慈龍風發行 二圓五十錢

○日蓮主義—日蓮主義 本多日生著 博文館發行 日蓮主義 海軍中將佐藤鐵太郎著 日蓮主義研究講話 本多日生著 大正六年七月 修養と日蓮主義 本多日生著 大正六年九月 博文館發行

○日蓮主義叢書—日蓮聖人と耶蘇 山川 國聖としての日蓮聖人 志村 種々御振舞御書略註 山川 龍口法難論 田智聖訓の研究 志村 日蓮聖人と親鸞 智應 立正安國論新譯 長瀨 日蓮主義と世の中 志村 日蓮主義と現代將來 山川 日蓮宗叢書 會長子爵河田春雄 智應 大正六年七月創立

○經典—法華經講義 織田得能 法華經講義 本多日生述 和譯法華經 山川智 活ける法華經 鐵禪日殺著 大正五年十二月 江部鴨村著 大正六年九月 叢談 田中智 日蓮宗聖典 柴田山田編 法華經の眞理 大正六年九月

○日蓮鑽仰—天晴會講演錄第一輯。同第二輯 明治四十四年 發行定價二圓
○新聞雜誌—妙宗 鎌倉獅子王 日蓮主義 同上 國柱新聞 同上 鷺の山風 同上 日宗新報。統一 日蓮宗 法華 法華會 發行

日本之柱 大坂市立 妙教 東京芝區 大日蓮 社發行 天業民報

○文學—日蓮上人 今村紫紅作 聖日蓮の文學觀 小泉智著 明治三十九年

○脚本—日蓮御一代記 元文元 日蓮記 近松兼林 日蓮記 福地櫻 法難 大正 年 出版 並木宗輔 痴作 坪内逍遙作

僧 日 昭

僧日昭。大成辨阿闍梨と號し、下總葛飾郡平賀村今小の人、畠山祐昭の長男なり。人皇第八十七代四條天皇の嘉禎二年を以て生る。建長元年出家して、成辨と稱す、年甫めて十四。後比叡山に登り尊海に師事す、尊海成辨の器たるを悦び、常に之を激勵し、法友日蓮の人となるを賞揚す、成辨欽慕已まず關東に下りて日蓮を尋ぬ。成辨の姉同國匝瑳郡印東有國に嫁し、深く日蓮に歸依すると聞き、直に鎌倉に至り、日蓮を訪ひ師弟の約を結び、日昭と改む。正嘉二年日蓮故郷房州に赴くに際し、後事を託す、日昭師恩に感じ、只管布教に盡瘁せり。即ち日蓮六老僧の第一位に擧げらる。弘安五年十月日蓮病に罹るや、日昭を召し、自筆註妙經開結十卷、法華三部要文三卷、本理大綱集一卷並に肉牙二箇を襲藏せしむ。日蓮入滅後、身延清規一策を作り、遺命を遵守せり。徳治元年越後三島郡に法王山妙法寺を建立し、文保元年伊豆玉澤に弘延

山妙法華寺を開創し、其傍に小庵を結び閑居し、元享三年三月寂す、年八十八、

僧 日 朗

僧日朗。大國阿闍梨と號し、下總國匝瑳郡能手猿島郡能天さあの人。印東治郎左衛門有國の子にして、人皇第八十八代後瑤峨天皇の寛元二年四月を以て生る。初め吉祥麿と稱す、建長六年父有國に伴はれ、鎌倉に至り、日蓮に寄る、文應元年髪を削り、筑後房日朗と改む、時に年十六。文永八年日蓮と共に執へられ土牢に投ぜらる。後赦されて鎌倉に在り、北條氏に就き、日蓮の赦免を請ふこと三年、遂に尤さる、を得、其赦狀を捧じ、遠く佐渡に往き、共に鎌倉に歸る。同年檀那比企能本の請ひにより、鎌倉に妙本寺を建立し、池上宗仲長榮山本門寺を建つるや、日朗之を監督し、建治三年曾谷教信の爲め、下總葛飾郡平賀に本土寺を開創せり。日蓮六老僧の第二位にして、日蓮師に次ぎ、池上本門寺第二世の住職たり。元應元年正月池上に寂す、年七十八。人となり温厚よく其師に仕へ、常に教訓を守り、至孝第一と稱せらる。日蓮病むや、一日日朗を召し、立像の釋迦、立正安國論及讓狀を與へて之が弘通を囑せり。日朗の弟子中、日像、日輪、日善、日傳、日印、日澄、日行、朗慶等九人を、世

世に九老僧と稱し、いづれも日蓮宗に於ける功僧なり。靈元天皇の康永二年、日朗に對し、特に菩薩號を追贈せらる、(日蓮傳記。玉石雜記。下總舊事考)

僧 日 向

僧日向。佐渡阿闍梨と號し、安房國長狹郡和泉村男金の人。男金藤三郎實長の子にして、人皇第八十九代後深草天皇の建長五年二月を以て生れ、初め民部と稱せり。民部の祖父小林實信元北面の武士たり、頗る氣慨あり、常に北條氏の專横を憎めり。元久二年二月平氏の殘黨伊賀に起るや、實信其族貫名重忠日蓮の父と共に之に與みすと認められ、實信は上總藻原に、重忠は房州小湊に貶謫せらる。實信の子實長房州男金に移り、男金藤三郎と稱せり。

文永元年日蓮房州小湊に歸り、老母を省するの時、父實長に伴はれて日蓮の弟子となり、日向と改む、時に年甫めて十一。爾來日蓮に侍し、宗義に亘るものは、一々之を筆録す、世之を日向記といふ。同八年九月日蓮龍ノ口に果されんとするや、急ぎ日向を呼び、宗旨の三大事を口傳せり、時に年十九。日蓮佐渡に流さるゝや、日向日昭と共に師に従ひて佐渡に渡り、孤嶋に在ること四年、同十一年鎌倉に歸り、弘安五年上總藻原領主齋藤兼綱の請により、藻原に妙光寺を開創し、同五年十月日蓮入滅するや、身延の地頭波木井

實長の請ひにより、久遠寺第二世となり、藻原妙光寺を兼ね、兩山を兼職する。こご二十七年、正和元年老體の故を以て、上總埴生郡坂本村に隱退し、同九月入寂せり、年六十一。

僧 日 頂

僧日頂。伊豫阿闍梨と號し、下總葛飾郡若宮の邑主富木胤繼の養子なり。人皇第八十九代後深草天皇の建長六年を以て生る。日向出生一年の後日頂の父某戰死し、母孤兒三人を養ふて鎌倉に在りしが、偶富木胤繼妻を喪ひ獨居せるを以て、富木氏に再嫁せり。幼にして僧と爲り、初め眞言宗眞間山弘法寺に入り、伊豫房と稱せしも、故ありて同寺を去れり。文永四年日蓮房州を發し、鎌倉に赴かんご欲し、下總葛飾の浦を過ぐるや、胤繼伊豫房を携へ日蓮の弟子と爲し、日頂と改む、時に年十六。爾來日蓮に仕へ、最も孝謹なりければ、當時戒行第一と稱せられ、日蓮六老僧の第五位たり。建長五年弘法寺の住職となり、日蓮宗に改む。即ち日蓮宗六門下の一なり。文保元年三月寂す年六十六。

僧 日 像

僧日像。肥後阿闍梨と號し、下總國葛飾郡平賀村の人、平賀左近將監忠晴の

子にして、第九十代龜山天皇の文永六年八月を以て生る。初め萬壽丸と稱し父忠晴戰死の後、母に従ひ鎌倉比企谷に到り、身を日朗の母印東氏に寄せ、建治元年二月日朗に謁し、高祖日蓮の弟子たらんごを請ふ、時に年甫めて七歳。日朗萬壽丸の容姿を一見し、大に喜び身延山に伴ふ。日蓮また萬壽丸の容貌を熟視し、其の凡ならざるを識り、頭に法華經を頂かせ、經一磨と名く、弘安五年十月日蓮病革まらんとするや、經一磨を枕邊に召して曰く、我一代の間鎌倉殿に諫言すること三度、伊豆に三年、佐渡に四年、住所を追はるゝこと二十餘度なれども、嘗て京都の弘通に至らず、妙法未だ天聽に達せず、これ終生の遺憾なり。汝日朗を師と頼み、我が遺言を全ふせよと、切に京都弘通を囑せり。日蓮入滅せる時、棺前に落飾し、肥後房日像と改む。日像思へらく、法子法孫數多ある中、僅か十三歳なる年少者我を選び、京都弘通の印可を與へらる、何の光榮か之に過ぎん、必ず奮闘して知遇に報んと。永仁元年十月三類の法敵と戦ふべく、先づ持久耐忍の心膽を練らんごて、百日の間毎夜由井ヶ濱の海中に立ち、風濤に打たれながら、久遠の自我偈百遍、五字の題目數萬遍を唱へたり。翌二年先師十三回忌を了するや、奮然京都に出て、東奔西走、腕を振り聲をからし、盛に法華經の眞理を講じ、他宗を攻撃

して貴賤老若を驚かせり、時に年二十六。果して他宗の緇徒擧りて迫害を加ふるも、頑乎として屈せず、朝廷また三度京都を追ふも、益勇氣を振へり。既にして衆徒中日像の法論に服し、宗旨を改むるもの多し。元享元年十一月後醍醐天皇大道場を賜ふ、依りて大迦藍を建て、妙顯寺と號す。建武元年四月法華宗號を許し、弘教傳法の勅書を賜ひ、更に勅願所に班せらる。是に於て帝都の弘通全く成り、先師の遺囑に報ふを得たり。曆應四年の秋、遺誡六條を製し、法燈を弟子妙實攝政近衛賴忠の子に譲りて、隱退し、康永元年十一月寂す、年七十四。

高祖日蓮三十餘年の間、日本の柱たらんと誓ひ、奮闘的教化に奔走すといへども、未だ京都に弘通せざるを憾みとせり。日像遺囑に感奮し傳道の急先鋒となり、重き使命を果せるは、また尋常緇徒の企て及ぶ所にあらず。日像寂後十年、法嗣妙實の奏請により、後光嚴天皇の文和元年六月高祖日蓮に大菩薩號を、日朗日像兩師に、菩薩號を追贈せらる。(日蓮聖人傳。本化別頭佛祖統記。玉石雜誌。下總奮事考。大日本人名辭書。)

僧 德 見

僧德見。龍山と號す。父橋道貞京師の人、故ありて下總香取郡に流寓し、人皇第九十一代後宇多天皇の弘安七年香取神宮に祈り、德見を生むといふ。幼にし

て、總明、俗事を好まず、相州壽福寺に入り、住職寂庵昭公に就て、禪學を修むること數年、幾もなく嶄然頭角を現はせり。三十二歳の時、支那に渡り天童住持東巖に師事し、後諸州を巡錫し、到る所其學德に服し、悅禪師の再來と稱せらる。正平三年歸朝す、時に年六十六。足利尊氏奏して南禪、天龍兩山に主たらしむ。德見歸朝後大に禪風を闡けるの功を以て、後村上天皇特に眞源大照禪師の號を賜ふ。正平十三年十一月遷化す、年七十五。知是院に葬る、衆徒爲に塔を建て靈淵と稱せり。(本朝高僧傳。大日本人名辭書。香取郡誌。)

僧 西 譽

僧西譽。諱は胤明、小字德壽丸。下總國主千葉氏胤の次男にして、千葉介滿胤の弟なり、後光嚴天皇の貞治五年七月を以て生る。天資聰明敏悟、瀟洒にして俗を抜き、幼にして佛法を好み。初め妙見寺に入り、密教を學び、聖聰と名く。嘗て諸國を遍歴し、眞宗を弘通し念佛を勸む。後了譽上人に従ひ、淨土奧義及び圓頓の大戒を授けらる。晩年武州豊島郡貝塚に臻り、明德四年三縁の勝地をトし、一梵刹を創む、即ち今の芝増上寺にして、關東淨土宗の總本山なる十八檀林の冠首たり。永享十二月七月寂す、年七十五。著書多く後學を益せり。(千葉系圖。下總奮事考。)

僧 日 親

僧日親。久遠成院と號し、上總國舊武射郡埴谷城主埴谷大掾重繼左近將監の次男にして、第九十九代後小松天皇の應永十四年日蓮上人滅後百二十五年を以て生る。幼名は寅菊丸兄壽龍と共に、埴谷村妙宣寺に入り、叔父日英師に就き句讀を學ぶ日英師は大掾重繼の弟にして中山法華經寺の役僧たり。元中三年大塚邸に妙宣寺を創建す。埴谷村日親上人誕生井あり。十四歳の時、中山法華經寺に赴き、専心經典の研鑽に従ふ。法華經寺は、所謂六門家の一にして、一世日朝常忍二世日高太田乘明の子三世日祐千葉胤真の子相繼ぎ、いづれも嚴格なる人々なれば、前途有爲の青年には、最も適當なる修養場なりき。併かも法華經寺の經藏たる、典籍の多きこと他に比なきを以て、日親日夜内外の典籍を漁り、螢雪の勞を積むこと五年、嶄然頭角を現はせり。應永三十三年肥前の國松尾山護國光勝寺中山第三世日祐の開基に聘せられ、總導師となりて、熱心弘教に努め、領主千葉胤鎮を感動せしめ、一梵宇を建て、妙覺寺と號せり。一夜靈夢に感じ、一天四海皆歸妙法てふ高祖の大願を成就せしめんを欲し、同年の冬一百日間、毎夜山中に至り、寒風に曝されながら自我偈百遍、題目數千遍づ、を誦唱し、心膽を練り、又懸命的奮闘をなさんには、百千の苦痛を忍ばざるべからずとて、十指の生爪を一々抜き剥がし、或は手を熱湯中に浸し、具に皮肉の苦痛に堪へしめ、以て奮戰激闘の準備を

爲し、應永三十四年二月八日蹶然中山を起つて、帝都に向へり、時に年二十一。京に於ては一條戻橋の邊に傘を立て、陣營を爲し、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と叫び、滔々と辯じ去り論じ來り、立意卓拔、語句壯快、其舌鋒當るべからず。貴賤老幼、初めは狂人に見做し、嘲笑し去りしも、理義明瞭、引證該博、尋常人の企て及ぶ所に非らず、幾もなく攝津の豪族宇野西村の諸氏來て歸依せり。是に於て他宗の信徒等嫉怨し、屢瓦石を投じ暴言を加ふるに至る。日親更に屈する色なく、辯難駁擊、氣燄萬丈、益傍若無人に振舞へり。翌正長元年筑前博多に上陸し、北九州を傳道し、筑前の弘性寺、肥前の妙福寺、同法蓮寺、豊後の親蓮寺等を開創し、再び京に歸り、一條戻橋の邊に立ちて、折伏の法鼓を鳴らし、盛に妙法の功德を説き、逆化を勵ましけり、而かも滿天下の人心を動かさんには、天子將軍を諫誘するにありと。先づ將軍足利義教に上書し、天下を治めんには、眞理を盡せる妙宗を弘め、念佛、眞言、禪律等の邪宗惡法を除かざるべからずと。將軍義教は、初め天台の座主たり、日親の誹謗を怒り、將に罪過に問はんことを。日親更に恐る、ことごとくなく、再三書を呈して妙宗を勧めしも聽れず、是に於て立正治國論を著し、大に將軍を諫争せんとし、當に脱稿せんとするの際、時は永享十二年二月六日、讒者の爲め捕へられて獄に投ぜらる。淨土禪宗の僧侶等之を好機とし、巧に讒

誣しければ、義教益怒り、拷問を以て日親を改悛せしめんと欲し、或は擲ち或は蹴り、或は嚴寒中裸體を爲し、冷水をうき、或は炎天の下、周圍に積める薪に火を放ちて苦惱せしめ、或は長く熱湯中に浸し、或は階子を立て、倒に吊し、或は焼ける鉄を兩脇に挟ましむる等、二十餘種の苦痛を與ふといへども、頑乎として所信を翻さず、日夜題目を唱へて止まず。將軍義教あくまで之を懲きんとて、種々赦責の方法を考へ、こゝに前代未聞の酷法を案出せり。即ち大なる鎗を焼き、眞紅色を呈するを俟ち、日親の圓頂に被ふせ、以て改宗を迫まれるなり。日親驚くことなく、從容として題目を唱ふ。衆却て驚き、且つ怖る。義教更に獄吏をして日親の舌根を斷たしむ。吏恐れながら、刀を以て舌端を切り放てり。これより言語や流暢を欠くといふ。嘉吉元年六月二十四日將軍義教赤松滿祐に弑せられ、大赦に遇ふ、日親時に年三十五。爾來畿内をはじめ、山陽、山陰、九州、北陸の各地を弘教し、寺院を創しむるこゝ三十有餘、其間數々迫害を受け、死生の間に入出すること、一二に止まらざるも、心腸恰も鐵石の如し、長亨元年齡八十一歳に達するとき、嘗て創立せる叡昌山本法寺を擴大して、諸迦藍を建て、以て大本山と爲し、翌二年九月十二日眠るが如く入滅せり、年八十二。

日親辭世

なき人の跡を弔ふ過去帳の

何かわが身もかへり問はれん

日親人と爲り、天資英邁、勉學靜修、拮据勵精、學博く徳高く、其節操に至りては、百折撓まず、千挫屈せず、仆れて後止むの氣概あり。二十一歳にして大願を起し、五十歳に至るまで、他宗と問答する六十六回、未だ嘗て退敗せしことなく、禁獄五百有餘日、水火湯鑊の拷責約三十種、足跡殆ど全國の三分の一を占め、寺院を創建すると三十餘、併かも東奔西走席暖かなる能はざるに、筆管をとりては、折伏正義鈔、立正治國論、埴谷鈔、傳燈鈔、一生修行鈔、本尊相承鈔等を撰述し、後學を益する所多し。俗に冠鑑日親と稱し、永く世の義鑑と爲れり。

僧 日 泰

僧日泰。字は心了、圓頓房心了院と號し、第一百代後花園天皇の永享四年十月京都白川に生る。幼にして敏悟、夙に法華の教義を修め、三井延曆南都高野等に遊學せり。寶徳二年二月妙滿寺十世日遵の弟子と爲り、學徳大に進めり。文明元年北總千葉郡瀆野村の一廢寺を興し、如意山本行寺と號し、緇素黎民を教化せり、時に年三十八。後武州品川本光寺の住職を兼ね。或日品川より船に乗り、濱野村に向へり、海上三里許りにして暴風俄に起り、船將に覆らんこす。乗客周章狼狽爲す所を知らず、日泰自若として騒がず、船頭に立ち、徐に呪文を唱へ、龍神を祈れば、颱風忽ち靜穩に歸せり。時に酒井小太郎定隆なるものあり、船を同ふす。熟々日泰の容貌を視、凡僧に非らざるを知り

懇に語を交へ、武運長久の法を問ふ、日泰妙法の利益を説く、是に於て定隆深く日泰を信じ、我若し妙法の功德により本願成就せば、領内をして悉く日宗に改めしめ、以て師恩に報るんと、堅く約束せり。定隆里見氏に仕へ、土氣城を再興して、上總の一半を領するに及び、日泰を迎へ前約を履めり。長亨元年土氣城下なる眞宗の一寺を日蓮宗に改め、寶珠山善勝寺と號し、更に精舎を建て、如意山本壽寺と號し、別に中野村に一字を營み、如意山本城寺と號せり。同二年五月嚴令を下し、領内の寺院をして悉く日蓮宗に改めしむ。當時酒井氏の勢力と、布教宜しきを得たるを以て、庶民悉く歸依せり。所謂上總七里法華の濫觴なり。日泰また北總八幡郷に到り、靈驗を以て庶民を心服せしめ、圓頓寺を開創す。第百三代後柏原天皇の永正三年正月寂す、年七十五。(土氣古城再興傳來記。上總町村誌。山武郡郷土誌。)

僧 道 譽

僧道譽。貞把和尚と稱し、和泉國日根郡鳥取庄の人。大谷刑部丞の子にして永正十二年九月を以て生る。十三歳の時、同地寶圓寺に入り僧となる。性魯鈍なれども道心頗る深し。享徳四年二月關東に下り、武州三縁山に至り、晝夜道教を修む、時に年十七。同山に留學すること、九ヶ年の久しきに及び、一た

ん郷里に歸り、其師眞也上人の命に依り、一日講筵を開く。壇に上れば、咽して云ふこと能はず、面色いよく赤く、剩へ高壇より轉落す、衆大に笑ふ。道譽慚愧に堪へず、其儘關東に下り、再び三縁山に入る。然るに學徳進まさること舊の如し。是に於て成田山に參籠し、不動明王に祈願すること一百日。満願の夜、明王忽然として出現し、大小二劍を提げ、汝孰れをか吞まんとするや、道譽大劍を吞まんと請ふ、明王利劍を振り、道譽の喉頭を刺す、流血淋漓、法衣爲に紅に變ず。不思議にやこれより頭腦頗る明晰となり、日々數萬言を暗誦し、内外の經典を涉獵し、學徳共に進む。(今牛實大巖寺に鈍血の法衣あり。世詠いて惡心顯譽(補天上人)と混す。)永祿三年^{二十一年}天文^{二十一年}下總生實領主原式部大輔胤榮の勸請により、一字を創建し、龍澤山大巖寺と號す。後關東十八擅林の一たり。弘治元年七月芝増上寺第九世の住職となり、承祿六年再び生實に歸り、同國白井に長源寺を立て、幽居し天正二年十二月入寂す年六十。道譽の後、法燈傳承一流を爲せり。世之を道譽流と稱す。(三縁山志)

僧 靈 巖

僧靈巖。法名雄譽、松風と號し、駿河國沼津の人、今川土佐守氏勝の三男、母は庵原氏。天文二十三年を以て生る。初め沼津淨蓮寺の僧増譽に師事し、十三

歳の時、上總國佐貫勝隆寺光譽(秀)の許に送らる。永祿十一年下總生實大巖寺第一世道譽(貞)の門に入り、螢雲の勞を積むこと七年。又同寺第二世安譽(虎)に師事し、天正十五年八月第三世の法統を嗣ぎ、大巖寺の住職となり、時に年三十四。後和州奈良に遊び得る所あり。天正十九年里見氏の命を受け、武州江戸に一大伽藍を建立せんと志し、深川の蘆沼を埋めんとて、四衆を勸進し、土工を起し、一簣を運ぶものには、十念を授け、又血脈を與へて結縁せしめ、只管衆生を指導せしかば、工事頻に進捗し、廣汀忽ち變じて陸地と爲る。後世靈巖島と稱す。即ち佛閣殿堂を新陸地に建立し、道本山靈巖寺(關東十八檀林の一にして徳川氏の時寺領五十石を寄せり)と號せり。故あり安房國大網村(今館野村)に流寓す。國主里見安房守忠義淨土宗の弘通に感じ、大網村に一字を建立し、佛法山大綱寺大巖院と號す、里見氏はじめ歸宗するもの多し。慶長十三年上總市原郡五井領主松平紀伊守家信亡母の爲め一寺を建て、理安寺(後光明山水寺と改む)と號す。同十五年三月里見忠義靈巖を請じて圓頓し、妙戒を受け、四十二石の朱印を寄せらる。後佐貫城主内藤左馬之助政長に聘せられ、慶相山善昌寺に移住す。又天羽郡大貫庄湊村に一堂を建て、根本山港濟寺と名く。元和元年八月宗祖源空の誕生地(美作)及筑後善道寺、肥後往生院等の靈場を巡視せんことを欲し、途伊勢國山田靈巖寺、伯耆國河村郡大雲寺、同國八橋郡赤崎町專稱寺、出雲國意宇郡別願院、同國島根郡松江極樂寺等を開

創し。伯耆國に流寓せる安房の前國主里見忠義(元和元年九月故あり國除せらる、同八年六月伯耆に卒す年三十九)を訪ひ、慰籍する所あり。元和四年筑紫より山陽道を上りて京都に着し、暫く駐錫せるの後、伊勢を経て三州吉田悟眞寺に至り、勸誡する所あり。斯くて住地たる上總國佐貫に歸着せり。靈巖關西諸州を巡錫弘道すること四年、信徒頗る多く、結縁の血脈を受くるもの數萬人、盛なりといふべし。後佐貫城主内藤政長に勸請せられ、本誓山大勝院(今谷村)淋海山別願院を建立す。嘗て上總金谷の疫病を平癒せしめ、里民の爲め始覺山本覺寺を創立せらる。同八年將軍秀忠、家光二公に謁し、宗法を應答せり。寛永六年淨土宗の總本山京都知恩院住職然譽遷化により、同寺第三十二世の住職に推さる。後人皇第百七代後水尾天皇の宣旨により、天顔に咫尺して、宗法の大綱を演奏せり。同十八年の春再び法問御聽聞あらせらるゝにより、靈巖寺の所化三十人を率ゐ、御前に拜列して諸衆と問答せり。靈巖時に年八十八、宮中鳩杖を賜はれし程の高齡なるに問答決擇の鋭きこと、壯者も及ばざりといふ。此日叡感斜ならず、法服白銀を賜ふ。實に老後の面目を上ぐるに共に、淨土宗門の光榮といふべし。同年九月知恩院に圓寂す、年八十八。靈巖淨教弘通に力を盡すこと數十年、寺院を開創すること數十字(播州師萬津の光玉院知實寺。備前岡山の松風山靈巖寺。結縁の血脈を授くるもの幾萬なるを知らず、歸依の檀徒全國に滿てり。亦沙門の一偉人と稱すべし。本傳は主とし)

て、安房志に據り、江戸砂子、人名辭書、名勝地誌等を参照して成るものなれども、年系、人名、寺院の稱號等符合せざる所少からず。出生地の如き、或は周准郡小糸といひ、或は天羽郡といひ、或は里見氏の出といひ。又里見軍記によれば、里見忠義普請奉行横小路將監をして久我の中畑に一寺を建立せしめ、父義康の遺臣善清實の三男順開坊(浄土)を呼出し、住職を爲し、大嚴院と號し、慶長十九年六月盛大なる法會を施行すとあり。又彼の江戸靈巖寺開創の如き、或は天正十九年里見氏の命によるといひ。或は元和七年徳川氏の勸請によるといふ。

僧 日 經

僧日經。常樂院と號し。出產地詳かならざれども、上總國一説長柄郡二ノ宮なるが如し。日經初め善海と稱し、鎧冠日親滅後七十一年、永祿三年二月二十八日を以て生る。幼時早くも七里法華中の某寺に入りて得度し、長ずるに及び北總中村檀林或は飯高檀林に學び、後諸國を巡歴して専心勉學修業せり。二十歳の頃學業大に進み、既に教化に従ふ。天正元年故郷上總を發し、奥州に向へり途常奥の境山崎に到り、浄土宗の談義所に入り、彼の宗徒三百人に對し、法理を戰はし、壯絶の言、奇拔の論、二十日間に亘り、悉く之を屈服せしむ、時に年二十三。同七年五月濃州安土に所謂安土問答あり、法華宗に對する織田信長の所置を聞き大に憤慨せり。日經これより關東諸州は勿論、西は伊豆駿河北は遠く北越まで布教し、又上總東横川郷に、寶立山芳噴寺を創立して、七里法華の根本中央道場と爲し、妙宗の改善發展を圖れり。文祿四年豊臣秀吉京樂大佛殿に於て、千僧供養を行ひ、各宗之に應ぜしも、京都妙覺寺の貫主日奥獨り不受不施の説を唱へて應ぜず、丹波小泉に隱退す。(日奥安國房と號し、日蓮宗不受不施派の開祖なり。)

慶長三年八月秀吉薨じ、同四年十一月徳川家康日奥を召し、諭す所ありしも、猶前説を執つて動かさず、是に於て翌五年對馬へ配流せらる。日經時に土氣善勝寺の住職たり。幕府の不法を憤り、關東に於ける日蓮宗十ヶ寺の僧侶を善勝寺に會集せしめ、之が善後策を講じ、自ら進んで其難衝に當らんことし、同年某月奮然上總を發し、京都に上れり、時に四十一。朝廷日經の人を爲りを知り、權大僧都に任じ、京都妙滿寺の貫主たらしむ。抑も法華宗たる、天文の法戰に大打撃を蒙り、嚴に布教法論を禁遏せらる、爾來六十餘年、流石の法華宗徒も聲を潜め、また往時の意氣なし。日經常に之を憤慨せり。偶野州宇都宮の天台寺法戰を挑むを以て、直ちに彼地に到り、宇都宮の三大寺と法論を開き、十一日間の法戰に、大勝利を得、宇都宮領主より談義解放の認可を得、京に上るの後、憚る所なく、大聲叱咤、獅子吼して四方を折伏せり。是に於て近畿地方の道俗忽ち歸服す。同十一年美濃に同十三年尾張に巡教し、到る所風靡せざるなし。幕府之を忌み、屢厭迫を加へ、他宗また頻に暴害を爲すに至れり。日經浄土宗の壇横を憎み、二十三ヶ條の法問を發し、法戰を挑めり。初め駿府に於て對決せんことせしが、法敵等勝利覺束なきを悟り、浄土信仰者なる徳川家康に讒誣し、江戸に於て問答する事爲したるに、期に前ち潜に暴漢を遣はし、不意に日經を打擲し、人事不省に陥らしめ、言語を

發する能はざるを機とし、理不盡にも淨土宗の勝利を爲し、日經等數人をば、人心を攪亂する重罪人と宣告し、京都に護送し、市中を引廻はしたる上、六條河原に於て斬首せんことを命ず。偶板倉伊賀守の懇願により、死數等を減じ、鼻と耳を切り落して追放せらる。頃は慶長十四年十二月二十日にして、日經五十歳の時なりき。世之を慶長法難或は江戸法難といへり。日經京都を追はれ、丹波に入り、暫し安らふ暇もなく、同國より排斥せられ、若州小濱に到り、木行寺を建て、加賀に赴き、前田利家の老臣三輪志摩守に頼り、領内を弘教し、宗風やゝ起りしが、幕命により、又も金澤領内より追放され、佐渡に赴かんこし、途越中神通川の畔に至り、元和六年十一月二十二日入滅せりといふ。果して眞ありせば、享年六十一歳なり。日經人と爲り頭腦頗る明晰、加ふるに博覽強記、殊に辯論に長し、痛快壯絶向ふ所敵なく、法敵等日經の名を聞くも、直に恐怖せりといふ。慶長法難以來、流離困沛の間、猶所信を枉げず、運盡き命絶ゆるに至るまで、廣宣流布に努めたるは、感ずるに堪へざるなり。

僧 日 乘

僧日乘。乾龍ご号し、東金城主酒井氏の遺臣市東刑部左衛門の子、慶長三年

を以て東金に生る。同十年三月父刑部左衛門奸吏の横暴を憤り、之を殺して自刃す。日乗時に年甫めて八歳、逃れて本漸寺に隠る。住僧日信之を憐み。哀を乞ふ。斯くて同寺にあり、刻苦勉勵すること十餘年、學徳大に進み、十八歳の時、早くも僧正に任ぜらる。二十一歳の時正觀述聞五卷を撰述せり。寛永三年九月師日信寂するや、推されて本漸寺第七世の住職となる。次で宮谷檀林の學頭となり、數多の法弟を教導し、又自ら修學怠らず、上野東叡山の經藏に入り、益佛學の蘊奥を研む。同十六年本山なる京都妙滿寺の住職輪番と爲り、權律師に任ぜらる。同十九年二月品川本光寺に於て、宗門の問答あり、時に將軍家光、本光寺住職日啓に對し、當今日蓮宗中碩學を以て聞ゆるものあるやと問ふ。日啓則ち日乘を以て、日蓮宗中第一の名僧智識なりと答ふ。正保二年四月本漸寺に寂す、年四十五。日乘人と爲り穎悟にして強記博覽、佛敎の外學和漢を兼ね。著はす所法華玄籤考拾記等數十卷あり。遺書數千卷今猶本漸寺

僧 頑 器

僧頑器。獨睡庵ご號し、安房國長狹郡北小町村前田某の子にして、慶安二年を以て生る。八歳の時、同郡宮山村長安寺に入り、讀書習字を學ぶ。天性強

内乾龍文庫中に藏せり 東總日蓮宗中興の祖師と稱せらる。(上總町村誌。山武郡郷土誌。)

暴なり。一日同窓の兒と爭論し、案上の鐵紙鎮を以て敵兒の頭を撃ち、立所に倒死せしむ。兒の父母悲嘆して止まず。頑器の父己の子を殺し罪を贖はんとす。寺僧阻諫して曰く、死者再び生くべからず、此兒強暴なりといへども、天質聰明なれば、佛門に入り死者を弔らひ、衆生を濟度せば、必ず爲す所あらんと。父則ち刀を以て頑器の頭髮を切り、寺僧に託せり。頑器大に愧ぢ、これより感奮して經典を研鑽し、諸國を遊歴して業を進め、遂に一派の禪統を開創し、享保六年十二月寂す、年七十三。頑器の禪法を頑器流。或は頑器悟と稱し、弟子大梅信州の人の弘通により、廣く世に流布せらる。

内務省地理局編纂安房國誌に、高僧傳を引用して曰く、僧頑器、長狹郡北小町村の人なり、幼にして智勇人に超え、曾て村内大徳寺に詣り、法華藥草喻品を聽き、遂に大志を發し、鵬州和尚に謁して其問に答ふ。頓悟人を驚かす。後家を男平内に譲り、志を決して祝髮す、時に年三十九なり。元祿十二年己卯江戸に出で、淺草増林寺に寓す、後上總寺尾村峯山大空庵に還る。僧侶來り訪ふ者輻輳し、其名益彰る。享保六年十二月小松村横山の舊庵に移り、偈を唱て坐化す、享年七十三。

頑器の墓。今由基村北小町區田圃中に在り、碑面に總持第一座量外頑器和尙墓と記せり。

僧 鉄 牛

僧鐵牛。名は道機、別に自牧子と號す。石見の人波田兼尙一書兼田氏毛利氏の臣也の第二子

にして、寛永五年七月長州須佐に生る。幼名を才之進と稱す。天資聰明にして孝謹なり。十一歳の時、因州鳥取の龍峯寺に入り、提宗和尚に師事す、正保三年四方に遊學し、慶安元年大坂に往き、同二年京都に至り。内外の佛典を研究し、承應元年始て江戸に出で東禪寺に寓し、更に關西に歸る。偶將軍家綱一禪寺を創建せんと欲し、道徳崇高の名僧を明國に求む。明曆元年黃檗山の隱元命に應じて長崎に來る。鐵牛之を聞き、往て隱元に謁し、深く其大徳に服し、爾來私淑親炙し、大に得る所あり。時に象山木庵和尚亦來朝して長崎に至る、鐵牛また之に師事す。隱元木庵兩師未だ邦語に通ぜず、邦俗を知らず、鐵牛に囑するに黃檗宗派の布教擴張を以てす、鐵牛時に年二十八。是より巡錫布教を以て己が任とす。閣老稻葉正則深く鐵牛の學徳を崇信し、萬治二年請ひて小田原長興山紹太寺春日局追福の爲め建立の住職と爲せり。寛文五年幕府より金二萬兩を賜はり、黃檗の一大宗刹を山城宇治に建立す、黃檗山萬福寺是なり。同八年稻葉侯の命により小田原紹太寺を足柄下郡に移し、同十年紫雲山瑞聖寺を芝白金臺に開創し、延寶元年中頭山弘福寺を本所牛島に創立し、同二年福壽山瑞林寺を駿州富士郡に創立せり。是より先江戸の人杉山某下總椿沼開墾を幕府に請ひ聽れず、白井某亦開墾を企て、幕府に請ふこと廿五年の久しきに亘るも、檢閲の結果又允されず、是に

於て之を鐵牛に謀る。蓋し當時の執政中鐵牛に歸依するもの多ければなり。鐵牛謂らく民利を興すは、即ち衆生を濟ふなりと、誓つて幹旋の勞を執り、遂に幕議をして開拓に決せしむ。寛文七年初めて椿海を測量す。延寶六年開拓略は緒に就きしを以て、幕府鐵牛をして福聚、廣福、廣徳の三寺を創立して之か開山たらしむ。天和二年仙臺藩主伊達綱村を説服して歸依せしめ、徳望益高く、其名遠く支那に轟けり。貞享二年京都の葉室山淨住寺を再興し。元祿十年正月伊達侯の請に應じ、仙臺に至り、大に優遇せられ、信徒の爲め兩足山大年寺を仙臺城南に創じむ。同十二年十一月下總聚福寺に退隱し、翌十三年八月泊然として長逝せり、年七十二。

抑も我禪宗の黃檗派は、隱元、木庵兩師の渡來に濫觴すといへども、各派の地盤既に成り、他宗をして更に布教の餘地なかりしを以て、鐵牛鉄の如き決心を以て、難戰苦闘するにあらざれば、何んぞ斯く速に海内に遍からしむるに至らん乎。鉄牛一代の中、寺院を開創或は再興すること六十餘。就中相州の紹太寺、芝の瑞聖寺、牛島の弘福寺、駿河の瑞林寺、京都の淨住寺、仙臺の大年寺、下總の聚福寺を以て、七處開堂と稱し、實に黃檗派徒弟の叢林なり。鉄牛の高徳たる、院宣を拜受し、諸親王の恩遇を受け、屢將軍家に謁見し、又公卿侯伯の歸依を得、陰に治政を匡補し、世道公益に貢献する所多し。正徳二年一月靈元上皇特に勅して大慈普應禪師と諡せり。而して我北總椿沼開拓に盡瘁せる功勞は、長く州民の記する所、大正の初年千葉縣内務部鉄牛の事蹟を蒐録し、其功績を不朽に傳へしめたり。鐵牛禪學の餘、詩文に通じ、また書を善くせり。

醫師傳

古河三喜

古河三喜。又三歸と稱し、下總國古河の醫師なり。寶徳中明國に航し、全九集を造りし明鑑寺の別號江春を用たり。本期醫談に「古河の三喜は、近世の名醫也、永正六年紀行に、古河の江春庵は、關東の名醫なりとあるも、三喜が事にて、是は寶徳中明國に入り、全九集を造られし明鑑寺の別號江春を用ひられし也。今も古河城下長谷村の一寺に、三喜を像祀す」とあり。長谷村永遷院の過去帳に、天文十三年甲辰四月十五日三喜一宗居士と録し、境内に三喜松あり、葬地なるべしといふ。又古河臺町に三喜の遺方とて、傷食丸を販賣するものあり。天明中水戸藩の醫官原昌克、三喜の著はせし直指篇を刻せり。(大日本地名辭書)

加藤霞石

加藤霞石。名は濟、字は世美、房州平久里村の人、家世々醫を業とす。霞石九歳にして母を失ひ、長ずるに及び家業を繼ぎ、醫を學ぶといへども、文學を

好み、詩及行草書を能くせり。天保中遠く鎮西に遊び、江戸に還るの後専ら蘭學を研究し、後長島侯に聘せらる。當時江戸は文物の淵叢と稱せられ、錦城、鵬齋、善庵、訥庵、良齋、一齋、弘庵、岩陰、隨齋、星巖、天民、米庵、菱湖、靄崖、椿山の諸名家輩出せり。霞石是等の諸名士と交り、唱和徵逐殆ど虚日なし。天保十二年星巖房總を漫遊するの時、平久里なる霞石の家に滞留すること八九日、掬靄山房に題するの詩數篇、載せて其紀行浪陶集にあり。維新の後故山に歸り、老年を養ひ、明治三年歿す、年六十九。其生壙碑は川田甕江の撰文なり。（事實文編。安房志。大日本人名辞書。畫家列傳）

佐藤泰然

佐藤泰然。名は信圭、世々羽前國升川村に住す、父信隆江戸に來り、泰然を生めり。泰然人ご爲り、高明率直、初め蘭醫足立長雋に就き、泰西の醫術を學び、後高野長英の門に入り、益洋醫の蘊奧を研めんご欲し、天保五年長崎に赴き、蘭人に就き夙夜研鑽すること四星霜、遂に其奧旨を極め、江戸に歸りて、醫を業とす、治を與ふ者陸續として絶えず、門人亦頗る多く、林洞海、三宅良齋、岡南洋等最も著はる。天保十三年佐倉侯に聘せられたるを以て、家を女婿林洞海に譲り、高弟三宅良齋と共に佐倉に來り、順天堂病院を建つ

これ我邦私立病院の嚆矢なり。治を請ふ者常に彙集せり。安政中鎖國攘夷の説盛に唱へらる、や、泰然宇内の大勢に鑑み、慨然として佐倉侯に上書し、媾和開港の止むべからざるを論じ、且つ藩の兵制を釐革せんことを説けり。藩主堀田正睦其議を容れ、直に兵制を改め、歐米諸國ご修好するの策を執れり。惟ふに佐倉藩が夙に泰西の文明に倣ひしは、藩主正睦の聰明によるごはいへ泰然の與る所また多しとす。明治維新の後横濱に遊び、再び東京に歸り、五年四月下谷池端に歿す、年六十九。大正四年十一月從四位を贈らる。

泰然子女多しといへども、醫術に長せざるの故を以て、悉く他家を嗣がしめ、更に門人山口舜海をして業を襲ひ、家を嗣がしむ。然り而して泰然の實子また凡庸にあらず、次男順幕醫松本良甫の嗣子ご爲り、我邦最初の軍醫總監に任じ、男爵を授けられ。三男董林氏を冒し、外務遞信兩大臣に任じ、伯爵を授けらる。豈また一門の榮ならずとせんや。

佐藤尙中

佐藤尙中。字は泰卿、初め舜海と稱し、笠翁と號す。下總小見川藩醫山口甫僊の子にして、文政十年四月を以て生まる。幼にして奇才あり、五歳字を解し、七歳書を讀む。若冠江戸に出て、漢籍を寺門靜軒に學び、又醫を安藤文澤に習へり。文澤尙中非凡の器あるを察し。蘭醫佐藤泰然につきて學ばしむ

時に年十六。天保十三年、佐倉藩泰然を聘するや、師に従ひて佐倉に來り、病院にありて患者を治療し、最も外科に長ず。泰然之を奇とし、尙中の父甫僊に請ひて、嗣子と爲し、繼て佐倉藩の侍醫と爲る。萬延元年幕府蘭醫ヘボンを長崎より招致す。尙中藩命を奉じて江戸に赴き、ヘボンに就て學ぶ、ヘボン大に其勉勵を嘆賞し、悉く其秘訣を授け、已に代て患者を治療せしむ。後業成り佐倉に歸るや、ヘボン離別を惜み、泰西名著に係る外科書數部を贈りて贖とす。尙中大に悦び、藩に歸るの後、熟讀玩味得る所多し。後堀田侯に請ひて、病院及衛生館を建設し、別に學舎にありて、醫學生を教授す。幕府其名を聞き、之を召せども應ぜず、明治元年東京に大學を設け、醫學部を置き、尙中を徵して、大博士と爲し、校務を司らしむ。三年大典醫を兼ね、御前に於て生理書を講ず。四年海軍病院の事を管す、尋て大學大丞に任じ大典醫大博士を兼ねしも、議合はざるの故を以て、冠をかけ、獨力病院を下谷練に建て、順天堂と名け、後湯島に移れり。是より先き明治元年養嗣子進、獨乙に留學せしが、同八年歸朝し、直に順天堂に入り、父子協力業務を勵みしを以て、其名海内に遍く、刀圭社會の二明星と仰がる。同十五年七月歿す、年五十六。著はす所、醫方濟衆錄等あり。門下中養子佐藤進の外數多の名醫

子爵實吉安純。男爵岩佐純。長谷川泰。佐々木東洋。塚原周道等。を出せり。 (墓四誌。大日本人名辭書。帝國人名辭典。明治百傑傳。香取郡誌。印旛郡誌。明治大年表。明治英名百人首。帝國新立志篇。)

失題

佐藤尙中

なか／＼に心安くもなかりけり、人の命のたのみおもへば

辭世

惜まる、花はいつしか散り果て、寂しさ残るあとの葉櫻

佐藤進

佐藤進。常陸國久慈郡太田町造酒家高和某の長男にして、弘化二年十一月を以て生る。初め東之助と稱す、幼にして聰明穎悟、特に學を好んで他を顧みることなし。親戚之を憂ひ、早く商業に就かしめんとす。賢母獨り之を屑せせず、潜に愛兒東之助の立身出世を希ひ、安政六年縁族なる下總佐倉順天堂病院長佐藤尙中に托し、醫師たらしめんとて、佐倉に伴へり、時に年甫めて十五。尙中其偉器を識り、大成せしめんと欲し、先づ三年間、佐倉藩儒續豊徳に就き漢籍を學ばしめ、更に醫學の豫科たる蘭學を修めしむ。爾來晝夜勉勵寢食を忘る。當時順天堂は、本邦唯一の病院にして、醫學の淵叢と稱せられ全國の醫學生輻集し、秀才頗る多し。尙中家學を重んずるより、實子あるに拘らず、秀逸穎脫の門人中より特に進を拔擢して、佐藤家の養嗣子と爲せり時に年二十二。幾もなく維新の變亂となり、養父尙中と共に江戸に出て負傷者の治療に従事し。次で總督宮の特命を奉じ、東北に赴き、奥州白河及三春

に療所を開設し、更に陸軍大病院頭取に任じ、晝夜治療を掌り、平定後東京に歸れり。然れども維新創業の際なるを以て、學業の如きは顧るの暇なし。是に於て海外に出で、醫學の蘊奥を究むるに如かずと決心し、明治二年六月自費を以て醫學の隆盛なる獨乙に航し、翌三年同國ベルリン大學に入り、刻苦勉強すること五年、其間普佛大戦争に遭遇し、實地に技術を磨き、同七年優等の成績を以て同大學を卒業し、ドクトルの學位を受く、時に年三十。更に奥國ウヰンナ府に到り、名醫に交り、大に得る所あり。猶各國を巡遊し、益技術を進めんと欲せり、偶養父尙中重患の報に接し、急に歸朝せり、時に明治八年七月なり。幾もなく尙中病癒へ、再び治療に従ふを得。則ち父子共に新築の湯島順天堂醫院にあり。廣く患者を治療し、名聲海内に鳴れり。十年四月陸軍々醫監に任じ、大阪陸軍臨時病院長を拜命し、大に其靈腕を振ひ、亂後勳四等に叙せらる。十二年十月陸軍本病院長を命ぜらる。十五年七月養父尙中歿し、同年十月本官を辭し、十七年二月東京大學醫學部講師を囑せらる。翌十八年大學醫學部第一醫院長並に第二醫院長に任じ、勳三等旭日中綬章を賜はる。十九年三月本職を罷め、専ら順天堂病院にありて治療に従事し醫學生を養成せり。二十一年六月醫學博士を授けらる。二十七八年日清戦争の際、陸軍々醫總監として廣島陸軍病院長に任じ、普く軍國の衛生事務を執

掌せり。戦後多年の功勞により、男爵を授けらる。進は實に本邦外科學の泰斗にして、又松本順及橋本綱常に次げる陸軍々醫界の元老なり。大正十年七月卒す、年七十七。(博士列傳。帝國新立志篇。名士の苦學。)

學術家傳

伊能忠敬

伊能忠敬。字は子齊、幼名三次郎、後三郎左衛門と稱し、東河と號せり。延享二年正月十一日上總國山邊郡小關村(今片貝村)に生る、七歳の時母を失ひ、十一歳の時父の生家武射郡小堤村(今大總村)神保氏に養はれ、幾程もなく、親戚故舊の間に轉展寄寓し、具に辛酸を嘗めたり。寶曆十二年十二月下總佐原村なる親戚伊藤長由の聳と爲り、三郎右衛門と稱し、林大學頭の命名により忠敬と名り、直に名主後見に推舉せらる。伊能氏は、其先大和國に先づ、景能なるもの、東國に來り、香取郡大須賀莊を領し、伊能村に住し、伊能を以て氏と爲せり。景久なるもの、永録中佐原村に移住せり。これ忠敬九世の祖なり。世々佐原の里正と爲り、細民救恤の爲め、其産を傾け、大に衰頹を來せり。忠敬奮然として、家運の挽回を期し、刻苦精勵、遂に家産を恢復し、屢窮民を賑恤して、地頭より褒賞せらる。寛政五年二月より親戚及友人久保木竹窓等と伊勢神宮に參詣し、京阪地方を漫遊す。翌六年十二月漸く隱居するの允許を得、家を長子景敬に譲り、自ら勘解由と改名し、多年の志望たる曆

學の研鑽に従事す、時に年五十。翌七年五月江戸に出て、遍く曆學者を訪問するも、皆意に満たす。偶々西洋曆學家高橋東岡、幕府に召され、江戸に來るを以て、直に之に師事し、嶄然頭を抽で、造詣する所頗る深く、専ら天體の觀測を究め、恒星表を作れり。是の時に當り、外國の船舶屢我北境を侵し、風雲漸く急ならんとするを觀、暫く曆學を廢し、測量學を修め、私費を以て蝦夷地を測量し、以て國家に貢獻せんことを志せり。寛政十二年四月幕府の允許を得、弟子數人を率ゐ、奥州街道及蝦夷沿海を測量し、之が地圖を製作して、幕府に獻納し、享和元年四月より、更に本州東海岸及江戸より沼津に至る街道を畧測せり。翌二年六月より陸奥三廐より北陸道、諸街道を測り、同三年二月より駿河、尾張、越前、越後、佐渡、の諸街道を測量し、文化元年正月恩師東岡の死去に遇ひ、各測量圖を將軍家の上覽に供へ、小普請組に補し、十人扶持を給し、天文方に屬せしめ、十二月更に西國諸州の測量を命ぜらる、時に年六十。忠敬人として爲り、堅忍不拔、是より近畿、中國、四國、九州の各沿岸を測量し、文化十二年四月より關東南部の地圖を製し、同十三年江戸の明細圖を作れり、時に年七十二。爾來野外測量を行はず、専ら靈岸島龜嶋町の居宅に於て、各地圖の製作に従事し、文政元年四月歿す、年七十四。遺言により淺草源空寺なる先師高橋東岡の墓側に葬れり。碑銘は佐藤一

齋の撰文たり。忠敬の測量せし所、主として諸街道及諸州沿岸に關はれり。これ封建時代に在りては、深く國內に入り、精細に調査するを憚りたるに因れり。而して今日よりみれば、精細を缺くの嫌なきに非らざるも其正確なる事、泰西文明の器具を以て、測りしものと、敢て相違する所なく、實は我邦未曾有の大圖にして、地理學者及陸海軍の受けし便益頗る多大なり。これを以て明治十六年二月東京地學協會々頭北白川宮能久親王の稟請により、特旨を以て正四位を贈られ。又同協會其遺功を不朽に傳へん爲め、銅標を芝公園圓山に建て、贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表と題せり。大正四年郷里佐原の有志發起と爲り、大正五年の百年祭に際し、銅像及紀念文庫を設立せんことを企て、廣く天下に移文して資金を募集し。今や屹然として立てる其雄姿を見るに至れり。

著述

國郡晝夜時刻。對數表起源術。並用法。求割圓八線法。割圓八線表紀源法。地球測術問答。曆象編斥妄。海内度數譜。大日本沿海實測錄十三卷明治三年刊行沿海地圖凡例並附記。日京地理測量記。蝦夷北極出地度。東都里程記。山島方位記。測量日記。雜錄。修定宇內輿地全圖。大日本國實測大圖。同中國。同小圖。(此他日本諸國圖數多あり) 江戸圖。

忠敬に關する圖書

伊能忠敬 幸田露伴著明治三十二年八月 伊能忠敬先生事蹟 加瀬宗太郎編同三十九年七月 偉人伊能忠敬 加瀬宗太郎著同四十四年五月 伊能忠敬 伊能登善著同四十四年九月 伊能忠敬 理學士大谷亮吉編大正六年六月發行

教育家傳

大原幽學

大原幽學。諱は實正、通稱左門、靜齋と號し、其郷貫詳かならず、一説尾張藩老大導寺玄蕃の次男なりと、寛政丁巳九年を以て生る。文化十一年三月時事に感ずる所あり、郷關を出て、諸國を経歴す、時に年十八。先づ京師に入り、禁中の典禮を研究し、諸儒に就き經義を學び、高野山に登り佛學を修め周防に往き神道を問ひ、近江に遊び中江藤樹の遺教を探り、所謂神佛儒の三道を翫味し、之を折衷して一家の旗幟を樹て、性理の妙機を悟り、嘗て信州上田驛に止り、自ら發明せる性理教を講し、修身齊家の道を説きしに、教を乞ふ者忽ち數百人、性學先生と稱せらる。天保元年關東に出で、同二年房州より北總に巡り、香取郡長部村に至り、里正遠藤本藏の家に寓居し、性理學を唱へ、忠孝仁義の道を説き、勤儉を奨め、禮儀を正し、農法を教へ、良風に導きしかば、徳化大に行はれ、荒村の風俗爲に一變し、模範村として領主清水氏より賞揚せらるゝに至れり。是に於て門人等同村宇八石に教堂を改築し、改心堂と名く。

遠近より來り教を受くる者、實に四千餘人に達せり。時に其門下の多き、感化の迅速なるを疑ひ、以て邪教と爲し、陰に幕府に誣ゆる者あり。幽學江戸に幽せられ、冤罪を蒙る。七年、遂に其罪なきを以て赦免せらる。然るに郷黨再び悪習に復し、亦修身齊家の道を顧みるもの少し。幽學憤慨に堪へず、不徳の責を引き、遺書を懷にして屠腹せり。時に安政五年三月八日、享年六十二歳なり。

嗚呼幽學人と爲り、剛毅公正にして慈仁に富み、温顔人に接し、終身酒を飲まず、婦人に接せず、實踐躬行人を教へ、俗を化するを以て畢生の目的と爲し、我北總に教録を乗ること、凡二十八。一朝讒に遇ひ、窮地に陥るも、其靈徳空しからず、門人大に慙悔し、遺教を奉ずること生時に異らず。否今日に至るまで、其徳風を仰ぎ、尊崇して措かざること、彼の二宮尊徳に於けるが如し。明治四十三年五月有志其功績を不朽に傳へんと欲し、頌徳碑を建つ、三島中洲の撰文たり。幽學は性理教を創立し、修身齊家の道を唱へしのみならず、當時既に耕地整理、正條植法、貯蓄組合等農村經營に最も必要なる事項に着眼せるは、尋常の道學者に非らざるを知るに足る。法學博士田尻稻次郎幽學の人と爲るを慕ひ、明治四十三年幽學全書を編纂し、大正六年四月更に幽學全書を編述し、道徳經濟調和之大恩人と題せり。

著述

微味幽玄考。發教録。規式解。道徳百話。口まめ草。議論集。

幽學詞藻

玉崎明神はかみつふさの園一ノ宮にて埴生郡なれば

千早ふる埴生の里に跡たれて、くにつ上總に梅そさき國

鶯を待

年毎に來て啼頭を鶯の、なそ遅かりぬ梅の咲きしに

尾形村に行く道すがらにて

近道は氣遣ひ多し飛ぶ蛙

岩部村石橋うじに至り逗留のうち

夕映や障子明れば梅もどき

打寄する浪はあらしの名残かな

牛久より笠森へ出る野中

日盛や青葉かざした人の行

西村茂樹

西村茂樹。初め平太郎、後鼎と稱し、泊翁と號す。佐倉藩士西村平右衛門源芳郁の長男にして、文政十一年三月を以て江戸の藩邸に生る。天資温厚伶俐にして學を好み、十歳の時佐倉に歸り、藩校成徳書院に入り、文武兩道を學び、十四歳の時より藩儒海野石窓、安井息軒、海保漁村等につき、儒學を修む。十九歳の時斷然志を翻し、武術を以て世に立んと欲し、大塚同庵に就き東西の兵法を學べり。二十三歳の時家督を繼ぎ、祿百四十石を受く、二十四歳の時親友木村軍太郎と共に、佐久間象山の門に入り、西洋兵法及砲術を學び

二十六歳の時より、堀田家の一族佐野藩の參政と爲り、多年の間、同藩の改善を圖れり。安政元年本藩主堀田正篤正睦幕府の老中と爲り、外國事務專任となるや、茂樹等四人其秘書役と爲り、外交の謀議に與れり。慶應中藩老平野重久と共に京都にあり、朝幕の間を融和せんと計りしも及ばず、明治元年鳥羽伏見の會戰と爲り、次で奥羽の征討となり、亂後佐倉藩の年寄役と爲り俸祿三百五十石に増加せらる。同二年佐倉藩の大參事を命ぜらる。同五年五月東京に移り、同六年福澤諭吉、中村正直、加藤弘之、西周、箕作秋坪等と明六社を起し、明六雜誌を發行し、政事學術道德等を研究且つ鼓吹せり。同年森有禮文部卿に任ずるや、茂樹を擧げて編書課長と爲せり。同八年五月侍講を兼ね、更に宮内省御用掛に任ぜらる。同九年阪谷朗廬、那珂通高、杉亨二等と謀り、東京修身社なるものを設立し、盛に國民道德を鼓吹せり。同十二年三月東京學士會院會員に擧げられ、翌十三年文部省編輯局長に任じ、同十年九月貴族院議員に勅選せられ、二十六年十二月華族女學校長を辭し、爾來力を日本弘道會に盡し、道德振興に向つて活動を續けたり。二十四年文學博士の學位を授けられ、三十五年八月特旨を以て、正三位に叙し、勳一等を授けられ、同月遂に永眠せり、年七十五。茂樹人と爲り、溫和

にして一見婦女の如くなりしも、内は正氣に満ちて、剛毅古武士の風ありき。抑日本弘道會は、明治九年四月に創立せる、修身學社の後身にして、茂樹の最も力を注ぎし所、十七年四月同會長に選まれ、三十五年病革るの時、會員壹万以上、支會百三十餘ヶ所に及べり、また盛なりといふべし。

著述

泰西史鑑 明治五年 五月編譯 萬國史略 明治五年 中編纂 婦女鑑一冊。國民訓。國家道德二冊 明治二十年 七月三月 德學講義 明治二十年 八月六月 自識錄 明治三十年 八月續自識錄 明治三十年 三月 客窓偶筆 明治十年 泊翁 卮言。儒門精言。泊翁叢書第壹輯 大正二年 六月發行 書第貳輯 大正二年 六月發行

明治三十三年二月宮中顧問官ヲ辭スル時ノ詩

西村茂樹

畢世甘爲人欲奴。高塵誰是天下士。

高車駟馬吾賤汝。元是一幅臭骸耳。

罷官有作

白髮掛官辭紫宸。聖恩優賜自由身。還林野鶴翎猶健。解鎖老猿氣更伸。
細雨疎鐘梅寺暮。微風談月黑陀春。先憂後樂聊開道。造化許吾爲福人。

題小照

遭逢聖世。三十余年。聖恩至大。全家安眠。守一身愚。學古人聖。所自得何。知命樂天。

辭世

生因常事。死亦常事。口以常身。自處常事。晴空無雲。潭水無波。
逍遙人間。七十五年。孜孜求道。聊有得焉。魂也何之。無有定所。上天下地。自在濶步。

渡邊辰五郎

渡邊辰五郎。長生郡廳南町の人、渡邊常松の第五子にして、弘化元年甲辰八月を以て生る。家素貧なり、生計困難なるより叔父の家に養育せらる。十四歳の時母を失ふ、十六歳の時江戸に出て、仕立屋某の丁稚となり、明治元年一月無事年期奉公を終り、故郷廳南に歸り、附近の女子に裁縫を傳授し、傍ら仕立物を業とす、時に年二十五。同四年東京に出て、湯島に裁縫私塾を開き、諸生を教ゆ、七年五月長南小學校の裁縫教員と爲り、十三年千葉女子師範學校教師補に任じ、校長那珂通世の知る所となり、翌十四年東京女子師範の雇教員に聘せらる。十六年七月文部省御用掛を命ぜられ、十七年私塾を本郷東竹町に移し、和洋裁縫傳習所と稱す。十九年東京女子師範學校の教員を辞し、二十二年十二月同志と共に共立女子職業學校を創立し、裁縫科主任と爲り、同校に教針を執ること六年、二十九年二月同校を辞し、私塾傳習所を東京裁縫女學校と改稱し、専心裁縫術を教授せり。三十七年六十一歳に達せしを以て、門人等相謀り、還曆祝賀の記念として、銅像を校前に建設せり。文學博士重野安繹銘を撰んで曰く吾師渡邊先生通稱曰辰五郎、上總國長南人、少游東京、學裁製縫紐之術、歸郷歴任諸學校、再來東京、爲共立女子職業學校裁縫科主任、後辭之、自開裁縫學校於本郷、專教子女、四方來學者常數十百人、自明治初至今、不知凡幾萬、於是弟子等相謀、銅製先生肖像、建干學校前庭、以

表景仰之意云。四十年五月歿す、年六十四。嗣子滋米國裁縫學校卒業後、歐洲各國を巡遊し、最新の服裝を研究し、父に嗣ぎ、東京裁縫女學校長と爲る
辰五郎人ご爲り、誠實にして勤勉、二十五歳より死に至るの間、殆ど四十年の長きに亘り、諄々教へて倦まず、經營の私塾は、實に本邦唯一の裁縫女學校にして、在學生常に千人を數へ、卒業生を出すこと前後四千人、渡邊式の裁縫術全國到る所に行はる。實に明治裁縫界の泰山北斗と稱すべし。

著述

裁縫掛圖明治十年 普通裁縫教科書同十三年 普通裁縫算術書十三年 たちぬひのをしへ十五年 裁縫教科書三冊三十年
裁縫教授案三十一年 婦人改良服裁縫指南三十六年 新裁縫教科書遺著四十一
年四月 年三月 年五月發行

手島精一

手島精一。上總菊間藩士にして、嘉永二年十一月を以て、江戸の藩邸に生れ、初め惇之助と稱す。明治三年早くも米國ヒラデルヒア學校に入り、螢雪の勞を積むこと五年、同七年學成り歸朝せり、時は年二十六。翌八年東京開成學校に聘せられ、後文部大輔田中不二麿に隨行して米國に赴き、彼の地の教育事業を視察し、十年文部省一等屬に任じ、次で九鬼隆一に従ひ、佛國に差遣せられ、十四年東京教育博物館長に任じ、十八年文部省書記官と爲り、十九年更に文部省參事官兼會計局次長に榮轉し、二十三年東京職工學校長に任

ぜらる。當時職工の名稱を誤解し、入學者常に尠く、既に存廢の問題起れる際なりしが、精一新に校長に選ばるゝや、銳意之が刷新改善を計り、校名を東京工業學校後更に東京高等工業學校と改むと改め、漸く隆盛の域に進めたり。三十一年尾崎行雄文部大臣に任ずるや、普通學務局長に擧げられ、翌三十二年再び東京高等工業學校長に轉任し、兼て共立女子職業學校長たり。精一工業教育に従事すること殆ど三十年、實に本邦工業界の大恩人と稱すべし。明治四十二年一月恰も滿六十一歳に達したるを以て、門人等盛なる還曆祝賀會を開けり。大正五年教育上多年の功勞(東京高等工業學校創立以來卒業生を出すこと四千人、全國到る所の工業學校、徒弟學校、實業補習學校、其他各種の會社、工場等に就職せり。乃ち手島の門下全國に滿てり)により、勳一等瑞寶章を賜はる。後病を以て官職を辭し、漸く閑散の身と爲りしが、同七年一月歿す、年七十。人ご爲り、溫厚篤實、よく後進を愛す。而して意思剛健にして、獻身的努力も避くる所なしといふ。

諸侯傳

土井利勝

土井利勝。下總古河藩主なり。初め松千代後大炊頭と稱す。三州刈屋城主水野信元の子にして、天正元年を以て生る。同二年父信元、佐久間信盛の讒によりて死す。信盛次て刈屋に封ぜらるゝに及び、悉く水野氏の一族を逐ふ。利勝年甫めて三歳、母に抱かれ岡崎に走り、土居利昌の養嗣子となり、同七年秀忠生るゝや、家康利勝を召して、相手たらしむ。時に年七歳。同十九年采邑一千石を賜はり、慶長七年下總小見川一万石を領す、時に年三十。同十年從五位下に叙せられ、大炊助と稱す、同十五年食邑一万五千石を加賜せられ、佐倉に徙る。同十六年幕命を奉じ、佐倉城の改築に着手し、鹿島山に土工を起し元利元年城溝功成り之に移れり。工事七年に亘り、當時海内屈指の要害と稱せらる。寛永十年古河に轉封し、新舊併せて十六万二千石を領す。同十五年六月年六十歳、推れて大老職に補せられ。將軍家光を輔け、治蹟の見るべきもの頗る多し。正保元年七月卒す、年七十二。嗣子利隆遠江守と稱し子孫世々古河城主たり利勝淵靜にして遠慮あり、家康秀忠家光の三代に仕へ、寵遇尤も厚く、將軍

家屢利勝の宅に臨み、種々の賜物あり、利勝また寵恩に感じ、日夜補弼に苦心せり。秀忠の女入内の時、惣奉行と爲り、武門として前例なき大禮を行はれたり。秀忠代を家光に譲りし時、天下を治むの七寶を附與す、利勝其一たりといふ。寛永十五年大老に擧げらる、これ幕府大老職を置くの嚆矢なり。徳川頼宣豪邁にして、幕臣をば皆呼捨にせるも、獨り利勝に對し、大炊殿と言へり。智慧伊豆松平信綱、また常に利勝を以て大智者と稱せり。實に徳川幕府に於ける名宰相といふべし。(野史、大日本人名辭書、名將言行録續篇)

堀田正盛

堀田正盛。下總佐倉城主なり、加賀守と稱す。父正吉初め織田信雄の臣たり信雄滅後、小早川秀秋に事へ戦功あり、秀秋の家老稻葉正成正吉の勇武を愛し、女を以て之に妻はせたり。正盛は即ち其子なり、正成の後妻齊藤内藏助の女 お福後春日局慶長十年將軍秀忠の長子竹千代の乳母となり、正吉も亦幕府に召され、遂に采邑一千石を賜はる、寛永六年三月 受封年五十九正盛慶長十三年十二月を以て江戸に生れ、三四郎と稱し、十三歳の時より竹千代の近習と爲り、深く寵眷せらる。元和九年七月竹千代家光と改め、三代將軍に補せらる、や、正盛相摸にて七百石を賜

はり、寛永二年五千石と爲り、同五年下野佐野の地五千石を加へられ、一萬石を領し、一躍諸侯の列に入る。同十年三月若年寄と爲り、六人衆堀田正盛、松平信浦正次、大田資宗、阿部重次の一たり。同十二年三月武州川越に轉じ、三万五千石を領し、同十五年三月信州松本城主と爲り、十萬石を領す。同十九年正月下總佐倉に移され、十三萬石を賜はり、同年七月十五萬石と爲り、下總小金、下野佐野の幕領三萬石を預けらる、其昇進の速かなる、實に異數たり。將軍家光屢正盛の邸に臨み、寵遇比なし。慶安四年四月家光薨するや、正盛多年の恩遇に報るんこて、心徐に自刃せり、年四十四。辭世に曰く

行末も何かくからん時を得て

浮世の隙をあけぼの、空

去りとても思ひし事の夢なれや

何言の葉のかたみなるらん

長子正信家を繼ぎ、萬治元年故ありて國除せられ、其子孫世々江州宮川藩主たり。三子正俊古河城主となり、其子孫再び佐倉藩主たり。

正盛人と爲り、聰明にして才略あり、眉目秀麗にして、儀容優美なり。文武の兩道を修め、内外の畏敬を受く。嘗て打物持つ男、打物の金屬を盗みしを以て死を覺悟せり。正盛赦して曰く、薄給なればこそ盗心を起せしなるべし。以來増俸すべしと命じければ、其男深く之に感激し、正盛殉死の後僧となり、墓所の掃除番となり、一生を終りたりといふ。其下に篤きこと斯の如し、以て其人たるを

知るべし。(寛政重修諸家譜。野史。名將言行錄續篇。大日本人名辭書。佐倉史談。)

久世廣之

久世廣之。大和守と稱し、下總關宿城主なり。其先大政大臣源通將に出づ通將の次。男久世左太夫、足利政智と交り、政智關東に下るに及び、俱に伊豆に居住し、後下總古河に徙り、又轉じて三河に住めり。其曾孫廣宣、徳川家康に仕へ、天正十八年小田原の役戦功あり。上總横山三百石を食む。大坂の役秀忠に従ひ、殊功あり、上總海上二千七百石を賜はり、明年更に二千石を加増せらる。寛永三年三月卒す。年六十六。廣之は、三左衛門廣宣の第三子にして、慶長十四年を以て生る。初め三之丞と稱し、九歳の時將軍家光に謁見せられ、十九歳の時、父を失ひ家を繼ぐ、寛永十三年從五位下に叙し、大和守と稱し、扈從隊番頭となる。屢々加封せられ、慶安元年一萬石となり、侯伯に列せり。寛文四年少老となり、同五年老中に進み、同九年關宿五萬石に封せられ、侍從に任ず。延寶七年六月卒す、年七十一。人と爲り、寛容にして學を好み、能く下を愛し、當時の名相池田光政と同年にして、堀田正盛及中江藤樹より一年若く、保科正之より二年長ぜり。共に徳川將軍家を補佐し、守成の功を全ふせしめたり。子孫世々相繼ぎ、關宿城主たり。野史。名將言行錄續篇。武鑑。大日本人名辭書。帝國人名辭典。

堀田正睦

堀田正俊。下總古河城主たり。備中守と稱す、佐倉城主堀田正盛の第三子に

して、寛永十一年十一月を以て江戸に生れ、初め久太郎と稱す。翌二年將軍家光の命に依り、外曾母春日局の養子と爲り、城中に起臥す。八歳の時より世子竹千代四代將軍家綱の近習と爲る。慶安四年父正俊歿死せんとするや、短刀を遺筐として贈られ、國家の柱石たらんことを囑す、時に年十八。後奏者番となり、春日局の遺領三千石を受け、寛文七年六月上州安中にて二萬石を賜はり、同十三年若年寄に列せらる。延寶七年七月更に老中に進み大政に與る。翌八年將軍家綱病革まり、嗣子なし、正俊大老酒井雅樂頭名は忠清、世下馬將軍といふの意見を排し、舍弟館林宰相綱吉を迎へて、五代の將軍と爲せり。爾來擁立の功を以て、寵遇比なし。天和元年二月下總古河五萬石を領し、同年十二月一躍して大老職に補せられ、左近衛權少將に任ぜられる。二年十二萬石と爲る。正俊感激して銳意輔翼に力む。然れども天資剛直にして嚴正なれば、時に家綱の意に逆ふて諫言することあり、家綱や、不快を覺ゆ、是に於て佞臣柳澤保明等巧に正俊を讒しければ、將軍一日正俊に對ひ、退隱を諷せり。正俊應ぜず、斃れて已むの決心を以て、依然大老職の權を振へり。姻戚稱葉正休正成の孫にして一將軍萬二千石を食むの内意を受け、正俊を諫争するもまた聽かず、翌日正休の爲め殿中に刺さる。正俊の弟正英、子正伸等座にあり、前後より正休を斬殺せり。此日正俊卒す年五十一。

正俊の後、正仲、正章、正春、正亮相續き古河城主たり。正亮封を佐倉に移され、子孫世々佐倉藩主たり。正俊人と爲り、英明にして剛毅果斷に富めり。保科正之、阿部忠秋、板倉重昌等皆其人となりを稱せり。大學頭林信篤常に曰く、堀田侯は龍を見るが如しと。性文學を好み、新井白石、熊澤蕃山の徒を愛せり。嘗て日本と支那の學問を論じ、日本は義を先に仁を後に、忠を先に孝を後に、武を前に文を後にすること、心得べしと。又三惑論を記述し、將軍家に獻せり。平生和歌を嗜み、詠する所少からずといふ。野史。佐倉史談。大日本人名辭書。武將言行錄續篇。

堀田正睦

堀田正睦^{マサヨシ}。初め正篤、備中守と稱す、佐倉藩主相摸守正時の季子にして、文化七年八月を以て、江戸藩邸に生まる。文化八年三月兄正愛の嗣と爲り、佐倉十一萬石を領す。時に年十六。當時藩政振はず、長臣專横にして、擅に權を弄せり。正睦資性溫和なれども、聰明にして經國濟世の志あり、忠臣渡邊亂を擧げて、藩政を委ね、大に弊政を釐革し、風紀を振肅し、併せて窮民を救恤せしむ。亂才識あり、藩儒澁井平左衛門、菱川泉藏等をして、文武の道を講ぜしめ、内は紊亂せる財政を整理し、外は頻に人材を登用し、大に治績を擧げ、士風を矯め、以て藩政を一變せり。天保五年八月社寺奉行と爲る、同八年七月水野越前守正睦の施政宜しきを聞き、老中に列し、世子の傳と爲せ

り。同十一年十一月將軍家齊薨するや、越前守其寵臣を黜け、盛に弊政を改革し、新政を斷行せり。正睦幕政に參與せしも、越前守の苛酷を厭ひ、同十四年閏九月を以て老中職を辭し、佐倉に歸り、弘化元年五月學校を興し、人材を養ひ、特に海外の文明を慕ひ、前に藩醫西淳甫、鏑木仙安の二人をして、蘭醫坪井信道に就て學ばしめ、又蘭醫佐藤泰然を聘して侍醫と爲せり。更に齋藤碩五郎をして、高島四郎大夫に就き、西洋銃陣法を學ばしむ。又藩臣數名を選び、菲山代官江川垣庵に就き、兵法を學ばしむ。或は木村軍太郎をして、杉田成郷につき、西洋兵法を研究せしめ、城内に西洋砲術場を設け、城外に醫務局を置き、醫學を講じければ、佐倉は宛然西洋學藝の淵藪たるの觀ありき。嘉永六年六月米國艦隊浦賀に來り、貿易を乞ふ、老中首席阿部正弘、諸侯を召集して、和戦兩論を問ふ、時に大勢に通ずるものなく、獨り正睦開港の止むべからざるを説く、正弘大に其説に服し、安政二年十月將軍家定に謁し、正睦を推舉して老中席に就かしむ。同三年十月正睦外國掛に任じ、外交の局に當れり。依て川路正謨、岩瀬肥後守の二人を登用し、懇々開港の適切なることを諭告するも、有司頑冥にして、之を悟らず、世を擧げて攘夷論に傾けり。正睦慨然衆議を排し、將軍に稟請して、米使を延見せしむ。米使ハルリス、又屢佐倉藩邸に來り、正睦と通商の規程を議せり。而して外國との條約は、國家

の一大事なるを以て、三藩二卿をはじめ、全國の諸侯伯より、諸役吏に至るまでに、移文して意見を問へり。果然越前、薩摩數藩の外は、悉く反對せり。然れども條約調印の期迫まれるを以て、正睦意を決し、川路岩瀨二人を従へ京師に上り、九條關白尙忠に謁し、頻に開國の利益を説き、將に開港の赦許を得んとするに際し、野心者流の乘ずる所となり。朝議一變して、攘夷を主張せり。正睦の苦心全く水泡に歸し、空しく旅装を整へ、江戸に還れり。時は安政五年四月なり。而して江戸にあつては、伊井直弼大老に任じ、紀州宰相家茂を迎へて、將軍を爲し、同年六月二十日神奈川に於て、專斷的に條約に調印せり。是に於て正睦職を辭し、また幕政に與からず、翌六年九月隱居して佐倉に歸り、見山と號し萬延元年三月井伊大老櫻田門外に瘞され、文久二年正月安藤老中坂下門外に傷けられ、尋て英艦鹿兒島に來寇し、同年八月七卿長門に走り、天下騷然、内外漸く多事ならんとするの時、惜しむべし、幕末の英才堀田正睦不遇其手腕を振ふことを得ず、溘然佐倉城中に卒す、年五十五。文明院と諡せり。正睦人と爲り、軀幹長大にして風貌雄偉、天資温厚にして度量人に過ぎ、喜怒色に見はれず、學を好み士を愛し、領民其惠澤に浴し、今に至るまで其徳を稱せり。大正四年十一月御大禮に際し、生前の外交功績を嘉賞せられ、從三位を贈らる。(堀田閣老傳。千葉教育雜誌)

林 忠 崇

林忠崇。通稱昌之助、上總請西藩主林忠英の六子、嘉永元年を以て生る。慶應三年六月、兄肥後守忠交の後を嗣ぎ、請西一萬石を領す。明治元年正月慶喜大政を奉還し、次で鳥羽伏見の戦起るや、忠崇^{時年二十一}上書、徳川氏の家名を全ふせんことを請ふ、既にして幕府撤兵頭福田道直等と合し、木更津に據り、官軍の攻むる所を爲り、同年閏四月請西の陣屋を燒拂ひ、海路伊豆に走り、將に甲府城に據らんとす、大總督府田安慶頼に命じて、忠崇を沼津藩に拘留せしむ。忠崇脱走して箱根に至り、小田原藩臣を誘ひ、軍監中井正勝を殺し、同三雲某を逐ひ、一時虚勢を張りしが、官軍の襲ふ所となり、再び海に浮び、奥州平瀨へ上陸、奥羽諸藩の賊徒と合し、再擧を謀りしが、大勢如何ともする能はず、同年九月會津城陷るの後、軍門に至り降伏す、同年十二月松平容保と共に、死一等を假し、左の宣告を受く。

當春王師東下以來、徳川慶喜退去謹慎候處、其方尙暴論ヲ主張シ、脱走無頼之徒ヲ煽動シ、其詐謀ヲ逞シ、竟ニ函嶺暴擧 王師ニ抗衝、後海路仙臺ニ遁レ、賊徒ヲ招集シ、再擧ヲ謀リ候ヘル、奥羽諸賊追々敗衄ニ及ビ、終ニ伏罪候條、天下之大典ニ於テ、其罪難被差置、屹度可被處嚴刑候處、出格至仁之 思召ヲ以テ、小笠原中務大輔へ永預仰付候事。

翌二年九月家名を存し、弟忠弘に祿三百石を賜はり、四年三月更に唐津藩に

禁錮せられ、五年正月はじめて赦免せらる。同二十六年持旨を以て、嗣子忠弘華族に列せらる。(江城日誌、鎮臺日誌、東京城日誌、上總町村誌)

現今英名百首中

向かへてつくさば月に浮雲の曇りがちなる身とはなるべき

林 昌之助

堀田正倫

伯爵堀田正倫^{マサトモ}。舊佐倉藩主備中守正睦の嗣子にして、嘉永四年十二月を以て江戸の藩邸に生る。元治元年封を襲ひ、佐倉十一萬石を領す。時に年十四。老臣平野縫殿等に補佐され、維新の變亂に際し、王事に盡瘁し、幸に事なきを得たり。明治二年佐倉藩知事に任じ、廢藩置縣の時、東京に出で宮中祇候を仰せらる。明治二十三年舊領佐倉に移住するに際し一通の趣意書を、家令に示して曰く、國會開設の期も近づきたれば、華族も大に奮發せざるべからず、才力ありて名聲を天下に博せんとするは、都會にあらざれば、志を成すこと能はずと雖も、無能の者は、熱鬧喧噪の衢にありて、狂人と共に走るの譬に洩れざらんよりは、寧ろ閑雅幽邃の地に住みて、身心を安養し、地方相當の事業を經營し、國民たるの義務を盡すに如かずと思ふ。依て地方に移住し、舊來の習慣を一洗し、諸事素朴を旨とし、此目的を達せんことを欲す云々と、

以て其所志の一斑を窺ふべし、爾來力を殖産興業と、地方教育とに致せり。先づ産業の發達を圖り、農業、牧牛、製茶、製靴、園藝、林業を奨励し、二十餘年來農馬補給の方法を立て、勞力を填補すると共に、肥料を潤澤ならしめ遂に明治三十年四月巨額の資金を投じ、農事試験場を創設し、専門の技師を聘し、農作物及果樹を試作し、或は家禽を飼養し、以て優良なる種苗種禽を各地に蕃殖せしめ、又改良耕作法を普及せん爲め、賠償試験の法を立て、其成績を公衆に領布せり。又夙に教育事業に注目し、藩學を復興して佐倉集成學校を設立し、佐倉中學の基礎を立て、後縣立に變ずるや、陰に陽に之を援け、三十九年基本金として十萬圓を寄附し、中等教育を維持せしめ、又佐倉獎學義會を起し、學生に資金を貸與し、薰風會を組織しては、地方の矯風を促し、大日本衛生會員と爲りては、佐倉支會を設け、衛生思想を普及し、其他日清日露兩戰役に際しては、巨額の献金を爲し、軍人遺族を慰問する等、専ら國利民福を計り、皇室の藩屏たる本分を守れり。惜しい哉四十四年一月を以て薨去せらる、年六十一。持旨を以て從二位勳一等に叙せらる。(千葉教育雜誌、時事新報、地方資料小鑑、印旛郡誌)

加納久宜

子爵加納久宜。筑後三池藩主立花種恭の實弟にして、嘉永元年三月を以て江戸に生る。慶應三年九月上總一宮藩主加納久恒遠逝するや、一宮藩に迎へられ加納氏を繼げり、時に年十八。戌辰の役藩兵を率ゐ、東海道を上り、途伊勢桑名にて東軍の敗報を知り、江戸に引返し、次で一宮に歸り、薩長二藩藩籍を奉還すこ聞き、關東以北の諸藩に率先して奉還を奏請せり。明治二年大學南校に入り、米津政敏、菊地大麓、古市公威等と共に佛學を研究せり。後督學局に出仕し、次て岩手縣師範學校長、新潟縣學校長となり、十四年五月更に司法省判事に轉じ、態谷始審裁判所長に任じ、十五年大審院檢事となり、二十三年貴族院議員に選ばれ、二十七年一月鹿兒島縣知事に任ぜらる。是より力を殖産興業に傾け、農事の改善を促し、水産を發達せしめ、養蠶と畜産とを奨勵し、大に治績を擧げ、良二千石と稱せらる。三十三年五月職を辭し爾來府下大森村に閑居し、傍地方の産業と教育とに盡力し、又東京競馬會を創立し、日本体育會長に推さる。而して晚年一宮に移住し、一宮町長に推舉され、理想的自治制を施行し、模範町村たらしめんと欲せり。大正八年二月薨す、年七十四。

武術家傳

大坪慶秀

大坪慶秀。一名廣秀、初め孫三郎、後左京亮、又式部大輔と稱す。上總國望陀郡の人。馬術に長じ、將軍義滿及義持に仕ふ、後薙髮して道禪と号し、亦能く鞍鐙を作れり、これ鹿島神を祈り、夢中鞍鐙の曲尺を得たりといひ、秘して人に許さず、ただ曲尺を畠山中務入道に授く、某年五月十八日歿す、年八十四。慶秀の馬術たる古今獨歩にして、所謂大坪流の始祖なり。門人多き中、村上加賀守永幸、三條殿、浦松殿、畠山宮内大輔、田中務少輔、同掃部介、細川右京大夫等傑出たり。後世齋藤安藝守好玄なるもの、妙技に達し、大坪流中興の祖と稱せらる。(武術流祖錄)

飯篠長威齋

飯篠長威齋。名は家直、伊賀守と稱し、香取郡飯篠村の人、後山崎村に移住す。幼弱にして刀槍の術を好み、香取神宮に祈願し、神苑内梅木山不斷所に

て、獨習すること一千日、爲に劍法の秘奥を悟り、一家を成して、天眞正傳神道流と稱し、兼ねて兵法の微蘊を極む。嘗て足利義政に仕へ、幾もなく下總に歸り、劍法を教ゆ、門下頗る多し、就中諸岡一羽、塚原土佐守、松本備前守政信等名あり。長享二年四月歿す、世中興力槍の始祖とし、或は中古刀法の開山と稱せり。墓碑香取不斷所に在り、子孫世々香取神力流を傳へ、明治に至れり。(碑銘。北條五代記。武藝小傳。武術流祖錄。下總舊事考。香取郡誌)

御子神典膳

御子神典膳。名は忠明、安房國丸村字御子神の人なり。刀槍の術をよくし、上總國萬木城主土岐氏に仕へ、上總に住す。偶伊豆の劍客伊藤一刀齋なるもの上總夷隅郡萬木村に来るや、典膳其技の敵すべからざるを悟り、贄を執て、其門下と爲り、一刀齋に従つて、諸州を遊歴せんと欲し、下總國小金ヶ原に至り、小野善鬼なる奸物と勝負を決し、之を斬殺して、一刀齋の賞揚する所と爲り、劍道の元祖飯篠長威齋より傳はれる、瓶割の名刀を授けられ、これより相別れて上總に歸り、益其術を究め、門下頗る多し。天正十八年豊臣秀吉大舉して小田原城を圍み、別に淺野長政、本多忠勝等をして、房總諸城を徇へしめ、鎮定の後、八州舉げて徳川家康の領分と爲る。典膳江戸に出て本郷に住す、

徳川氏の臣小幡景憲の知る所となり、文録二年徳川氏に召され、小野二郎右衛門と改め、采邑二百石を與へらる。關ヶ原の役、信州眞田表に戦功をたて、七本鎗の一人と稱せられ、將軍秀忠より、諱字を賜はり、忠明と稱し、將軍家の師範と爲り、寛永五年十一月歿す、年八十一。

世小野派一刀流の元祖とす。二子あり、長子忠也伊藤典膳と稱し、次子忠常小野氏を冒し、共に刀槍の師たり。(武藝小傳。武術流祖錄。事實文編。安房志)

夏見族之助

夏見族之助。佐倉藩の人、刀術を好み、柳生新法流を學び、其蘊奥を究む。常に門人に示すに、無滯體心の四字を以てす、故に無滯心流と稱し、本流の開祖なり。(武術流祖錄)

太田新之允

太田新之允。初め助之允と稱し、佐倉藩の人なり。岸和田流の砲術に達し。其名著はる。萬治中砲術を以て、水戸藩に仕ふ。子新之允、又砲術を繼ぎ、精妙と稱せらる。(武術流祖錄)

戸塚彦介

戸塚彦介。駿河沼津藩の人。文化十年を以て江戸に生る。明治二年藩主水野忠敬封を上總菊間に移さる、や、從ひ來りて本州の人と爲る。夙に柔道を修め、其伎に長じ、柔術師範たり。萬延元年將軍家茂に謁を賜はり、幕府講武所の師範役と爲る。維新の後も、専ら柔術を教授し、又職を千葉縣巡查教習所に奉じ、柔道を教授すること前後四十年、門人一千人を越へ、眞に帝國柔道の師範たり。明治十九年四月千葉町に歿す。年七十四。(上總町村誌、明治大年表)

軍人傳

大築尙志

大築尙志。佐倉の藩人、天保六年十一月を以て生る。夙に泰西の學術を研鑽し、砲術の造詣深く、明治四年始めて陸軍に入り、中佐に任じ、六年大佐となり、十九年少將に進めり。其間砲工本廠提理、砲兵局長、砲兵會議長、砲兵監等の要職に歴任せり。明治二十七年日清戦争の時、臨時東京灣守備隊司令官たり。三十二年陸軍中將に進み、後備役となり。三十三年六月歿す、年六十六。正四位勳二等たり。中將は實に我陸軍中砲兵科の柱石にして、砲兵の編制、教育及造兵事業に貢献さるゝこと、二十有餘年の長きに亘り、實に我國砲兵の始祖とも稱すべし。有志其功績を不朽に傳へんが爲め、銅像を東京砲兵工廠内に建設し、四十三年六月其除幕式を行へり。嗣子大築千里、工學士にして、京都帝國大學教授たり。未亡人茂登子佐倉藩士岩淵某の女にして、良妻賢母の聞えあり、大正五年四月歿す、年七十二。(大迫尙志除幕式々辭。時事新報。大日本人名辭書)

松本順

松本順。字は子良、蘭疇と号し、佐倉藩醫泰然の四子にして、天保三年六月を以て生まる。十六歳の時、幕醫松本良甫の養嗣子と爲れり。夙に蘭學を修め、洋法の醫術に精通せり。漢法醫等之を嫉み、漢法の難題八ヶ條を選び、試問す、順一々之を説明し、悉く心服せしめ。嘉永三年歳十九、長崎に留學し、蘭醫明百氏に就き、其蘊奥を極め、屢薩長、筑肥、越前等の藩醫を遊説して、洋法の研究を勸告し、遂に自ら病院を建て、實地の練習を爲して、範を示せり。これ我邦洋法病院の嚆矢なり。文久元年幕命により、海陸軍醫を總轄す、時に年三十一。次で將軍家茂の侍醫と爲り、法眼に叙せられ、兼て西洋醫學校長たり。戊辰の役子弟數名を率ゐ、會津に赴き、軍時病院を設け、大に奥羽諸軍の負傷者を治療し、賊に黨するの故を以て、幽囚せらる、ここ一年、朝廷其學識と才略を惜しみ、之を赦せり。乃ち私立病院を早稻田に建て、治療の傍、子弟を教ゆ。明治四年大學出仕を命ぜられ、六年初めて陸軍々醫總監に任ず。西南の役功績をたて、正四位勳二等に叙せらる。次で三十三年貴族院議員に勅選せられ、後男爵を授けらる。四十年三月大磯に歿す、年七十六。順人と爲り、器宇濶達にして、慈仁に富み、常に病者を憐み、清貧に安ぜり。我邦軍醫界の元勳にして、軍醫の編成、同試験制度等に盡す所多く、林紀、橋本綱常、石黒忠惠等皆其門下より出で、相繼ぎて軍醫總監たり。而して順早

くも大磯の海水浴場を開き、天下の名勝地と爲せり。(貴族院議員略傳。國の礎。現今英名百首)

國會議員百首の中

一筋に君の恵を思ふよりかへする道に身をば碎かむ

松本 順

齋藤力三郎

齋藤力三郎。舊鶴舞藩士小池某の次男にして、齋藤氏を嗣げり。明治十年陸軍教導團に入り、同十二年更に士官學校に入學し、十四年十二月歩兵少尉に任じ、二十二年陸軍大學に入り、卒業後士官學校教官に拔擢せらる。日清戰爭の際大本營附參謀として、宇都宮太郎と共に川上參謀總長の懷刀と稱せらる。三十七年京城公使館附として辣腕を振ひ、後第十一師團の參謀長と爲り、旅順政圍戰に功を奏し。三十八年三月大佐に昇り、勳三等功三級を賜はり、四十二年一月少將に進み、歩兵第二十五旅團長に任じ、更に陸軍省人事局長を經、大正二年五月教育總監部本部長を命ぜられ、同年より翌三年に至るの間約八ヶ月間、歐洲の軍事を視察し、三年十一月神尾光臣の後を受け、久留米第十八師團長に榮進し、我陸軍將官中錚々の名聲ありしが、同四年五月住地久留米に病歿せられたり、年五十三。將軍人と爲り頭腦明敏、資性快濶磊落なれども、其事を處するや、綿密なれば、行政家としても不可なかりしを知るべし。

櫻井規矩之左右

櫻井規矩之左右。佐倉藩士なり。海軍大佐と爲り、海軍大學校長に任ず。日清戦争の時、比叡艦長として、黄海の大海戦に偉功を立て、勇名を轟かし、戦後勳五等功四級を授けられ、又海軍少將に進み、海軍砲術練習所長に任じ、三十四年七月豫備役仰付けらる。爾來和歌謠曲等に親しみ、老年を送りしが、大正元年十一月病革まり、特旨を以て勳四等旭日小綬章を賜はり、遂に歿す、年六十五。

義人傳

木内宗五郎

木内宗五郎。印旛郡公津村の人、慶長十七年を以て生る。其先千葉氏に出づ。元亀天正の頃木内左馬允胤忠通稱源左衛門なるものあり、佐倉城主千葉重胤に仕へ四天王の随一たり。天正十八年小田原滅亡後、主従封地を失ひしを以て、胤忠公津村に土着し、印旛沼沿岸に開墾を企てたり。宗五郎は則ち其曾孫にして父祖に嗣ぎ、大庄屋たり。佐倉は寛永十九年正月堀田加賀守正盛の領封と爲り、慶安四年四月將軍家光薨するや、正盛生前の恩義に感じ、屠腹して殉死す子正信上野介と稱し、遺領十二萬石を受け、父の勳功により、閣老に昇進したれども、思慮淺薄にして短氣なれば、時に暴威を振ふといへども、争臣皆口を噤み、諫言するものなし。時に奸臣池浦主計、金澤某等正信の江戸定詰なりしを機とし、擅に權柄を弄し、威を振ひ、遂に農民に種々の冥加金を上納せしめ、私腹を肥さん計れり。依て廩倉を設け、豫め凶作飢饉の救米に備へんが爲ありて、高一石に付米一斗二升増米佐倉領拾貳萬石にて參萬六千俵の増加と爲るを申付くるの外、人頭税、家屋税、商業税、及工藝品、農産物に至るまで、二十九點の苛税を賦課

せり。領民大に驚き、事情を藩主に訴ふるも顧みず、悉く上納せしめらる。翌承應元年また巨額の増米、多分の課役運上等を賦課せられ、實に佐倉の領内は悲惨を極めたり。遂には破産八百八十餘戸、廢寺十一宇、他領へ轉流せしもの千七百三十人に及び、田畑荒廢し、不毛の蕪地に歸せしもの少からず、然るに未納の諸税は、村々組合にて辨納すべしと申渡さる。此に於て領民等相議し、屢藩廳に至り、嘆願するも、却て叱責せらるゝのみ。同年十月領内三百八十九ヶ村の名主公津村に會合し、議する所あり、翌十一月十七日一同堀田上郎の門前に集合し、上訴して聽かれず、依りて宗五郎公津村名主、重右衛門印旛郡下勝田村名主、六郎兵衛山邊郡瀧半泉村名主、十郎相馬郡小泉村名主、忠藏千葉村名主、三郎兵衛印旛郡高野村名主の六名總代と爲り、同月二

十六日久世大和守の登城を待ちて願書を差出した。然るにまた何等の甲斐もなく空しく却下せられたり。是に於て宗五郎決する所あり、二百八十九ヶ村民の犠牲となり、將軍家に直訴せんことを述べ、妻子に遺す事ありとて、一夜風雨にか、はらず、潜に江戸を出で、間道より印旛沼の西岸に至り、甚兵衛が義侠の鉦に、船鎖を斷ちて、難なく湖を横ぎり、孤影寂寥たる我家に着し、後事を處理し、夜明ぬ間にと立出で、急ぎ江戸に赴き、五名の名主と共に、時の至るを待てり。會ま十二月二十日將軍家綱時年十四歳上野東叡山に參拜の事ありと聞き、宿願成就此の機にありと喜び。同月十九日の夜、東照宮の社側に伏し、翌日將軍家綱の到れるを覗ひ、一通の願書を捧げたり、

これより殿中評議あり、堀田正信を召し、速に賦歛を減じ、窮民を救ふべき旨を命ぜらる。正信大に愧ぢ、正邪曲直を正さんごす。奸臣等巳の悪事を掩ひ、罪を宗五郎に歸し、邪辯を以て讒誣せしかば、正信大に怒り、承應二年八月四日公津村下方の原野に於て、宗五郎を磔に、四子宗五郎一男三女あり、虐吏宗五郎を憎むの餘り、三女を男子と詐り、慘刑せしめたりといふ、を斬刑に處せり。嗚呼何等の慘酷ぞ、宗五郎時に年四十二、六郎兵衛等五人亦追放せらる。幾もなく奸臣等罪に伏し、重歛を廢し、正租に復し、民始めて安堵をするを得たり。後正信深く前非を悔み、翌三年十一月宗五郎を祀りて、口ノ宮明神と崇め、享和二年百五十回の法會に際し、堀田侯より徳滿院の尊号を追贈し、厚く英靈を弔へり。而して領民の宗五郎を畏敬すること頗る深く、靈堂を建立し、領内鎮守の神として崇拜信仰せり。

以上の記述は、普通世に傳へらるゝ概要なり。由來宗五郎の傳記には、文獻の徴すべきもの少く、真相を知るの便なし、或は佐倉二世正信の時なりといひ。或は一世正盛の時なりといひ。刑死の如き或は正保二年なりといひ、或は萬治二年なりといひ、或は承應二年なりといひ、其他超訴稟請の如き、刑場の如き、諸書異同あり。甚だしきは、宗五郎は、日本年表上の實在人に非らず、印度の傳説人なりと。又宗五郎を以て九州肥後の浪人なりと看做すものあり。諸説紛々たり。然れども匹夫の身を以て、雷霆の威を畏れず、命を鴻毛の輕きに比し、佐倉十萬の生靈を、塗炭の中より救出したるは、宗五郎傳説の主眼にして、諸書皆其揆を一にせり。近日や、信すべき一説行はる。曰く佐倉は千葉重胤滅後、松平忠輝、土井利勝、石川忠總、松平家信の五領主を迎へたり。いづれも治政の年

月短きを以つて、租税の法皆舊慣に依り改むる所なし。堀田正盛の代となり、銳意治を圖り、經濟の道を講じ、施政上の整理を行ひ、納税一俵に付き、一合六勺の増米を詰めしめ、開墾地にして定期の年數を経たるものに、租税を賦課し、未納者には手錠を施して、村内に預け、資産を沒收し、尙不足ある時は、村内をして代償せしむの新令を下せり。然るに兩三年來米穀稔らず、飢餓に苦しむものあるを以て、正盛普く領内の窮民を救濟せしめたり。翌寛永廿年の秋、新法を實行するに、連年不作の後を受け、農村疲弊せる折柄なれば、未納者多く、村内の代償額又頗る多し。これより農民の不平甚しく、領内騒然たり。宗五郎自ら財産を抛ち、未納者の負擔を代償し、各名主と談合の上、佐倉城代に對つて、新政の延期を願ふといへども容れられず、是に於て斷然越訴に決し、潜に江戸に出で、時機をまてり、偶正盛將軍家光の田獵に陪從せらるるを以て、歸途之を要して願書を呈出せり。正盛乃ち領内の情實を調査せしめ、新法中の増米と代償との二條項を廢止せり、此れより領民漸く安堵して、正業に就けり。然れども宗五郎は越訴の故を以て、父子共に死刑に處せられ、正保二年八月三日日本佐倉清光寺畔の刑場に於て、哀れの最期を遂げしめぬ、時に宗五郎年三十四、一子彦七郎僅か十一。三郎兵衛等五人の名主皆追放せらる。宗五郎刑死の後七年、正盛將軍家光に殉死し、子正信嗣ぐに及び、犠牲の爲め死せしを憐み、其葬祭を許せり。領民大に喜び、郷里公津村台方に改葬し、道閑居士と諡し、後祠を建て其英靈を祀るといふにあり。何れか真か、識者の後考を俟たん。

宗五郎の義舉は、所謂身を殺して仁を爲せるもの、民權の首唱者として、痛く世の賞賛を博し、稗史に、講談に、小説に演劇に、好資料を與へしを以て、事實を潤飾せるの嫌ひあり、誤傳謬説頗る多し。いづれにせよ其義侠的精神氣魄は千載に朽ちざるべく、宗吾靈堂の賽客、絡繹として絶ゆるの期無からん。(宗五郎は義民の典型にして、義民は又宗五郎の代名詞なり。近世明治の佐倉宗吾、山陰の佐倉宗吾、今宗吾等の熟稱あり)

○宗五郎に關する圖書

- 傳記…宗五郎實記原名佐倉實記 宗五記伊勢貞賴著 佐倉義民傳古今實錄集 佐倉騷動記。佐倉宗五郎實記續簡 著木内宗吾松原廿三階堂著 明二百五十年後の白骨梁原清著 佐倉宗吾渡邊白帆著 木内惣五郎實錄渡邊修三著 木内宗吾明治四十二年十月發行 民權操志加藤久太郎著 義人佐倉宗吾加藤久太郎著 義民宗吾横山健堂著
- 稗史…地藏堂通夜物語元祿末 惣五摘趣物語湯淺允仙 游歴雜記。寛永紀聞。
- 脚本…東山櫻莊子瀨川如卓作 花雲佐倉曙登真島王和軒、佐久間櫻莊子後日文談 河竹新七 神靈佐倉曙。佐倉義民傳。實錄佐倉宗吾。實事譚佐倉聞書。東叡山農夫聞書河竹新七
- 小説…佐倉惣五郎塚原澁柿園著 明四十五年四月
- 講談…佐倉義民傳演述者不明 佐倉宗五郎邑井一述 佐倉宗五郎桃川如燕述二冊 佐倉宗五郎桃川如燕述三冊 佐倉宗五郎堀堂南 佐倉宗五郎神田伯龍述 佐倉宗五郎博文館 佐倉宗五郎細川風谷述 大正四年六月
- お伽噺…佐倉宗五郎變哲山人著 佐倉宗五郎吉岡班山著 明四十二年

市兵衛

義僕市兵衛。市原郡姉ヶ崎村の人、寛文三年を以て生る。家も貧なり、出で、同村名主次郎兵衛の從僕となれり。當時總南の地猪鹿猶多く棲息して、田圃の作物を荒らし、農民之に苦めり。元祿八年八月姉ヶ崎、迎田元深片又木不入斗、深城、豊成、立野の七ヶ村共謀して大須林山に狩獵を催せり。時に

望陀郡長谷川村の獵夫總兵衛僱はれて終日野獸を驅逐せり。既にして日將に暮れんごする時、深城村の婦九左衛門の妻山中にあり、總兵衛誤りて鹿なりと認め、之を銃殺せり。是に於て諸村の名主組頭等驚きて會議すれども良策なし。然れども若し是を奉行に訴へなば村民の累難容易ならず、如かず婦の遺族と私和せんと、依りて弔金若干を被害者の兄作右衛門に贈り、事穩便に落着せり。後幕吏の探知する所となり、衆其事實を糺問さるゝも、皆其實を告げざりしかば、いづれも重刑に處せらる。翌九年八月加害者總兵衛を死罪に、七ヶ村及長谷川村の名主等、八丈島或は三宅島に配流され、關係せる組頭等悉く追放せられ、各自所有の土地三百六十五石沒收せらる。姉崎村の名主次郎兵衛また此中にあり、土地四十餘石を沒せられ、八丈島に流さる。次郎兵衛老父及妻子四人あり。妻次郎兵衛配流後幾もなく女子を産んで病死す、其慘状いふべからざるも、親戚顧るものなし。獨り奴僕市兵衛主家一族を引受け、乳兒を懷にし、村中の乳を求めて之を鞠育し、己の女を人の婢と爲し、僱賃若干を得て一小屋を購ひ、主家の遺族の住居に當て、之に事ふること猶舊時の如し、時に年三十四。爾來妻と別居し、夫婦の交を斷ち、妻の賃銀をも併せて主家遺族の給養に充て、主從漸く飢寒の憂を免れたり。是より先次郎兵衛刑に就くの日、市兵衛毎夜丑刻を期して姉ヶ崎神社に詣て、主人の宥免を祈願

し、又江戸の府廳に到り、身を以て主人の罪に代らんと嘆願すること毎月三回、其都度必ず次郎兵衛の子萬五郎を負ひ、陸路十有餘里を徒歩し、晝夜兼行途に宿泊することなし。斯の如く主家の遺族を給養するの傍、江戸に歎願すること十有一年の久しきに亘れり。寶永二年正月、死を以て主人の罪を贖はんと決し、村民に訣別して江戸に到り、府廳に訴へて曰く、次郎兵衛の父得入、今年八十七、中風症を患ふること既に三年。命旦夕にあり、語つて曰く願くは一たび次郎兵衛を見るを得ば、則ち死すとも憾みなしと。三子また成長して父を慕ひ、日夜號泣して已まず、嗚呼主從の情として忍ぶ能はず、故に敢て官威を冒して懇請する所、願くは官此哀情を憫み、暫く次郎兵衛の罪を赦され、一たび老父と面語せしめんことを、小人檀訴の罪縱令身首處を異にするも亦辭する所にあらずと、聞く者感動せざるなし。則ち其始末を執政老臣に告ぐ、廷議其誠忠を憫み、奉行荻原近江守をして、命を傳しめて曰く罪人中獨り次郎兵衛の罪は赦し難きも、汝の志を嘉みし、萬五郎十五歳に及べば、法に於て追放すべきなれども、特に之を赦し、且つ次郎兵衛より沒收せる土地の内、五町餘を汝に賜ふを以て、老幼の給養に充つべしと、市兵衛拜謝するも猶嫌らず、翌日吏に請ふて曰く、始めは主の爲に願ひ、後己の爲にするの意義に當れり、希くは歿收の土地は萬五郎に賜はんことを。官之を

許し、更に田七町二反餘、金七十兩を下賜せられ、諸吏また酒肴物品を與へて其忠誠を賞せり。市兵衛續て歎訴し、寶永三年五月遂に聽許せられ、次郎兵衛以下歸村するを得たり。翌四年更に追放者の宥免を歎願し、同八年悉く赦免せられ、没收の田宅概ね舊主に復し、諸人始めて蘇生せるの思ひあり。これ皆市兵衛の至誠官廳諸吏を聳動せしむるに依るごいふべし。林大學頭幕命を受け、市兵衛記を草し、荻生徂徠また義奴市兵衛記事を作り、其名朝野に著はる。而して幕府また村民に命じて、市兵衛を敬せしめ、奴僕の義鑑と爲せり。寶永三年主人の赦罪を得るの後九年、正徳四年十一月歿す、年五十二。同村妙經寺に葬り、寶林院全了日志ご謚せり。(林大學頭篤の市兵衛記。荻生徂徠の記義奴市兵衛事。近世叢語。事實文編。野史。上總國誌稿。上總町村誌。人名辭書。房總叢書市兵衛記)

古來義僕忠婢と稱するもの少からず、皆至誠を以て、其の主仕へ其主の窮を救ひ、其主の仇を復す然れども市兵衛の如く、日に一丁字なき下僕にして、誠意熱烈十有一年一日の如く、忠勤を盡せしもの稀なり。然り當時朝野の賞揚する所なりしも、歲月の久しき概ね此義人を忘却し、其事蹟の如きも漸く湮滅に歸せんとす。是に於て我房總叢書刊行會は、苦心の結果市兵衛に關する諸記録を蒐集し、其第一輯に載せしめたり。予輩は後來特行傳として、普く世に流布せんことを望む。

起きてきけ山ほと、ぎす市兵衛記

忍足佐内

忍足佐内。通稱善兵衛、安房國平郡金尾谷村の人、其先里見氏の臣忍足匠内

より出で、世々里正たり。時に勝山藩主酒井大和守の臣稻葉重左衛門元市井無しの徒なり頼が故ありて酒井侯に福遇せらる奸才邪智諂佞至らざるなく。代官藤田嘉内を籠絡し、賄賂を貪り、威福を擅にせり。明和五年以來早魃すること二年、米穀稔らず、村民疲弊して租税を輸すること能はず、領民舉げて歎願する所あり、重左衛門普く領内を巡檢し、陰に苞苴の事を諷す。金尾谷、小原、白坂三村應ぜず。重左之を憎むこと甚し、三村の人民江戸藩邸に訴へんとす、佐内人となり剛毅。小原村名主平兵衛佐内と共に之を阻み、衆に代りて江戸藩邸に至り、藩宰の亡狀を懇ふ、適藩義弟主酒井侯大坂城番となり邸に在らず、奸臣重左等之を知り、佐内及平兵衛を捕へて獄に投ず、既にして奸臣等己の彈劾せられんことを恐れ、百方兩人を陥れ、侯の命なりご偽り、明和八年十一月常光寺住職等助命の請ひあるにか、はらず、白塚磧に斬殺せり、時に年四十四。佐内の妻之を悲しみ、翌二年二月老中松平周防守に訴へ、却て重左の爲め毒殺せらる。安永二年十二月佐内の母盲目にして年八十餘孫女二人と共に江戸に出で、老中松平右京大夫に訴へければ、酒井侯をして藩政を釐革せしめ、重左及嘉内を放逐し、佐内の家を復せしむ。而して佐内夫妻及び平兵衛冤罪に死せしを悔み、祠宇を建て其靈を祀れり。

近年八束村の有志一同碑を建て又其英魂を慰む。釋宗演の選文なり。(安房國誌。安房志)

志士傳

平野重久

平野重久。佐倉藩の人、文化十一年を以て生る。初め縫殿と稱す、弱冠江戸に出て、經學を修め藩校の教授たり。天保十四年家督を嗣ぎ老職に擧げらる。慶應四年藩論佐幕に傾き、頗る混亂を極む。鳥羽伏見の戦後、錦旗東方に向ふや、重久星馳京都より還り、一藩をして勤王の議を決せしむ。藩主堀田正倫の駿河に至るや、重久留りて佐倉を守り、東北合従の議を排し、同年四月薩軍の上總に向ふを迎へて、一藩の動搖を制し、斷乎として藩兵を發し、總房地方を鎮定し、以て勤王の實を擧げ、佐倉藩をして、幸に大義名分を誤らしめざるを得せしめたり。明治二年佐倉藩大參事と爲り、七年大政官歴史課に出仕し、後修史局に轉任す、十年廢局と共に辭職し、十六年十二月歿す、年七十。大正四年十一月御即位大禮に際し、維新の勳功を追賞し、正五位を贈らる。(報効志士人名錄。大日本人辭書。明治大年表)

烏山確齋

烏山確齋。名は正清、字は義所、通稱新三郎、冢峰、蒼龍軒等の別號あり、朝

夷郡大川村の人、宇山孫兵衛の第二子、文政二年二月を以て生る。其先源義家に出で、甲州宇山に住す、天文中房州に移り、農に歸す。確齋年甫めて十三歳家系を覽て大に感じ、江戸に出て、千葉周作の高弟淺田五郎作に就き劍道を學び、十九歳の時尾張に遊び、天保九年東條一堂の門に入り、儒學を修め、常に安積五郎、國分五郎、江幡五郎等と議論を戦はせり、同十一年出羽庄内藩士加藤環亀に就て上杉流の兵法を學べり。弘化三年帷を京橋桶町に下し、徒を聚めて教授し、嘉永四年竊に蘭學を學び、泰西の兵法を研む。當時梅田源次郎吉田寅次郎、宮部鼎藏、桂小五郎、來原良藏等慷慨悲憤の徒來つて確齋と交を結び、天下の大事を議せり、嘉永六年六月米國の艦隊浦賀に來り、互市を請ふこれより海内騒然たり。是に於て確齋軍制改革考を著はし、大に國防の忽にすべからざる事を論ぜり。四方の士確齋の名を聞き、外敵に處する議論を聽かんと欲する者、日夜絶ゆることなし。吉田寅次郎の如き、江戸に出る毎に確齋家に寓す、安政元年三月寅次郎金子重輔と共に米艦に投ぜんとして、事顯はれ獄に繋がる。確齋同志と共に百方之を救濟せんとして果さず、同二年八月母の病を聞き、郷里大川村に歸り、母の喪に服し、其間烏山系譜考、慎終錄、安房志等を著はせり。同二年七月江戸本所溝口氏の下邸に歿す、年三十八。妻子なし。吉田寅次郎、桂小五郎、來原良藏等建碑の事を議し、江幡五郎(後那

珂通高)をして墓誌を撰ばしむ。明治四十五年二月特旨を以て、從五位を贈らる。

政治家傳

林 董

林董。佐倉藩醫佐藤泰然の三男にして、嘉永三年二月を以て佐倉に生る。や、長ずるの後幕臣林洞海の養嗣子となり、幕府より選ばれて英國へ留學を命ぜられ、彼の地に於て研究すること數年、明治四年九月始めて神奈川縣出仕仰付けられ、同五年十月外務省三等書記官に任じ、爾來工部少丞、同大丞、工部大書記官、宮内大書記官、參事院員外補等を経、十七年八月大政官大書記官、十八年二月遞信省大書記官、二十年二月遞信省内信局長、二十一年十二月香川縣知事、二十二年兵庫縣知事、二十四年六月外務次官、二十八年五月特命全權公使に任じ、清國駐劄を仰付られ、戦後外交上の功により特旨男爵を授けられ、後轉じて露國駐劄を爲り、三十二年和蘭海牙府に赴き、萬國平和會議に列席し、同年十二月從三位に叙し、旭日大綬章を授けられ、三十三年二月更に英國駐劄を命ぜられ、三十五年二月日英同盟の功を以て子爵に陞り、勳一等旭日大綬章を賜はり、三十八年十一月特命全權大使を爲る。二十九年西園寺内閣の時外務大臣に任じ、日露協商締結の功により四十年九月伯爵を授けられ、

四十一年七月、願に依り、本官を免ぜらる。後ち四十四年八月第二次西園寺内閣の時、更に遞信大臣に任じ、大正元年十二月本官を免ぜられ、翌二年七月東京に歿す、年六十四。

輩人と物り、温厚にして常識に富み、最も外交に長せり。而して多藝にして詩歌俳句、碁將棋玉突等をよくし、音樂演劇等にも趣味を有し、特に文才あり、羅馬史論。刑法論綱(九冊)英文佐倉義民傳等の著書あり。

前外務大臣牧野伸顯、伯を評して曰く、林伯は我外交史上看過すべからざる人格なり。第一第二日英同盟に關する功勞は、世人の熟知する所なるが、特に日露戰爭中倫敦に於ける大使としての活動は、眞に没すべからざるものあり。當時倫敦は外交中心、東西兩洋の輿論の接觸點なりしかば、伯は列國の同情を喚起せん爲め、日々新聞雜誌に議論談話を寄せ、其の爲め歐洲列強の同情は糾然として我に歸せり。余は其の後内閣に列せしが、伯の緻密なる頭腦より出づる議論は、常に閣議に重せられ、殊に伯の廣汎なる讀書は我外交をして、常に近代の色彩を帶ばしめしは、明かにして、性質の江戸子的なると相俟つて、外交界の一異彩なりき云々。

成川 尙 義

成川尙義。山邊郡白幡村^{今山武郡鳴濱村}石田治平の次男にして、天保十二年八月を以て生まる。初め禎三郎と稱し、同郡本須賀村成川某の養嗣子と爲り、成川氏を冒せり。家極めて貧にして、少時早くも他家の丁稚に雇はれしといふ。然れども幼にして大志あり、所謂晝耕夜學、潜に劍道をも修め、以て氣運の到る

を俟てり。元治慶應の頃幕政大に紊れ天下騷然たり。會々勝安芳の知遇を得國事に奔走し、維新の後若森縣大參事、新治縣權參事、新川縣參事兼六等判事、宮城縣大書記官、内務省書記官、大藏省大書記官、同省參事官等を経、明治二十二年三重縣知事に任じ、頗る治績を擧ぐ、是より先同縣の地たる肥沃にして産業に適せりといへども縣民多く政論を尙び本業を顧るなし、是に於て縣農會を創立し、諸商社を興し、提撕誘掖縣民始めて實業に嚮ふを知れり。同縣に治たること八年、明治二十九年本官を辞し東京に還り、翌三十年貴族院議員に任じ、從三位勳三等に叙し、後旭日中綬章を賜はる。晚年房總鐵道株式會社長、東京商業銀行頭取等に擧げられ、實業界に雄飛せんとせるの際、疾病の侵す所となり、三十九年十一月長逝せらる、年五十九。(貴族院議員略傳。碑文。山武郡郷土誌。)

吉 原 三 郎

吉原三郎。夷隅郡中川村の人、安政元年を以て生る。明治九年司法省法學生と爲り、十八年判事補に任ぜられる。二十一年再び學生となりて法科大學に入り、二十二年卒業して法學士と爲り、翌二十三年衆議院書記官に任じ、爾來各府縣の書記官或は縣知事を歴任し、内務省地方局長を経て、三十九年一月内務次官に榮進し、同大臣原敬を補けて内務事項を處理し、四十一年十二月

韓國に東洋殖拓株式會社創立せらるゝや、其副總裁に擧げられ、次て總裁宇佐川一正(陸軍中將 男爵)に代り、同會社の總裁に推され、大正五年十一月東京に歿す、年六十三。從三位勳二等にして錦鷄間祇候たり。訃傳るや、生前の功勞を思召され、祭棗料七百圓を賜はる。(國民年鑑。朝鮮公論。)

實業家傳

津田 仙

津田仙。舊佐倉藩士なり、夙に洋學に志し、文久元年福澤諭吉等と共に米國に航し、維新の後開拓使、大藏省等に出仕し、明治六年奧國博覽會事務官として佐野常民に従ひ奧地利に赴き、蘭人につき熱心農事を研究し、歸朝の後、媒助、偃曲、氣筒の三事を傳へんとして、農業三事なる一書を著はし、大に農事の改良を唱へ、明治九年學農社を設立し、盛に農學生を教育し、又農業雜誌及開拓雜誌を發行して、廣く農業思想の發達を促せり。これ我邦農學校及農學雜誌の嚆矢なり。而して農學博士玉利喜造、同博士豊永某、文學博士元良勇次郎等皆此學農社の出身なりと云ふ。明治十年岸田吟香、大内青巒等と謀り、築地に樂善會を起し、訓盲啞院を建設し、力を盲啞の教育にも盡せり。氏は實に我農界の恩人なるのみならず、又基督教界の恩人にして、一時中村正直、新島襄と共に、基督教界の三傑と呼ばれたり。今熱心なる基督教の信者津田梅子女史は、實に津田仙の娘にして十二歳の時米國に留學し、歸朝後女子教育に従事し、現に女子英學塾長たり。氏は、我邦農界に貢獻する所多きを以て、朝廷其功を嘉みし、貴族院議員に

救選す、明治四十一年四月歿す、年七十二。(帝國新立志編。明治大年表。明治英名百首。大日本人名辭書。)

明治英名百首の中

津田仙

一帶青山景色幽。前人田地後人收。後人收得休欣喜。亦有收入在後頭。

西村勝藏

西村勝藏。佐倉藩士西村平右衛門の三男にして、文學博士西村茂樹の實弟なり。天保七年十二月を以て、江戸の佐倉藩邸に生る。武門に生れながら、夙に志を殖産興業に立て、屋号を伊勢屋と呼び、明治三年兵部省の勧めにより軍靴製造を創め、和蘭より技師を聘し、子弟をして傳習せしむ。これ我邦製靴業の嚆矢なり。又自ら歐洲の先進國に航し、親しく各地の工業を視察し、嶄新なる製革機械を購入し、製革法上に一大革新を加へ、又製革副原料たる澁液製造業を設け、進んで米國に製靴所を設け、數百人の職工を使用し、櫻組改良靴の名聲を内外に轟かせり。尙ほ莫大小、硝子及耐火煉瓦製造を企て其改良發達を圖り、今や海外に輸出するの盛況を呈せり。明治十四年十二月工業上の功績を以て、綠綬褒章を賜はり、同二十九年特旨を以て勳五等瑞寶章を授けらる。同四十年一月歿す、年七十一。(大日本人名辭書。印旛郡志。地方資料。小鑑。帝國新立志編。現今英名百首。)

現今英名百首の中

西村勝藏

湊行月とながめて伊勢山の清き社を拜みがてらに

濤川惣助

濤川惣助。魁香と號す、海上郡鶴卷村(一説匝瑳郡岡野台)の人、十八歳の時東京に出て、小間物商を始め、明治十年七寶及陶磁器の改良を企て、三尾地方の陶器製造場を視察し、翌十一年日本橋區新右衛門町に商店を開き、陶磁器及七寶焼を販賣し、専ら海外の輸出を計れり、時恰も佛國大博覽會開設中なりしを以て、同國に輸出し、意外の利益を得たり。然れども我七寶焼の製品外國品に劣れるを知り、力を七寶焼に盡さんと志し、同十二年工場を設け自ら工人を督して、改良を計り、畫を渡邊省亭に囑し、遂に劃線による事なく自由に模様着色等を焼付くる新法を案出せり、世之を濤川七寶と稱す。其技術の精巧なる他に比類なく、明治十四年の内國博覽會に出品して名譽金牌を得忽ち宮内省御用品となりしが、爾來孜孜として苦心經營すること十餘年、過ぎし明治十七年和蘭大博覽會をはじめ、内外國の博覽會或は共進會に出品して賞牌賞状を受けざることをなく、實に我邦七寶焼の泰斗として、國産上に貢獻すること著しく、爲めに明治二十八年綠綬褒章を下賜せらる。二十九年帝室技藝員に任じ同四十三年二月歿す、年六十四。

小倉惣治郎

小倉惣治郎。君津郡富岡村下郡の人、弘化三年を以て生る。家もと宮彫大工なりしが、幼にして父母を失ひ、長ずるに及び、東京に出て、博物館に陳列せる伊國人某の彫塑せる大理石製の婦人像を觀、大に感奮し、これより彫塑を學び、遂に我邦に於ける大理石彫刻の泰斗と爲り、著名の彫刻多し。就中伊藤博文、大隈重信、乃木希典、安田善次郎、林三子雄等の銅像或は原型は共に氏の製作に係り、世の喧傳する所なり。性磊落にして恬淡寡慾、名利に疎しといへども、斯界の率先者として其名高し。大正二年五月歿す、年六十八。

岡本善七

岡本善七。安房郡多田良村の農岡本源三郎の四男にして、天保十二年三月を以て生る。十歳の時より同國勝山町の雜貨商池田某の家に養はれ、日々雜貨を擔ひ、近村を行商すること七年。思へらく男子苟も利財に志す、微々たる行商何をか爲さん、鯨魚を獲るは大海にありと、萬延元年五月潜に養家を出奔し横濱に渡り、洋人經營の倉庫係に雇はれしも、前途有望ならず、一たん郷里房州に歸り、更に江戸に出て、有名なる兩替店山崎屋新七の丁稚と爲れり。安田善次郎の丁稚也爾來忠實に勤勉すること十有一年、大に其主の爲め信愛せられ、慶應三年別に一家を興へらる。然れども主家山崎屋は其後悲運に遭遇し、遂に閉

店するに至れり。善七之を慨き、明治五年五月自から兩替店を開き、更に株式取引所仲買業を營み、今村清之助、澁澤榮一、左右田金作等と往復し、巨萬の富を得たるを以て、前一業を廢し、明治二十三年一月資金參拾萬圓を以て岡本銀行を設立す。營業確實なるを以て都下に信用を博せり。而して利根運河株式會社等の重役と爲り、實業社會に重を措かる、同四十二年十二月歿す年七十。(奮闘立志傳。萬朝報。)

木村利右衛門

木村利右衛門。名は孝治、幼名重太郎、通稱利右衛門、寧靜と号し、上總國望陀郡戸崎村の人、松崎儀兵衛の第三子、天保五年を以て生る。幼にして學を好み、夙に嶺田楓江、安積良齋等に就て儒學を修む。嘉永六年同郡寺澤村木村七平の養嗣子と爲り、里正を務む。慶應二年久留里藩主黒田侯より領内村々の取締役を命ぜられ、後東京に上り商業を營み、明治二年更に横濱に出て、貿易業に従事し、巨萬の富を得。明治十二年以來、神奈川縣會議員常置委員、横濱教育會長、横濱市商業會議所會員等にも選まれ、三十五年貴族院議員に選舉せられ、大正八年八月歿す、年八十三。利右衛門人と爲り、謹嚴重厚、夙に詩文に達し、書畫を善くし、圍碁の如きは既に段に入れり。齡八十

に至るも鏝鑠として壯者を壓するの慨あり。世横濱市の元老重鎮と稱せり。

俳優傳

初代市川團十郎

初代團十郎。下總國埴生郡幡谷村^{今久の人}、堀越十藏の子にして萬治三年を以て生る。初め海老藏と稱す^{俠客唐犬重右衛門の名くる所。同人幼少の時より家を去り、諸所は流浪し、市川の渡守に雇はれ、後江戸に出で、一時人夫と爲りしが、天性演劇に興味を有し、口上といひ、舞踏といひ、往々衆人を驚かしむ。是に於て身を俳優に投じ、舞臺に現はるゝや、常に喝采を博し、名聲都下に鳴れり。我演劇中始て曾我狂言を演じ、三ヶ津荒事を開創し、一代の大家と稱せらる。寶永元年二月鼓打某の爲殺害せらる、時に年四十五。團十郎俳諧を嗜み、元祿六年京都に上りける時、俳人才磨の門に入り、俳名を才牛と号せり。これ役者俳名の嚆矢なり。子九藏十歳の時より舞臺に上り、十七歳の時父の横死に遭ひ、二代目團十郎を嗣ぎ、名聲を海内に轟かさんとて、下總成田不動明王に祈誓せり、これより家號を成田屋といふ。(俳優世々の接木。大日本人名辭書。帝國人名辭典。印旛郡誌。)}

初代松本幸四郎

初代幸四郎。香取郡小見川の人、延寶三年を以て生る。元祿の初め江戸に出

て久松多四郎の門に入り、俳優と爲り、初め小四郎と稱し、女形を得意とせり。元祿十二年女形より立役に轉じ、享保元年松本幸四郎と改め、實惡の名聲を博せり。同十五年三月歿す、年五十七。(二代目團十郎と同時代にして平素頗る親交せりと云。役者大全。名人忌辰錄。大日本人名辭書。帝國人名辭典)

力士傳

小柳常吉

小柳常吉。市原郡上高根村の人、文化十四年八月を以て生る。初め高石桂治と稱す。十一歳の時江戸に出で力士阿武松緑之助の弟子と爲り、小緑と稱す。文政十二年三月將軍家齊より賞與を賜はり、名聲を博す。天保九年三月小柳常吉と改め、嘉永四年三月大關に昇る。安政元年相撲を罷め年寄となり、師名を襲ひて阿武松と稱す、時に年三十八。同五年三月江戸に歿す、享年四十二。(上總町村誌。市原郡誌。)

境川浪右衛門

境川浪右衛門。東葛飾郡高野村の人、天保十四年を以て生る。幼時江戸に出で新川酒問屋小西屋の丁稚奉公中、時の力士境川の爲め、其偉大なる體格と力量とを認められ、同力士の弟子となり、小西川と名乗れり。爾來頻に名聲を高め遂に播州姫路侯に抱へられ。次で尾州侯の抱力士と爲れり。明治二年の春一躍して關脇に進み、翌三年大關に昇り、師名をつぎ境川浪右衛門と改め同十年横綱の榮譽を得たり。十四年一月引退して年寄と爲り、二十二年病歿

す、年四十七。

初代高砂浦五郎

初代高砂浦五郎。本名山崎伊之助と稱し、舊山邊郡大豆谷村の農山崎金兵衛の男にして、天保九年十一月廿日を以て生る。幼にして父を喪ひ家極めて貧なり。安政五年感ずる所あり、江戸に出て年寄阿武松庄吉の門に入り、東海大之助と改め、阿武松歿後、千賀浦につき松ヶ枝鶴之助と稱し、慶應元年酒井侯に召抱へられ、名を高見山大五郎と賜はり、明治元年更に高砂浦五郎と改名せしめらる。同二年の冬幕内に入り、同四年の春前頭筆頭に進み、同六年に至るまでその位置を占む。力士としての技倆は敢て非凡と稱するに足らざるも、十年間に負けし事僅か十三回のみなりしといふ。而して頭腦頗る明晰にして氣骨に富み、相撲界に於ける從來の舊例悪慣を打破し、積弊を一洗せんと欲し、明治六年同志と共に一大革命を企て、堂々として多數黨に反抗し、京坂の力士と氣脈を通じ、努力すること前後六年、同十二年漸く和解して營業内規十二條を設け、高砂の理想を貫徹するを得たり。是に於て銳意相撲界の刷新を圖り同十六年相撲協會の取締役に推舉され、斯界の全權を掌握せり。同十七年三月芝延遼館に於て、畏くも天覽相撲の光榮を忝ふし、相撲界をして益々發展向上せしめたり。同三十三年四月歿す、年六十一。世相撲界の軍師

と稱し、實に明治相撲界の元老重鎮たり。門下頗る多く就中横綱西ノ海、同小錦等最も著はる。

木村 瀬平

木村瀬平。幼名留吉、下總國岡田郡豊岡村の人、芝崎忠左衛門の四男にして天保八年を以て生る、七歳の時、十二代木村庄之助の門に入り、木村庄五と名乗り、相撲行司を學べり。嘉永四年十二代將軍家治吹上庭園に於て相撲上覧の時、美音を以て言上の役を勤む。明治十七年三月濱離宮に於て天覽相撲の節土俵を勤む。同年木村瀬平の名跡を継ぎ、年寄と爲る。二十七年一旦行司を辭し、年寄専勤となりしが、同業者の勧誘する所と爲り、再び行司と爲り土俵に出づ。瀬平人となり、氣骨あり、相撲界に畏敬せらる、三十八年十二月歿す、年六十九。(時事新報)

房總之偉人 (終)

房總之偉人

追加

房總之偉人追加目次

女傑

萬の方……………一梶の方……………二

仁術家

田丸健良……………三

詩人

遠山雲如……………五

儒學者

嶺田楓江……………七
岡三慶……………二〇

並木栗水……………九

力士

戸田川秀五郎……………二
鳳凰馬五郎……………三

二代目高砂浦五郎……………三
小錦八十吉……………二四

目次

目次
實業家

高木與兵衛……………五
江澤金五郎……………六
福原有信……………七

政治家

木内重四郎……………九
關和知……………二〇

藝術家

松崎藏之助……………三
井上密……………三
八代國治……………三

房總之偉人

追加

女傑

萬の方

萬の方。上總勝浦城主正木左近太夫邦時の長女にして、天正五年四月四日を以て生る。父邦時里見義頼の弟梅王丸を擁し、義旗を擧げて義頼に反抗せしが、敗戦して伊豆に逃れ、同國賀殿の領主蔭山氏廣に頼りて妻子を託し、安房に歸り、義頼に降服し、環齋と號し、長狹郡に隱遁せり。萬の方蔭山氏の養女となり、文祿二年十月十七歳の時、徳川家康の侍女となり、寵愛を受け、慶長七年三月頼宣〔後紀州侯〕を伏見城に生み、翌八年八月頼房〔後水戸侯〕を駿府に生めり。これより世人蔭山殿と尊稱せり。萬の方人と爲り、容儀端正、資性聰穎、嘗て加藤嘉明の舊臣塙團右衛門直次の不遇を憐み、年々鏡臺金二萬兩づゝを支出し、直次に給し、以て紀州侯に仕へしめしと云ふ。又家康に従ひ、伏見城に在るの頃、妙滿寺住職日重上人の説教を開き、深く日蓮宗に歸依し、日乾、日遠兩上人の教化を受け、寺院を創設し、僧侶を養成する等、

女傑

日蓮宗教上に貢献する所頗る多し。元和二年四月家康薨するや、髪を削り、蓮華院と號し、後養珠院と改め、承應二年八月を以て歿す、年七十七。兄正木爲春紀州侯に仕へ、三浦長門守と改め、祿二萬石を給はり、藩老たり。

因にいふ。家康の侍女別に萬の方一人あり、即ち永見吉英の女にして、結城秀康の母なり。三代將軍家光の側室に萬の方あり、六條宰相有純の女なり。十一代將軍家齊の妾に萬の方あり、平塚某の女なり。

梶の方

梶の方。太田康資の次女にして、天正六年十一月九日を以て、安房國小湊に生る。康資新六郎と稱し、太田道灌四世の孫にして、江戸城主遠山丹波守直景の女を娶り、祖先よりの名聲を復せん欲し、安房に來り、里見義弘と謀り、北條氏康と鴻台に戦ひ、大敗して、安房に歸り、小湊に隱棲せり。康資の妻遠山氏、梶の方を同國勝山城主安西氏に託し、已は尼と爲り、江戸平河法恩寺に住居せり。天正十八年八月徳川家康關八州を領し、普く八州の舊族を招くや、梶の方安西氏に伴はれ、家康に謁し、其儘侍女となれり、時に年十三。爾來關東名門の出として、優遇を受け、慶長五年九月關ヶ原の役、家康に従ひ、出陣し、駿馬に跨り、雉刀を振り、奮戦し、戦終りて後、名を

勝と改む、時に年二十三。同十年市姫を駿府に生み、早世せられ、十二年正月再び松姫を生みしも、僅か四歳にして夭折せしかば、池田輝政の女を養ひ、又親友萬の方〔正木氏〕の生める徳川頼房を養ひ、慰安を求めたり。元和二年四月家康薨するや、髪を削り、英勝院と號し、佛門に歸せり。萬の方人と爲り、勇義に富めり。嘗て春日局の竹千代君擁立の爲め、駿府に赴き、家康に訴ふや、萬の方其間にあり、斡旋最も努む。故に將軍家光の畏敬する所となり、終身優待せらる。寛永十九年八月歿す、年六十五。因にいふ萬の方の父太田康資は、天正九年十月小湊に歿し、今猶同地誕生寺境内に太田堂あり。

仁術家

田丸健良

田丸健良。幼名萬之丞、無著庵又は松庵と號し、夷隅郡國吉町今關區の人。安永三年五月十二日を以て生まる。幼にして學を好み、餘念なし。十四歳の時父を失ひ、伯父庄兵衛に鞠養せらる。十七歳の時、既に經書文選左傳等に通じ、詩歌俳諧をよくせり。二十二歳の時、慈母に別れ、深く死の悲哀を歎

じ、二十三歳の時、醫師と爲り、廣く衆生を救はんご欲し、江戸に出で、阿波徳島藩醫富永健章の門に入り、刻苦勵精して醫術を研究し、蘊奥を極め、其師健章より、健良の名を與えらる。學成るの後郷里に歸り、醫を業とし、懇切に患者を取扱ひ、毫も貧富の差なし、否寧ろ貧民に對して良薬を用ゐ、一日も早く快癒して、速に職業に就かんことを希へり。患家より報酬あれば、直に之を囊中に投じ、數日の後攪拌して之を收む。人怪しんで其故を問ふ、對へて曰く、人誰れか慾念なからん。予亦無慾にあらず、若し報酬の多寡により、治療に差別を生ぜんか、これ醫道の本旨に逆ふ也、故に予は之が報酬を改めざるなりと。常に人に語つて曰く、醫家は、財産の多きを以て富貴と爲さず、薬種の多きを以て、富と爲すと。嘗て自ら座右の銘を作り、楣間に掲ぐ、曰く「醫業不可怠、看病可哀憐、臨貧莫慳藥、望富勿貪錢、有過可向己、有功可歸天、鹿服且蔬食、減内外自全」云。四十五歳の時、佛門に入り、東叡山淨名院聖寶大和尚より、八齋戒及菩薩戒を受け、其後慈雲大和尚より、見性の戒名を授けられ、常に頭を圓め、僧衣を纏ふて患家に出入し、若し重病にして、到底人力を以て治す能はずと思ふ時は、潜に神佛を默禱し、其冥助を求めて後、薬劑を投ず。誠意既に斯の如くなれば、其診斷治療共に他醫の及ぶ所に非ず。晩年家塾を開き、附近の子弟を薰陶す、郷黨皆其徳を慕へり。

健良の寛仁宏度は、蓋し天性と修養とに出づ。嘗て盜あり、一夜健良の室に入り、窃に蚊帳を掠む。健良眠むれども、之を追はず、盜去るの後、家人に告げて曰く、今盜來り、蚊帳を掠む。憫むべし、彼れ貧困にして、蚊帳を購ふの資なからむ。我家別に一帳あり、幸ひ蚊軍の襲撃を免るご。健良人と爲り、温厚にして謙抑を旨とし。たゞに醫道に造詣深きのみならず、學和漢を兼ね、漢詩に通じ、和歌特に道歌をよくし。又地理歴史に興味を有し、同郡の篤學者中村國香の編述せる房總志料を基礎と爲し、普く總房三州を巡歴し、名所舊蹟を探り、長老に問ひ、古書に徴し、房總志料續篇十四卷を著はし、郷土誌に貢獻すること頗る大なり。弘化三年九月二十一日を以て、故郷松庵に永眠す、年七十二。著はす所、醫學心法、傷寒論、(註解)素問必用、三千方推古考、藥品考、本草綱目改正(以上醫學用)天台八祖傳、經穴分寸歌、西方紀行詩集、極樂道中日誌、壽毛錄等あり。

詩人

遠山雲如

詩

人

五

遠山雲如。名は澹、字は子發、雲如或は裕齋と號し、江戸の富者小倉大輔の第三子にして、文化七年を以て生まる。母は長生郡東郷村千町區字六野、遠山傳兵衛の女にして、終世母方の附籍と爲り、遠山氏を冒せり。雲如幼にして學を好み、神童と稱せらる。夙に大窪詩佛、菊地五山、市川寛齋諸老の門に遊び、詩學を修め、又長野豊山の門に入り、經史を研究すること數年、學業大に進み、幕府の倉吏と爲れり。然るに雲如人と爲り、豪宕にして細事を顧みず、且つ寡慾廉潔にして、僚友と相諧はず、遂に職を辭し、暫く小倉氏の別荘に寓居し、文人墨客と交はり。吟咏自ら娛めり。時に美濃の詩傑梁川星巖翁江戸に來り、詩社をお玉ヶ池畔に設け、玉池吟社と稱せり。雲如之を聞き、欣然往て詩法を叩き、其蘊奥の深きに感じ、翁に親炙すること數年、交情父子の如し。雲如の詩に於ける、即ち天性に發し、高遠にして清淡を極む、年甫めて十六、實内奇詠を著はし、詩名を高め、良師星巖翁に従ふに及び、詩才旭日の昇るが如く、嶺田楓江、大沼枕山、小野湖山と共に、星門の四天王と稱せらる。然るに雲如花柳界に出入し、家産を蕩盡し、貧に處して晏如たり。後母の郷里南總に徙り、九十九里海濱なる一ツ松村蟹路に卜居し、漁叟蜒婦に伍し、朝夕吟咏の傍、附近の子弟を教へ、其間蟹紅魚白集、總房漫游集、海灣卜居集等を著はせり。又日光、赤城、金洞の諸勝を探り、晃山

游草を記し、相州に入り、湘雲集の著あり。再び東總に歸り、本納に閑居すること一年有半、偶舊師星巖翁京師にあり、雲如を招く。是に於て雲如妻を携へ、京都に赴き、翁と隣居して、翁の教授を助く、安政五年九月四日翁國事に殉じて自殺す、雲如怏々として樂しまず、翁の室紅蘭女史と相議し、師の遺帷を守り、俱に教授すること三年。文久元年六月を以て歿す、年五十一。京都南禪寺なる先師星巖翁の墓側に葬る。雲如京師に寓居するの間、淡路、飛彈、越前等に遊び、京塵集、嶋雲漁唱、棧雲集、湖雲岳雪集等の著あり。

遠山雲如。頃者從居於蟹路村。遍其堂曰、蟹紅魚白處。寄新吟一百首、請題言。乃爲賦長句四韻二篇、

一家多住水雲區。免被紅塵土汚。豈止馬鄉爲地主。也知彭越是生徒。斜風細雨有時有。間吟冷醉無日無。兒解弄舟妻結網。宛然漁樂小橫圖。

徒寓干帆丘驛戲題其壁 遠山雲如
 饑走十年窮更加。愁看秋月與春花。前身或是烏衣客。又入尋常百姓家。

儒學家

嶺田楓江

嶺田楓江。諱は雋、字は士徳、通稱右五郎、楓江と號し、丹後國田邊藩士嶺田矩俊の第二子にして、文政元年を以て、江戸の藩邸に生る。幼にして學を好み、佐藤一齋、林復齋等に就き、經史を修め、算作元甫につき、蘭學を學び、又清水赤城に従ひ、兵法を習ひ、最後に梁川星巖翁の門に入り、詩學を研究し、儕輩に傑出し、大沼枕山、遠山雲如、小野湖山等と共に、梁門の四傑と稱せらる。然れども素憂國の士なり、區々たる文學に拘泥するを屑とせず、二十五六歳の頃、飄然北海に浪遊し、蝦夷地開拓の意見書を時の閣老に上り、頻に頼三樹、梅田雲濱、清川八郎等と往復し、盛に國事を論じ、嘉永二年十月海外新話五卷を發行し、阿片戦争の顛末を述べ、暗に當路者を諷刺したるを以て、幕府の忌諱に觸れ、獄に投ぜらる。同四年正月赦免せらる、も、猶三都構を命ぜらる。是に於て、南總に遊び、暫く請西村に卜居し、風雲を待てり。同六年米國の艦隊浦賀に來り、互市を乞ふや、尊王攘夷の説盛に起れり。楓江憂國の情禁ずる能はず、江戸に出て、閣老安藤對馬守に謁し、世界の氣勢を説き、自らの意見を開陳せしに、閣老其言を容れ、謀議に參與せしめらる。安政二年一たん田邊藩に歸り、文久三年十一月再び請西村に來り隱棲せり。元治元年幕府征長の軍を起すや、田邊藩に召され、日夜軍謀に參與せり。明治維新の後、教育を以て、人材を養成し、以て邦家に報るんと決し、家塾を開き、西總地方の

子弟を教化すること七八年。同八年九月東總地引村乃有學舎に聘せられ、同十年十一月更に茂原贊化學校に轉じ、同十二年同校廢絶により、西總貝淵村に移り、有餘學舎を開き、同十四年東隅郡布施村井上氏の懇望により、同村薰陶學舎に來り、老軀を提げ、再び東總の子弟を教養し、同十六年十二月同地に歿す、年六十七。著はす所、海外新話五卷、千葉縣古事誌二卷、房總雜記二卷、楓江遺草一卷、楓江遺稿一冊あり。楓江維新前西總に來り、早くも家塾を開き、青年子弟を薰陶すること前後三十年、教を受けしもの幾百千なるを知らず、其遺績頗る顯著なりとす。明治十四年壽藏碑を木更津八幡神社境内に建てられ、同四十三年其紀念碑を茂原町公園に設けられ、大正十三年一月御慶事に際し、正五位を贈らる。亦以て光榮といふべし。

並木栗水

並木栗水。諱は正詔、字は潜庵、通稱左門、栗水と號し、香取郡久賀村御所台の人、家世々醫を業とす。栗水文政十二年を以て生まる。幼にして學を好み、神童と稱せらる。夙に江戸に出て、訥庵大橋順藏の門に入り、孜々汲々として、經義を研究し、蘊奧を極め、推されて大橋塾の監督と爲り、後進（川田剛

等)を誘掖すること、尤も懇切なり。故に其師順藏の深く愛する所と爲れり。適父の命により郷里に歸り、塾舎を設け、螟蛉塾と稱し、隣里郷黨の子弟を教育す。遠近徳を慕ふて從學するもの多し。栗水人と爲り、溫良篤實、品行正端、専ら其師大橋訥庵の主張せる朱學を守り、毫も他説を交へず、併かも洋學を容れず、時勢に従はず、終身結髪して、洋服は勿論、洋傘洋帽を用ゐず、況んや曲學阿世の徒を憎むこと甚だし。易に曰く、王侯に事へずして其事を高尙にす。蓋し栗水に於て之を見るべし。友人川田鸞江、栗水を評して曰く、聖賢の言に根據して、性理の蘊奥を發揮す、何等の學識ぞ、文章も亦齊整にして、條理井然として紊れず、昔人云ふ斯徳有る者は、必ず斯言あり、信なる哉と。所謂郷黨の隱君子なり。大正三年七月歿す、年八十六。著はす所宋學源流質疑三卷、周易私斷増補十卷、性論一卷等あり。

栗水學を以て東都に立たんか、大儒として名聲を博せしならんも、早くも僻地に退隱し、生涯地方の子弟を教養して樂みと爲せり。故に北總地方の名士其門に出づる者多し。就中文學博士林泰輔、大審院判事寺島直、貴族院議員五十嵐敬止、衆議院議員大須賀庸之助、同菅澤重雄等主なる者なり。

岡 三 慶

岡三慶。名は道、字は明卿、十段居士又は自由翁と號し、夷隅郡上野村大森の人、松崎久五郎の次男にして、天保七年六月を以て生まる。家世々里正にして農を業とす。三慶夙に江戸に出て、豊前中津藩醫岡三甫に就て、醫術を學び、遂に其師三甫の養嗣子と爲れり。一説に醫たるを欲せず、京都に赴き、森田節齋の塾僕となり、薪水の勞を執りながら苦學すること十餘年、江戸に歸り、帷を下し、擇善塾と稱し、諸生を教ゆ。後中津藩出身福澤諭吉方に寄食すること十年許り、更に南總に歸り、夷隅郡長志村に私塾を開き、附近の子弟を教ゆること數年、傍ら著述に従ひ、八十餘歳の高齡を以て歿す。妻は則ち舊師三甫の女にして、二男二女有り。弟久左衛門生家松崎氏を嗣げり。三慶人と爲り、天資俊邁、心事磊落、常に清貧に甘んじ、晏如たり。また近世の奇人といふべし。

カ 士

戸田川秀五郎

戸田川秀五郎。長生郡五郷村綱島の人、井桁三郎兵衛の長男にして、寛政四年を以て生る。幼にして軀幹長大、よく肥え、頗る膂力あり。同村の路傍、地藏